

ホロと幻の美形

ただのRyo

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿

拙い文章だったり、ご都合主義だらけかもしれませんがご了承を

ホロライブと幻の美形のクロスオーバー

作者が一番好きな優しい？つきとホロライブメンバーの絡みを書いていこうと思います。

ギアス要素を含む予定ですが、キャラクターを出すかは検討中。
ライ君とどの娘をくつつけるか決めました。(8/16)

目次

總帥	111
襲来	103
級友	97
図書館	91
遊戯女王	84
銀狼	77
全員集結	71
勉強会	66
礼拝堂	60
生徒会室2	55
生徒会室	50
契約	46
食事会	41
星街姉街	37
体験入部3	32
体験入部2	28
体験入部	24
生徒会	20
学園生活開始	16
学園探索2	11
学園探索	8
理事長室	5
転入生	1

番外編 6	234
番外編 5	229
番外編 4	221
番外編 3	216
番外編 2	210
番外編	206
番外編	
学園祭 8	199
学園祭 7	193
学園祭 6	188
学園祭 5	181
学園祭 4	175
学園祭 3	168
学園祭 2	162
学園祭	156
四つ葉	146
試験	137
保健室	127
記憶	120

転入生

「ここがアツシユフオード学園か…」

僕、皇ライはこの私立アツシユフオード学園に転入することになった。

…私立アツシユフオード学園…

トウキョウ租界の中でも一番の広さを誇る学園。

学内に初等部、中等部、高等部、大学部があるので学生だけでもかなりの人数がいる。

ただ大きいだけの学園ではなく特徴的なのが、この学園の理事長の理念でもある、いかなる人種でも入学を受け入れるという点だ。

辺りを見渡すと一般的な人間だけではなく、

見た目は人間だが実際のところはロボットであったり、動物の耳や尻尾が特徴的な獣人、大きい耳が特徴なエルフなど多種多様な人種が存在している。

僕自身は普通の人間であり、よく知り合いからは銀髪が目立つと言われるが、ここの学園の人達の中ではそこまでは目立たないと思うので安心した。

「さて、まずは理事長室に向かうか」

僕がこの学園に転入してきたのは理由がある。

その理由とはこの学園の理事長から凄く気に入られてしまっているということだ。

実は理事長と僕の母が古くからの友人で、僕も小さな頃からよく顔を会わせていた。

その度に僕をこの学園に通わせないか、と母に強く薦めていた。

僕は理事長から学園の資料などを見せてもらった時に多種多様な生徒がいることに興味を持った。

先ほど僕の特徴で髪が銀髪であることを説明したが、この銀髪の為か、通っている学校では生徒や教師からは驚かれたり、奇異な目で見られることが少し多かった。

僕の母は日本人だが、父親はもうおらず、異国の人間だったようで、僕が銀髪なのはその影響だ。

僕に向ける視線が悪意があるものではないことは理解をしていたが、学校での居づらさを感じていた。

母には僕が学園に興味を持っていたことを打ち明けると、微笑み理事長と掛け合ってくれた。

これが僕がこの学園に転入してきた理由だ。

そんなことを考えながら学園内の廊下を歩いていると、僕の後ろから誰かが走っている音が聞こえてきた。

「やっぱあい！遅れるにええ!!」

「もうー！みこち早くしてよー!」

綺麗な水色と鮮やかなピンク色の髪の2人組が僕の横を走り去っていくと、

水色髪の子の制服のポケットから水色のハンカチが零れ落ちたのが見えた。

「あつ！待ってくれ!」

落としたハンカチを拾い上げて、走り去っていく2人に僕は声を掛けた。

「ん?」

「にえ?」

2人が急ブレーキを掛けるように減速すると、そのまま立ち尽くしてしまった。

「え?えつ?誰あの銀髪イケメン?みこち知ってる?」

「ううん、みこは知らないにえ」

何か話しているようだがあまりよく聞こえなかった。

取り敢えず落としたハンカチを渡そう。

「呼び止めてすまない。今、君がハンカチを落としたから渡そうと

思って」

そのままハンカチを差し出した。

「え？あつーほんとだ！」

ハンカチ落とした子がポケットに手を入れて確認していたが、落としたことに今気づいたようだった。

「ありがとうー！これ姉街から貰ったものだから大事なやつだったんだ」

ハンカチを渡しながら気になる言葉があった。

「どういたしました。姉街？」

姉街、という単語に首を傾けていると、

「プークスクス、すいちゃんハンカチ落としちゃうなんてドジっ子だにえ〜」

一緒にいたピンク髪の子がニヤニヤしながら笑っていた。

「ああん？みこちが寝坊してHRに間に合わないかもしれないから走るようになったんだから、もとはといえればみこちのせいじゃん!!」

「そ、それとこれは関係ないもん！」

どうやらHRに間に合わないから走っていたらしい。

2人が目の前で言い争いを続けていると、僕がいるのを思い出したのか途中で止まった。

ハンカチを落とした子は僕を見ながら話しかけた。

「そういえば君この学園で見かけたことないね？もしかして転入生？」

「ああ。今日からこの学園に転入する予定だったんだ」

「なるほどにえ〜。だから見たことがなかったんだにえ」

2人は見かけたことがない僕の存在に納得してくれたようだ。

「私は高等部3―Aの星街すいせい！よろしくね！」

「同じく3―Aのさくらみこだにえ〜」

「クラスはまだ聞いていないが、2年の皇ライだ。よろしく先輩方」

お互いの自己紹介を終えて、2人が1学年上の先輩であることが判明した。

ちょうど自己紹介が終わると、学校のチャイムが全校に鳴り響いた。

「あっ！やばい!!」

2人が本来の目的に気づき、再び走り出した。

「じゃあまたねライ君！学園内で会ったら声かけてよ！」

「今度会ったらみこ達のクラブを紹介するにえ！」

走り去っていく様子を見て2人に向かって手を降った。

あつという間の出来事であったが、この学園で2人の知人ができたことは運が良かったのかもしれない。

(また近いうちに会いそうだな)

僕は心の中で呟き、そのままの足取りで理事長室に向かった。

理事長室

学園の廊下をずっと歩いていると目的地に辿り着いた。

「ここが理事長室か。それにしてもとても長い道のりに感じたなあ…」

学園内がかなり広いため到着まで少し時間を費やしてしまった。

先ほど知り合いができたばかりだし、今度道案内でもお願いしてみようと思う。

理事長室のドアの前に立ち、ノックをした。

「どうぞ。」

男性の声が中から聞こえて、ドアが自動的に開いた。

「失礼します。」

ドアが開かれ入室許可を得たため、そのまま入室した。

「おおーライ君よく来てくれたね!!」

「どうも。お久しぶりです、理事長。」

手を差し伸べられたので握手に応じる。大きく力強いが、優しさを感じられる手だ。

そう、僕の目の前にいる温和な男性がこの学園の理事長、谷郷・アツシユフオード・元昭。

以前も説明をしたが、僕の母の古い友人で、僕が幼い頃から顔をよく合わせて話もしていた。

とても気さくで優しい人で、僕をこの学園に転入させてくれた人でもある。

「いやーライ君がこの学園に転入してくれて本当に嬉しいよ。来たばかりだがこの学園はどうだい?」

「理事長からお話を伺っていたよりも、学園がかなり大きくて驚きました。それと少ししか確認していませんが、想像していたよりも色々な人種がいることにすごく興味を持ってました。」

「ははは、確かに他の学園に比べるとうちはかなり広いからね。でもそのうち慣れるはずさ。最近は獣人だけではなく、天使や悪魔、あとはドラゴンもいるって噂だよ。」

「多種多様な生徒がいるとは聞いていましたが…まさにファンタジーのようですね。」

天使や悪魔は何となく想像できるが、ドラゴンはどのような姿で過ごしているのだろうか…

大きさからしてかなり目立ちそうだが、姿形を変えているのだろうか。

「あ、そうそう、ライ君にこれを渡しておかないとね。」

そう言っただけで理事長は僕に大きな封筒を手渡してきた。

中身を確認すると、学園の手続きに必要な書類と学生証でもあるIDカードが入っていた。

「その中のIDカードで学園内の施設の入室だったり、食堂も無料で利用できるから自由に使ってくれ。一部の施設は教師にしか入れない場所はあるが、僕や教師からの許可が下りたら入室することもできるよ。ちなみにこの学園の屋上は許可がいるけどライ君のカードは既に権限を付けているから行ってみるといいよ。」

「凄い便利な機能がついていますね。権限の付与もありがとうございます。」

このIDカードを無くすとかなり困りそうだ…無くさないように気を付けよう。

IDカードを確認すると、僕の顔写真と名前、クラスが記載されていた。

僕のクラスは…2—Bか。後で教室の場所を確認しておかないといけないな。

「今日は転入手続きを終えれば後は自由時間だ。好きにこの学園を見て回るといいよ。最後にライ君は寮生活を希望していたが、ちょうど寮室に空きがなくてね…その代わりに学園内のクラブハウスの一室を空けることにしておいたよ。そこにライ君から送られてきた荷物を置いてあるからぜひ自由に使ってくれ。」

「色々手を回してもらって…本当にありがとうございます。」

「気にしないでくれ。僕はライ君がこの学園に来てくれて本当に嬉しいんだ。是非この学園の人達とたくさん関わって、君にとっていい経

験になることを願っているよ。」

「ありがとうございます。では僕はこれで失礼します。」

僕は最後に理事長に一礼をし、部屋を退出した。

提出が必要な書類の提出が終わり、どこから学園内の探索をするべきかを考えながら廊下を歩いていると、

「あれ？ライ君？」

「ん？」

声を掛けられたので振り向くと、朝に出会った水色髪の少女がいた。

「君は…星街先輩？」

「先輩って何だかむずがゆいなあ…すいせいって呼んでよ！」

「そうか？なら遠慮なく。すいせい、君はどうしてここに？」

「いやあ、みこちが補修で教室に残ってて、待つの暇だから学園内を歩いていたんだけど、そうしたらライ君が歩いているのを見かけたから声掛けちゃった。」

「なるほど、学園に知り合いが少ないから声を掛けてくれて嬉しいよ。」

「えへへーそうでしょそうでしょ。ちなみにライ君は何をやってたの？」

理事長室に行き、書類の提出を終えたので、学園内を探索しようとしていたことをすいせいに伝えると、

「そつかあ、じゃあ私暇だし、学園を案内してあげようか？」

「それは凄くありがたいんだが…いいのか？」

「いいのいいの！それに朝ハンカチを拾ってくれたことだし、そのお礼をさせてよ！」

「じゃあ…せっかくだしお願いしてもいいかい？」

「決まりいーじゃあ早速行こうよ！」

すいせいは夜空の星のように明るい笑顔を見せ、僕の手を引っ張りながら走り出した。

学園探索

すいせいに学園を案内してもらえたことになったため一緒に廊下を歩いている。

「ちなみにどこを案内してくれるんだ？」

「んーそうだなあ、一応教室と食堂、あと寮を案内するつもりだけど、歩いてて気になるところがあったら言つてよ。案内してあげるから。」

「ありがとう。ここの学園凄く広いから、必要な場所だけでも案内してもらえるのは助かるよ。」

「いいっていいって、転入生じゃなくてずっとこの学園にいる生徒でもまだ全部の場所を把握していない人もいるくらいだからね。」

すいせい話を聞いていると、この学園で迷子にならないか不安になってきた…

僕は記憶力がいい方だと思うが、忘れないようにしつかり案内を聞いておこう。

そんなことを考えていると最初の目的地、教室についた。

「ここが教室だよ。ライ君は2年生だからフロアはこの2階だね。」

「なるほど、学年によってフロアが違うのか。」

「そうそう、私やみこちは3年生だからこの上のフロアだね。階段上がるとすぐだから今度遊びに来てよ。」

「分かった。お邪魔することにするよ。」

「うんうん、せっかくだし教室の中も入ってみようか。」

すいせいの提案で教室の中も入ってみることにした。

教室のドアの前のスキャナーにIDカードをかざすとドアが開かれた。

今の時刻は夕方、既に放課後の時間となっており、街に繰り出していたり、クラブ活動をしていたりする生徒が大半のため、教室に残っている生徒は少なかった。

「まあ、今は放課後だから生徒は少ないかあ…ん？あれつて…」

「どうしたんだ？」

すいせいが何かに気づいたようで教室の中を歩きだした。すると机の上につ伏している生徒の前で歩きを止めた。

その生徒の髪は紫がかつていて、よく見ると頭に耳が生えており、腰からは尻尾が生えているのが見えたので、おそらく獣人の生徒だろうか？

「あー！やっぱりおかゆちゃんじゃん！」

「うーん…なあにい…？あれれ？すいちゃん？どうして2年生の教室にいるのー？」

すいせいにおかゆと呼ばれていた生徒は大きなあくびをしながらむくりと体を起こした。

「今日この学園に転入してきた子がいてさ、ちやうど教室を案内してたんだよ。」

「なるほどねーすいちゃんは優しいなあ。あつ、君がその転入生？」

「ああ、皇ライだ。」

「わーお凄いイケメンだねえ。初めまして2ーBの猫又おかゆです。よろしくねライ君。僕のことはおかゆって呼んでねー。」

「僕も2ーBだ。こちらこそ明日からよろしく頼む。」

明日からの学園生活でクラス内に友人が作れるか不安だったが凄く安心できた。

「ところでおかゆちゃんは何で教室に残って寝てたの？」

「ころさんが補修で残ってさー、それを待ってたら寝ちゃってたんだよ。」

「ころねちゃんもか…私もみこちが補修で教室に残って暇だったから彼を案内してたんだよね、みこちはもうすぐ終わると思うけど…」

「ころさんは2教科の補修だからねー、もうちよつとかかかると思うから僕は教室で残ってるよ。」

「オツケー、じゃあまた彼の学園内の案内を続けてくるよ。」

「気を付けてねー、ライ君もまた明日教室でねー。」

「ああ、寝ているところを起こしてすまなかった。」

新しくできた友人おかゆと別れ、学園探索の続きが始まった。

食堂はかなり大きく、学園の生徒が全員入れるのではないかと思えてしまった。

メニューもかなり豊富で、これを無料で提供してもらえるのは本当にありがたい話だ。

すいせいのお話ではメニューに載っていないものでも、リクエストを出せば提供してもらえることもあるらしい。改めて規格外の学校だと感じた。

ちようど食堂の案内が終わった直後に、朝に出会ったピンク髪の少女が合流してきた。

「うう…、死ぬかと思ったにえ…」

「みこち遅いよ！どんだけ時間かかてるのさー。」

「だってえ…にえ？朝の銀髪イケメン君だにえ？」

「どうも。さくら先輩。」

「！先輩…！いい響きだにえ…まあにえ！みこはエリートだからにえ！」

「ああーライ君みこちにも先輩はつけなくていいよ。つけると調子に乗ると思うから。」

「そうだったのか、よろしくみこ。」

「なんでだよ!!っていうかライ君も切り替えが早すぎるにえ!!!」

さくら先輩…みこの絶叫が学園内に響き渡った。

学園探索2

みこと合流した後、その足取りで寮に向かった。

寮もかなりの大ききで、寮に食堂はないが、寮の隣が学園の食堂なので何も不便はないように見えた。

IDカードで寮に入室している様子も見られたのでセキュリティも万全そうだ。

「ここが生徒が使っている寮だね。私は姉街と一緒に住んでいるから寮生活はしていないけど。」

「寮もかなり大きいな…姉街っていうのはお姉さんのことかい?」

「そうそう、最近帰るのが遅いと口うるさいんだよねえ…」

「それはすいせいのことを心配しているだけじゃないのか?大切にしてくれているいいお姉さんだと思うけど。」

「そ、そうかなあ…なんか恥ずかしいや…」

すいせいは僕の発言に少しだけ顔を赤くしていた。

確かに他人から家族に大切にされていることを指摘されると恥ずかしさがあるのかもしれない。

「みこはこの寮で暮らしてるよー。学園の周りのマンションの一室並に広いから快適だにえ。」

「そういえばライ君は寮生活?それとも学園外のお家?」

「でも今って寮室満員じゃなかったっけ?」

「いや、僕の実家はキョウトにあるから1人暮らしで寮生活をする予定だったんだけど、理事長から寮室の空きがないって説明をされて、代わりにクラブハウスの空き室を使ってくれと言われてるんだ。」

「まじで!?クラブハウスってかなり部屋とか施設充実してなかった!?!」

「確か寮よりもかなり快適って噂だよ!!…YAGOOめ…イケメンには甘いにえ…」

「そうなのか?まだ行っていないからわからないが…」

そう伝えるとすいせいとみこは顔を見合わせてお互いに頷いた。

「ライ君!!」

「ん？なんだい？」

「クラブハウス一緒に行こう!!」

「??」

僕は2人に腕を掴まれて、強制的にクラブハウスまで連行された。

クラブハウスに到着し中に入ると、大きなホールがあり、大きなモニターなども設置されてある。どうやらここから色々な施設に行けるようだ。

クラブハウスの施設にはラウンジやトレーニングルーム、多目的ルーム、マッサージルーム、小さな図書室もあり、その中にはカフェもあった。

「めっちゃくちゃいいじゃん！トレーニングルームとか、多目的ルームにマイクとかスピーカーの備品あったから、歌とかの練習に使えそうだし！」

「クラブハウスにマッサージルームとかカフェがあるなんて知らなかったにえ：今度利用してみよう。」

「なんだか規格外な学園だなんて改めて思ったよ：あ、ここが僕の部屋かな？」

僕はおそらく僕が暮らすであろう部屋を発見し、中に入った。

「おおお!!」

すいせいとみこは感嘆の声を上げた。

中は広々としていて、僕が実家から送っていたダンボールに入れた荷物が置かれてあり、家電（最新鋭）も生活で必要なものが一式そろえてあった。

ベッドのサイズは何故かダブルになっているが、ぐっすり休めそうだ。

僕がその中でも特に嬉しかったのはキッチンの設備が充実していることだった。

料理をするのが好きだからコンロやオープンがしつかりとしたものが用意されているのはとても嬉しい。今度理事長にお礼を言いたいこう。

「うわあ！お風呂も広い！なんか高級なホテルみたいだね！」
「ベッドもみこのやつよりデカいにえ…あつ！」

みこは何か思いついたのかニヤリと笑い、ベッドにダイブした。
そして僕の方を振り向き、両腕を広げながら、

「ライ君…」

「ん？」

「きて…？」

「はっ!?ちよ、みこち何言ってるの!?!」

みこの発言と行動にすいせいが顔を赤らめたが、

「ああ、分かった。」

「ええ!?ライ君も何言ってる!?!」

僕はそのまま、みこのいるベッドまで歩みを進めた。

みこside

(ふっふっふ…ライ君といえども男の子なんだにえ…このシチュエーションとみこの色気でメロメロになってベッドに飛び込んでくるに違いないにえ…ん?)

ライ君がベッドの前で立ち止まって、みこに手を差し伸べてるにえ…?

「ライ君…?何してるにえ？」

「ん?起き上がれないから起こしてほしいんじゃないのか？」

ライ君の発言で部屋に沈黙が流れて、

「ぎやはははははは！みこち何やってんのwwwwww」

「う、うるさいにえ！」

すいちゃんがお腹を抱えて笑っているから恥ずかしくなっ
てしまったにえ…

「？」

ライ君は状況を把握していないようだった。

「っ!!ライ君のばかあ!!」

本日2回目のみこの叫びが学園にこだましたにえ…

ライside

あの後みこを起こそうとしたらみこに怒られたが、すいせいはあるが正しいと褒めてくれてよく分からなかった。

時間も日が沈みかけてきていたので、そろそろ解散をしようという話になった。

「2人とも今日はありがとう。僕1人では学園の探索も苦戦していただろうし、何より楽しかった。」

すいせいが今日ハンカチを落とさなければ、この出会いや、学園案内、教室内のクラスの友人作りなどもできなかったかもしれない。改めて2人にお礼を伝えた。

「いいのいいの！私たちもちよー楽しかったし！ライ君も面白いし、いい子で良かったよ。」

「みこも楽しかったにえ！納得がいかないことが何個かあったけど…」

2人とは学年が違うが、転入生の僕にここまでしてくれるなんてとても心強かった。

もし2人に困ったことがあればぜひ力になりたいと思う。

「よし！じゃあ時間も時間だしそろそろ帰るね！…あつ！その前に…」

すいせいはポケットから携帯端末を取り出した。

「ライ君連絡先教えてよ。今度遊びに誘いたいし！」

「みこもみこも！クラブ（不知建）の皆にも今度紹介したいにえ！」

「こちらこそお願いするよ。」

すいせいとみこと連絡先の交換ができた。

「ありがとう！じゃあこれで本当に帰るね！バイバイ！」

「みこも寮に戻るにえー。ライ君バイバイ！」

「ああ、2人とも帰り道に気を付けて。」

2人を見送り、手を振って別れを告げた。

いざ転入をすると決めた時は不安な気持ちはあったが、今は明日が来るのが楽しみになっていた。

(まだこの学園にきたばかりだが、転入したのは間違いではなかったと思う。すいせいやみことまた会うのもそうだが、新しい出会いも楽しみだ。)

僕は日が沈みかけている空を見上げて、クラブハウスに戻った。

学園生活開始

「皇ライです、キョウトから来ました。よろしくお願いします。」

僕は2―Bのクラスみんなの前で自己紹介をした。

この時期に転入生が来ることはかなり珍しいのか、クラスみんなは大盛り上がりをしていた。

「キョウトからだってよ、すげえな。」

「キヤー！銀髪イケメンよ!!」

「顔だけじゃなくて名前も素敵：ライ様って呼んでいいかなあ…」

クラスみんなは拍手をして迎え入れてくれた。

クラスの中には昨日既に自己紹介を済ませた猫の獣人のおかゆもいて、手をヒラヒラと降ってくれていた。

「皇の席は…：「せんせー、僕の隣の席が空いてまーす。」おっ、そうだったか。では猫又の隣の席に行ってくれ。」

「わかりました。」

おかゆが先生に自分の近くの席が空いていることを伝えてくれた。近くになるようにしてくれたのだろうか？知り合いが近くにいると安心するな。

そのまま先生の指示に従い、おかゆの隣の席に着席した。

着席したとたんおかゆが横を向き、僕に声を掛けた。

「やつほーライ君、自己紹介ばっちりだったね。」

「そうかな？それより近くの席に誘導してくれてありがとう。」

「いいのいいのー、僕ライ君と仲良くしてみたいって思ってたのー。」

「おかゆお前…：いつの間にかこんなイケメンな知り合い作ってたんだ…？」

おかゆの前に座っているボーイッシュな女の子が、僕とおかゆが話しているのを見て驚愕していた。

「えへへ、昨日ころさんの補修を待っている間にすいちゃんに紹介されたんだー。」

「へーすいちゃんとも知り合いなのか、あのすいちゃんが心を開くなんて珍しい。」

ボーイッシュの女の子は僕に向かって自己紹介をしてくれた。

「ちわつす！大空スバーウ！これからよろしく！スバルのことはスバルって呼んでよ！」

「改めて皇ライだ。よろしくスバル、僕のことライと呼んでくれ。」

スバルは見た目どおり明るい女の子という印象で、おかゆはのんびり屋さん？という印象を受けた。

性格が真反対そうだが、それが功を奏して仲がいいのかもしれないな。

「よし、それでは朝のHRを始めるぞー。」

先生からの号令がかかり、僕の学園生活初日がスタートした。

「や、やっと昼休み…めっちゃくちや疲れた…」

「ふあゝ。よく寝たあゝ僕お腹すいちゃったよ。」

「ふう…授業についていくのに問題がなくてよかったな。」

4限目の授業が終わり、昼休みが始まった。

授業内容は先生の教え方も丁寧なこともあり、ついていくのは全く問題がなかった。

ただ、スバルは数学の授業中に頭から湯気が出ていたし、おかゆは授業のほとんどを寝て過ごしていた。

数学の内容も理解できたので今度スバルに教えてあげよう。おか

ゆは…何とかして起こそう。

「ねえーお腹空いたし、早く食堂に行こうよー。」

「そうだな、ライも行くでしょ？」

「え？僕も行つていいのか？」

「もちろんだよー、ほら早くいかないと昼休み終わっちゃうよー。」

「あつ！待てよおかゆー！」

2人が食堂に向かって走り出したので、僕もそれに付いて行った。

昼休みということもあり食堂はかなり賑わっていた。

僕達3人はそれぞれの料理を受け取って席に着いた。

おかゆはおにぎり、スバルはサンドイッチ、僕はカルボナーラにした。

「ふう…沁みわたりますなあ…」

「…お前は授業中ずっと寝てただろ…」

「確かによく先生にバレずに済んでたな、おつ、このカルボナーラ美味しい。」

3人で食事をしていると、スバルが僕に質問をしてきた。

「そういえばライってなんでこの学園に転入してきたの？」

「確かに僕も気になるかもー。」

「転入をした理由か…」

「あつ、ごめん、答えづらい質問しちゃった？」

「いや、あまり人にこの話をしたことがないからどこから説明しようかと思っただけ。」

僕は2人にこの学園に転入した理由、いきさつを話した。

「なるほどね…確かに一般の人からするとライの見た目は目立つからなあ…」

「見てる人は興味本位で見てるだけかもしれないけど、見られる側はあまりいい気はしない時はあるよね…」

2人は僕の話聞いてくれて、共感してくれた。

「スバルも小さい頃からこんな声だったから、よく周りの子にからかわれてたりしたもんなあ。」

「僕も猫人間だから、普通の子からしたら物珍しいだろうし視線は感じてたねー。」

「2人とも話を聞いてくれてありがとう。何だか話してみたら気持ちラクになったよ。」

2人にも過去に似たような体験をしたらしいが、スバルの声は元気があるからこっちも元気になれる気がする。おかゆは髪も耳も尻尾も綺麗に紫がかっているから素敵に見える。

僕が2人に感じたように自分では気に入っていなかったり、コンプレックスの部分も他人からすると長所として捉えてもらえることが

ある。

(僕もいつか自分のこの見た目を他人に誇ったり、好きになつたりできればいいな…)

そんなことを考えているとふと、おかゆとスバルを呼ぶ声が聞こえた。

「あれ？おかゆとスバル？」

「今日はここでご飯なんだ余？」

「ん？おー、ミオしゃとあやめじゃん！」

「やつほー、ミオちゃん、あやめちゃん。」

スバルとおかゆの友人だろうか…？

1人は黒髪と尖った黒い大きな耳に大きな尻尾が特徴な犬…いや狼の獣人。

もう1人は白い綺麗な長い髪と赤い目、そして額の角が特徴な人間…この子は何の人種だろうか…

そういえば以前理事長が珍しい人種がこの学園にいと転入時に言っていたが…あつ！

「悪魔だ！」

「鬼だ余!!」

…どうやら間違えてしまったようだ…

生徒会

昼休みにおかゆとスバルと食堂で食事をしていると、2人の生徒に話しかけられて、同じテーブルに座った。

「うちは大神ミオ！ミオってよんでいいよ、ライ君よろしくねえよ。」

1人目は狼の獣人大神ミオ。僕たちと同じ学年でクラスは2―D、さらに生徒会の副会長を務めているそうだ。

「そしてうちの隣に座っているのが…」

「ツーン」

「もうあやめ、ライ君も悪気はなかったんだから許してあげなよ。」

「ふん！余、初めて人に悪魔だなんて言われたんだ余！」

「す、すまない…」

…僕の目の前でほっぺを膨らませて怒っているのが百鬼あやめ。悪魔ではなく鬼とのことだ。

大神さんと同じクラスで、なんとこの学園の生徒会長を、2年生であるにも関わらず務めているらしい。

「まったく！余は立派な鬼なのに、悪魔と間違えるなんて本当失礼しちゃう余！」

その言葉に僕は自責の念にとらわれた。

僕は他人からの自身の見た目のことに対してのコンプレックスがあるにもかかわらず、同じことで相手を傷つけてしまった…

「すまない、僕は君のことを見た目と憶測だけの発言で深く傷つけてしまった。僕にできることなら何でもする、どうか許してくれ…」

僕は席を立ちあがり、深く頭を下げた。

「えっ…ちよ、あつ、えっ?」

百鬼さんは酷く狼狽していた。

無理もない…彼女にとって許せないことだったんだろう…僕はどんな罰も受け入れるつもりだ。

「あやめちゃん、ちよつと怒りすぎじゃないかなあ。」

「確かに、ここまで謝ってるんだからゆるしてあげなよ。」

「そうだよあやめー。転入してきたばかりの子を悲しい気持ちにさせたらかわいそうだよー。」

「うう…」

おかゆ、スバル、ミオさんが僕に助け舟を出してくれた。すると百鬼さんが、席を立ちあがり、

「よ、余もごめんなさい…本当は間違われたことにはそこまで気にしてなかったけど、ちよつと揶揄いたくなっただけなの…」

顔を俯いて話す百鬼さん。するとミオさんが、

「うんうん、2人ともお互いに謝れて偉いねえ。仲直りのあとはちゃんと握手しようね。」

その言葉に百鬼さんが顔を上げてにっこり笑いながら手を差し伸べてくれた。

僕もそれに乗っかって手を伸ばし、しっかりと握手をした。

「改めて皇ライだ。ライと呼んでくれ。」

「余もあやめでいい余！それから、ようこそ！この学園に！」

無事にこの学園の生徒会長と仲直りができ、歓迎してもらえた。

改めて5人で談笑を続けていると、僕はあることを思い出した。

「あつ、そういえば急な質問で悪いんだが、みんな甘いものは好きかな？」

その質問に対してみんなは不思議そうにしていたが、肯定を示してくれた。

僕はその答えを確認し、バッグからある箱を取り出した。

そして箱を開けると、プレーンとチョコ、抹茶のクッキーが出てきた。

「えー！ライ君これなあに!？」

「僕が作ってきたクッキーなんだ。交友関係を広められたらと思って作ってきたんだ。今日は3種類しか用意ができなかったけど、よかつたらみんな食べてくれ。」

「わあい！僕クッキーだあいすき！ライ君ありがとう！」

「食後のデザートを食べれると思わなかった…あんがと！」

「ライ君器用だねえ。ありがたくいただきまーす。」

「ライ君すごい余！余、抹茶大好き！では早速…」

「二」いただきます！す！」

各々クツキーを口に運んで食べてくれた。

「おいしー！いくらでも食べれるよ！」

「これが女子力…負けた気がする…」

「甘すぎず、ちょうどいいバランスでいいねえ…」

「おいひい余！」

おかゆとあやめからはかなり好評をいただいた。

ミオさんからはバターが普通のクツキーと違う気がするのと、気付かれて、今回のクツキーは無塩バターを使っていることを教えた。それに気付けるのは流石狼の嗅覚だ。

スバルからは簡単なお菓子作りの方法を教えてほしい、と言われたので、今度一緒に作ろうと約束をした。

「うーん、満足満足♪」

みんなクツキーを全て食べきってくれた。

「これから授業に戻るの嫌になってきたな…」

「あと休憩も10分だし教室に戻るか。」

先に食堂にやってきていた僕たちは早めに教室に戻ることにし、ミオさんとあやめと別れた。

3人がいなくなった後、ミオとあやめはライのことについて話していた。

「ねえ…ミオちゃん。」

「うん？」

「ライ君を生徒会に入れたいね！」

「そうだねえ、根もまじめだし、性格も優しいから人材としてとてもいいけど、まだ学園に完全には慣れていないだろうから、流石に早いかもねえ。」

「そうだなあ…ライ君のクラスはわかったし、今度色々生徒会に関する仕事内容を教えるか手伝わせるかをして、アタックをかけたい余。」

「優秀な人材は早めに確保しておきたいし、色々準備を進めておこうね。」

「うん!!」

「ライ君…必ず生徒会に入れて、もっといい学園にしてみせるんだ余！」

体験入部

「よし、今日の授業は以上だ。みんな気をつけて帰るんだぞ。」

転入日初日の授業がすべて終わり、放課後になった。

授業間の休み時間の間に、僕への質問などでクラスのみんなが囲うようにして集まった。質問に答えていくうちにクラスのみんなと打ち解けることができて、無事仲良くなることができた。

放課後はそれぞれクラブ活動に行ったり、帰宅したりとしていて、スバルはこの後バイトがあり、おかゆはミオさんやあやめと同じクラス、の犬神ころねという生徒と一緒に帰宅していた。

おかゆに犬神さんを紹介してもらったが、犬神さんはおかゆを庇うようにおかゆの前に立ち、僕を睨み警戒しているようだった。

：初対面のはずであるが、僕は何かしてしまったのであろうか…
僕はまだ何もクラブに所属しておらず、アルバイトもやっていないため、自室のクラブハウスに戻ろうとしていた。

いや、まだトウキョウ租界に来たばかりなので、学園周りの街のことはほとんど知らないの、探索でもしようか…

しかし、トウキョウ租界はかなりの広さなので、今からの時間だけでは探索は難しいかもしれない…

考え事をしながら階段を降りようとしていると、上の階段から聞き覚えがある声に声をかけられた。

「あれ？ライ君？」

「ほんとだ！ライ君だにえ〜。」

「すいせい？みこ？」

「ん？すいちゃんとみこちあの子と知り合いなの？」

「うわあ、ノエちゃんと髪色似てるイケメン君だ。」

すいせいとみこから声をかけられたが、2人以外にもう2人一緒にいるようだった。

「やつほーライ君、今から帰るところ？」

「ああ、自室に戻るか、租界の街中を探索しようと思っていたんだ。」

「みこ達も今から租界に行こうとしてたから一緒に行くにえ？」

みこがそう言って階段を一段下ろうとした瞬間…

「にえ？…うわあああああ！」

なんと、足を滑らせてしまったのか、前のめりに顔から転びそうになっってしまった。

「みこち!?危ない!!」

隣居たすいせいが咄嗟に手を伸ばしたが、ギリギリ届いていなかった。

(くっ…!!間に合えっ!!!)

僕はみこが体制を崩した瞬間、自分の鞆を投げ捨て、思いっきりジャンプをした。

みこを受け止められることができる階段に着地をし、抱きしめる形でみこを受け止めた。

「みこ！大丈夫か!」

「に、にえ…怖かったにえ…」

みこは目に少し涙を浮かべていたが、安堵しているようだった。

「よかった…何とか間に合って…」

本当に間に合ってよかった…もう少しのところで大怪我をしてみようところだったかもしれない。

「みこち!?大丈夫!」

すいせいと他の2人も駆け寄ってきた。

「いやあ…今のは見ててポルカの寿命縮んだよ…」

「本当だよ…でも君凄いな！あそこからジャンプしてみこちのキヤツチに間に合うなんて…」

「階段に他に誰も降りてなくて助かったよ。おかげでみこのところまですぐ飛ぶことができたから。」

「ライ君は命の恩人だにえ…本当ありがと…」

「どういたしまして。じゃあみこ降ろすよ。」

抱きしめていたみこを解放し床に立たせた。しかし、みこを見ると立ててはいるが、歩けないようだった。

「みこ?どうしたんだ?」

「今ので足が震えてしまって上手く動けないんだにえ…」

そう言われてみこの足を見ると、生まれたての小鹿のように足をプルプルと震えさせていた。

「…ぷっ。」

僕はその様子が何故か面白くなってしまい吹き出してしまった。

「ら、ライ君！笑わないでほしいにえ！」

「す、すまない…僕もわからないが何故か面白くなってしまって…ははは。」

「ご、ごめんみこち私も笑っちゃう…あはは！」

「すいちゃんまでえ！ひどいにえ！」

「流石サイコパすいちゃん…」

「なんかあの2人似てるかも…」

僕とすいせいのみこの足の震えが止まるまで笑いが収まらなかった。

改めてすいせいとみこ以外の褐色肌で耳が少し大きなエルフと、大きなふわふわした尻尾が特徴な獣人の2人に自己紹介をした。

「今更だが初めまして、転入生の2―Bの皇ライだ。よろしく。」

「私はハーフェルフの不知火フレア、私も2―Aで同じ2年生だよ。これからよろしくね！」

「2年生でことは先輩ですねー。あたしは尾丸ポルカ、フェネットクの獣人です！1年生ですけど仲良くしてください！」

てつきりすいせいとみこと同じ学年かと思っていたら、2人ともバラバラの学年だった。何の集まりだろうか？

「みんな学年が結構バラバラなのに仲がいいんだな。」

「まあね、同じクラブ活動をしている仲間だからねえ。」

「なるほど、そういえば以前みこがクラブ活動をしていると言っている気がしたな。たしか不知建って言ってたっけ？」

「そうそう、正式名称が不知火建設で、今日はいないけどメンバーはもう一人いるんだー。」

「不知火建設か。ということは部長は…」

「一応私がこのクラブの部長だよ。活動内容は一緒に部室に集まって遊んだり、街に出て遊んだりしているんだー。」

仲がいいメンバーが集まって遊ぶことが活動内容らしい。クラブといえばきつい内容などが多いと思っていたが、すごく楽しそうに思えた。

「今日は活動の一環として租界に行こうっていう話になってたんだ。」
「そうか、クラブ活動中なら邪魔をするわけにはいかないな。みんな楽しんできてくれ。」

「えー、ライ君も一緒に行こうよー。」

「そうですよライ先輩ー、ポルカも先輩とお話してみたいですよ！」

すいせいとポルカは僕を誘ってくれているが、参加をしてもいいものなのだろうか…

「あつ、じゃあいいこと思いついた！」

フレアが手を叩き、アイディアが浮かんだようだった。

「ライ君まだどのクラブにも所属していないんでしょ？だったら不知建の体験入部って形で参加すればいいよ。」

フレアのアイディアにみんなが共感をした。

「それがいいにえー！街で遊びつつ、ライ君に街の案内もできるにえー！」
「体験入部だから、必ず入部する必要はないけど、新しい仲間ができると私達も嬉しいから、是非入部するかは活動をしてみながら考えてみてよー！」

「そうか…じゃあせっかくの機会だし、体験入部してみるよ。」

「「「やったあ!!」」」

みんなは僕の参加を喜んでくれて、嬉しいような照れくさい気分になった。

学園生活で僕の新たな活動が始まろうとしていた…

体験入部2

不知火建設の体験入部として学園付近の街にやってきた。

以前の学校でも放課後に友人と帰ったり、寄り道をしたことがほとんどなかったため、今の状況を楽しみたいと思っっている自分がいることを感じている。

そんな様子の僕に気づいたのかすいせいが話しかけてきた。

「おー？ライ君何か楽しそうだね？」

「ああ、前の学校でも放課後に友人と一緒に帰ったりしたことがなかったから、ワクワクしてるんだと思う。」

「えーそうなの？でも確かにライ君が遊び歩いてる姿も想像できないね。」

「先輩ってなんとなく貴族に近いオーラがありますよねー、どこかの国の王子様だったり？」

「ポルポルそれは漫画とアニメの見過ぎだってw」

「「あはははは!!」」

「…」

ポルカもなかなか鋭い：王子ではないが、母が皇族の血を引いているため、確かに貴族ではある。

ただこの情報は学園では理事長しか知らないことだ。みんなを騙す気ではないが、あまり公にしてもいい情報ではない。しばらくはこの話を出さないようにしておこう。

みんなと歩きながら街の中を歩いていると、不知建のみんなの目的地に到着した。

「着きましたー！我らが目的地カラオケー！」

「ううー早く歌いたいにえー！」

カラオケ：僕は来たことがないが、密室で好きな歌を歌うことができる施設であることは知っている。僕が来ることになるとは思ってもしいなかったが、体験入部の一環として楽しませてもらうことにしよう。

入口で受付を済ませて、ドリンクバーで飲み物を注ぎ、指定された

部屋に入室した。

外から見ると狭い部屋なのかと思ったが、割と部屋にはゆとりがあり、伸び伸びと歌うことができそうだ。外から見てもよく分からないので、歌うのが恥ずかしいという人でも、気にすることなく歌えるのもカラオケの魅力らしい。

「よし、じゃあすいちゃんから歌おうかな！」

「よっ！待ってました！歌姫すいちゃん！」

まずはすいせいから歌うそうだ。デンモクという機械に自分が歌いたい曲を入力すると、その曲が流れ出して歌うのが流れのようだ。すいせいが入力した曲が部屋のモニターに表示されて歌が始まった。

すいせいの歌声は聞いたもの全てを魅了するように綺麗で、とても楽しそうに笑顔で歌っていた。

みことポルカはどこからか持ってきたマラカスとタンバリンですいせいの歌を盛り上げて、フレアも手拍子をして楽しそうだった。

僕もこの光景をみてるというの間にか笑顔になっていた。僕も友達がいればこのような思い出もできていたのかもしれない…

すいせいが歌い終わり、みことポルカにバトンタッチしていた。

すいせいはドリンクを飲みながら僕の隣の席に座った。

「ふう…どうだったライ君？私の歌は？」

「お疲れ様。すごく心に響く歌だった。」

「えへへ、お世辞でもそう言ってくれて嬉しいよ。」

「お世辞なんかじゃないよ。楽しそうなすいせいを見ていたら、僕も楽しくなってきた。すいせいの歌には人の心を動かす力があるのかもしれないな。」

「そ、そこまで褒められると流石のすいちゃんも照れちゃうな…でもありがと…」

すいせいは顔を赤らめて照れていた。

みことポルカの歌が始まった。2人は所謂アニソンというアニメで流れる主題歌をテュエツトしていた。

2人とも元気いっぱいに歌っていて、聞いている人達に全てに元気を与えるような感じがした。

「ぶはあ、歌いきったにえ。」

「いやー、みこちと歌うのほんと楽しいわー。」

「次はフーたん歌う?」

「いや、私実は喉がちよつとだけ調子悪くてさ、今日は聴く側に回っているよ。」

「ありやー、それは残念…それなら次は…ライ君歌おう!」

「え?僕がか?」

「そりやそうだよー、今日は体験入部なんだし、せつかくだから私と歌おう?」

すいせいから誘われて歌うことになってしまった。どうしようか…何を歌うか考えてもいなかった。

「ライ君の声はどつちかというと低い方だから、バラードの曲なんか合いそうだけどどうかな?」

「実は最近のアーティストはあまり分からなくて…有名なやつなら少し分かると思うが…」

「オツケー、ならこの曲はどう?」

すいせいが選曲した曲はなんとか僕でも知っている曲だった。流石はすいせい、曲選びも最適だ。

曲は男女のアーティストが歌っているもので、それぞれのパートの分け方は簡単だった。

「ライ君待ってたにえ!」

「盛り上げは任せてよ!」

「2人ともしつかりねー。」

みんなの応援もあり僕は歌に集中することにした。隣のすいせいも顔が真剣になっている。

歌が始まり、歌詞を見ながら一生懸命に歌った。途中すいせいの歌声に吸い込まれそうになったが、なんとか持ちこたえた。

歌に集中していると、いつの間にか歌が終わっていた。みんなの反応を伺おうとしていると、

「2人ともうますぎだにえ!!」

「本当だよ！タンバリンを鳴らす暇もなかったよ！」

「凄かったねえ…つい聞き入っちゃったよ…」

なんとかみんなに褒めてもらえた。隣ですいせいが息をつきながら、

「やったねライ君！ハイタッチ!!」

ハイタッチのポーズをしてきたので、僕も構えるとすいせいが思いつきりハイタッチをし、いい音が鳴り響いた。

「ライ君やっぱり歌上手いじゃん！今度違う曲も一緒に歌おうよ！」

「所々すいせいがカバーしてくれたから上手く歌えただけさ。でも凄く楽しかった…今度曲を教えてくださいたら覚えてみるよ。」

「ほんと!?約束だよ！」

楽しく歌えたためか、すいせいはテンションが上がっている様子だった。

「すいちゃんデートの約束？隅に置けないにえ…」

「ビュービュー、お熱いことで。」

「ちよ、違うから!!」

すいせいは不知建メンバーに揶揄われているようだった。

そのあとは退出時間いっぱいまでみんなと一緒に歌った。

生まれて初めてのカラオケであったが、またこのメンバーで来たいと思った。

体験入部3

あの後カラオケ店から退出をし、僕への街の案内として、日用品などを購入する際に品物の数が多く、値段も手ごろなものを揃えてあるお店を不知建のみんなから紹介してもらえらることになった。

学園の前にはバス、モノレールなど街に向かう交通手段はたくさんあるようで、交通手段に関しては後日学校から街に向かうときに教えてくれるらしい。

カラオケ店から10分ほど歩いたところに、大きなショッピングモールが見えてきた。

客が多くかなり賑わっているようで、店の種類もかなり豊富で、洋服や雑貨などを取り扱っている店が多く、スーパーマーケットやフードコート、ゲームセンターなどの娯楽施設もあるようだ。

「ここはかなり大きな施設だな…一日で探索を終えるのは難しそうだし…」

「あはは、流石にこの規模を一日では見て回れないんじゃないかな？でも今日はライ君が生活に必要なところを案内するつもりだから安心してよ。」

僕が圧倒されているとフレアが安心できるような声をかけてくれた。

「それは助かるよ…一人だと迷子になりそうだしな。」

「でも迷子になっているライ君も見てみたい気がするにえ…」

「あーでもわかるかも。普段落ち着いているライ君があたふたしてたらどうなるんだろ？」

「それだけは勘弁してくれ…！」

みことすいせいが良からぬことを考えていたようだったので必死に制止した。

こんな広いところでみんなとはぐれたらもう会える気がしない…

「まあ時間もたくさんあるわけじゃないんで、そろそろ回りますか？」

「そうだなポルカ。行こう。すぐ行こう。」

すいせいたちから逃げるようにポルカの手を引っ張って探索を始めた。

「ちよ、ちよつと先輩い!!」

「あー、待てえ!」

「逃がさないにえ!」

「ライ君急ぎすぎると迷子になるよー。」

僕とポルカの後をすいせいとみこが追いかけてきて、最後尾からフレアが注意をしてくれた。

ショッピングモールの中では雑貨店とスーパーマーケットをみんなに案内してもらった。

案内してもらった店はみんながよく利用している店だけあって、品物の種類や品質が良い物が多く、値段もお手頃だった。

スーパーマーケットはフレアがよく利用しているようで、どの場所にどの食品や、どの調味料があるかを教えてくれた。

案内が一通り終わったので、みんなの要望でフードコートでクレープを食べることにした。

すいせいがブルーベリークリーム、みこがいちごクリーム、ポルカがハムエッグ、フレアがバナナチョコ、僕は抹茶あずきクリームだ。

「うーん、美味しい!」

「みんなで放課後に買い食いをする…これも活動の一環だよねー。」

「ちようどお腹空いてたしね、でもライ君奢ってもらってよかったの?」

「ああ、みんなには遊び方も教えてもらったし、街も案内してもらったからそのお礼と思ってくれればいいよ。」

「ライ君はできる後輩だにえ。みこをもっと敬ってくれてもいいんだよ?」

「そうだな。あ、みこ鼻にクリームついてるぞ?ちゃんと拭かないとだめじゃないか。」

僕はみこの鼻についたクリームをハンカチで拭いてやった。

「…なんでみこは毎回こんな扱いなんだにえ…」

「みこちが先輩風吹かせられるのはもつと先かもね。」

「ぐぬぬ…」

「それより先輩のクレープ美味しそうですね？」

「僕抹茶が好きなんだけど、これはすごく美味しいな。」

「へえー、あ、そうだ。先輩のクレープ一口もらってもいいですか？ポルカのやつも食べていいんで。」

「!?」

ポルカの発言にみんなが驚いているようだった。

「もちろん。ポルカのやつのも気になっていたんだ。」

僕はポルカとクレープを交換して食べてみた。

「あ、ほんとだ。ポルカあんまり抹茶食べたことないですけど、ほろ苦い味の後に甘味があつて美味しいですね！」

「ポルカのクレープもいいな。クレープは甘いものか中身が冷たい物しか食べたことがなかったけど、ご飯のおかずのような温かいものも凄く合うな。」

ポルカと交換したクレープを返すと残りの3人から、

「「ライ君！」」

「ん？」

「「クレープ交換しよう!!」」

「あ、ああ。」

「？」

僕とポルカはなぜみんながこんなに勢いよく迫ってきたのかわからなかったが、みんなも僕のやつを食べてみたかったんだろうか…？結局みんなともクレープを交換して、みんなのクレープも食べさせてもらった。

やっぱりフルーツ系のクレープも美味しかったので、また今度来るときは違うのを食べてみることにしよう。

クレープも無事？に食べ終えたため、そろそろ解散することに決め

た。

僕とみことポルカは寮(クラブハウス)で暮らしているため学園に。フレアは学園外で友人含めて4人でシェアハウスをしているようだ。

すいせいはお姉さんと2人暮らしのため、それぞれ別れるつもりだったが、

「あつーそういうえば不知建の部室に課題をそのまま置いてきちやっただけにえ…」

「えー！みこちまた!？」

みこが部室に忘れ物をしたことを思い出したらしい。

その課題は明日の朝提出しないとまずいらしく、どうしても取りに戻らないといけないみたいだ。

「もう、しょうがないなあ。部室のカギは部長の私しか持ってないから学園に戻ろっか。」

「うう…フーたんごめんねにえ…」

「まあまあ、じゃあみんなで戻る?」

「うーん、でもすいちゃんやんは学園からちよつとだけ距離あるから大変じゃない?姉街も帰りが遅くなると心配しそうだし。」

「あー、確かに言われるかも…」

「でもすいちゃんとフーたん学園外で解散するときっていつも一緒に帰ってるよね?1人で大丈夫?」

「まあ今日くらい1人でも問題ないっしょー。寄り道するつもりもないし。」

「うーん…」

フレアはすいせいが1人で帰るのが心配のようだ。

「なら僕がすいせいを家まで送ろうか?」

「えっ!？」

「ライ君いいの?」

「フレアはすいせいが心配みたいだし、僕は自由に動けるから問題ないよ。学園までの道も覚えたし。」

まだ遅い時間ではないが少しずつ暗くなってきたので、女の子

が1人で帰るのを心配するフレアの気持ちも分かる。

「確かにライ先輩と一緒になら安心ですね。」

「じゃあライ君お願いしてもいい？」

「任せてくれ。すいせいもそれでもいいかい？」

「う、うん…ありがと…」

「？」

すいせいの様子がおかしい…？顔も少し赤いみたいだし、返事も少し歯切れが悪いように感じられた。

「ははーん。」

みこが何かに気づき、すいせいに何かを耳打ちをしに行つたあとすぐに逃げるように走つた。するとすいせいの顔がさらに赤くなり、みこを追いかけようとした。

「み、みこち！違うから!!」

「またねライ君！すいちゃん頑張るにえ!!」

「あつ、みこち待ってってば！」

「そそつかしいなあ、じゃあライ君すいちゃんをよろしくね！」

すいせい以外の不知建メンバーは走り出して、学園に戻つて行つた。

その場には僕とすいせいだけが取り残された。

「まったく…じゃあライ君改めておねがいするね？」

「ああ、お姉さんも待っているだろうし早く帰ろう。」

僕とすいせいもすいせいの家に向かって歩みを進めた。

星街姉街

すいせいを家まで送ることとなり、2人で話をしながら歩いていった。

「なるほどね…だからライ君は転校してきたんだね。」

「ああ、でもこの学園のみんなという時は見た目を気にすることがほとんどないから気楽でいいよ。」

「確かにライ君はどちらかと言うと目立つ方だとは思うけど、学園のみんなもかなり特徴的な多いからあまり気にならないかもね。」

すいせいにまだ僕が転入した理由は話していなかったので伝えておいた。

だがすいせいの言う通り、この学園にやってきてからは人の目線がほとんど気にならなくなっていた。

「やっぱり転入初日で、学園やクラス内に事前に友達ができていたことが大きいかもしれない。心にも少し余裕ができていたから。」

「あはは、じゃあ私とみこちのおかげなのかな?」

「そうだな、あの時すいせいがお姉さんからもらったハンカチを落としてなければここまで関わることもなかったかもしれないな。」

「そっか、じゃあ姉街にも感謝だね。」

すいせいと出会いの頃を思い出しながら話していると1つ気になることが思い浮かんだ。

「そういえば、すいせいのお姉さんはどんな人なんだ?」

「姉街? そうだなあ…一言でいうと不思議ちゃん?」

「不思議ちゃん?」

「ぱつと見は普通の人に見えるんだけど、家でよくぬいぐるみと話しているのをよく見かけるよ。」

「ぬいぐるみと…」

なるほど…確かに不思議だ…

「まあでも、私には優しいし、ご飯も毎日作ってくれるし、遊んでくれるし、たった1人のお姉ちゃんだから大好きだよ?」

「そうか…仲がいいんだな。」

「たまに喧嘩もするけどねー、そういえばライ君は兄弟とかいるの？」
「ああ、妹が1人いるよ。」

「あーやっぱり？ライ君は、ザお兄ちゃん！って感じしてるもん。」
「そうか？」

「ねえねえ、妹ちゃんの写真ないの？」

「写真か…：そういえばキョウトからトウキョウに引越す前に一緒に写真を撮ったような…」

僕は携帯の写真フォルダの中から妹との写真を探した。

「あつた。これだ。」

「どれどれー？うわ！めっちゃ可愛い!!」

すいせいに僕が妹と目線を合わせるように姿勢を下げ、カメラに向かって映り込んでいる写真を見せた。

「目元とかはライ君にそっくりだねー。妹ちゃんは黒髪なんだ？」

「ああ、妹は母親似だって周りからよく言われているよ。」

「そっかあ…あれ？妹ちゃんちよつと目が赤くなってる？」

「僕がちょうどキョウトからトウキョウに向かうときに撮った写真で、それで妹が寂しくなっちゃったらしくて直前まで泣いてたんだ。」

「かわいいなあ…いつか会わせてくれない?？」

「近々僕の近況を知るためにトウキョウに行きたい、って言ってたからタイミングが良ければ会えると思うよ。」

「ほんと!?来る日決まったら教えてね!予定空けるから!」

お互いの家族について話していると、すいせいの家のマンションの入り口前まで着いた。

「あつという間に着いちやった…ライ君わざわざ送ってくれてありがとうだね?」

「いや、こっちも凄く楽しい話ができてよかったよ。じゃあ僕はこれで…」

「あつ、ライ君待って!」

僕が帰ろうとしたらすいせいに呼び止められた。

「ん?なんだい?」

「あつ…えつと…」

?…すいせいから呼び止められたが、顔を俯いて何かを言い淀んでいるようだ。た。

すいせい side

何で私ライ君を呼び止めちゃったんだろ…

特に言うことも無いはずなのに…

多分さつきみこちが帰り際に耳打ちしたことが原因だと思う…

(すいちゃん、アタックするならこれがチャンスだよ?)

あの時みこちが何であんなことを言ったのかがわからない…

別に私はライ君のこと嫌いじゃないし、でも…好きってわけじゃ…

「あれ? すいちゃん?」

「え?」

考え込んでいたら毎日聞き覚えがある声に声を掛けられた。

その声に反応して振り返ると、両手にスーパの買物袋を掲げた私と似た顔で、みこちのピンク色の髪よりも色が少し薄いサイドテールの髪型をした私のお姉ちゃんだった。

「お、お姉ちゃん? 家にいるんじゃないの?」

「えー? 今日はスーパで買物してくるから帰りがちよと遅くなるって朝言っただじゃんー。」

…確かに言っていた気がする。

でもまさかライ君と一緒にいるところで鉢合わせするなんて…

「あれれ? あなたはー?」

「あ、初めまして。皇ライと言います。」

「あー! あなたがライ君? すいちゃんからライ君のことは話でよく聞いているよー?」

「!」

「そうなんですか?」

「うんうん、最近新しく学園に転入生が入ってきて、その子と仲良くな

れたー！って喜んでたんだよー。」

「ちよつとお姉ちゃん！余計なこと話さないで!!」

お姉ちゃんが暴露を始め出したので急いで止めた。

これ以上余計なことを話させないようにお姉ちゃんをマンションの中に押し込もうとした。

「もうーすいちゃん痛いよー。」

「いいから家帰るよー！ライ君またね!!」

「あ、ああ、また学園で。」

「えー、もうライ君帰らせちゃうのー?」

お姉ちゃんは何故かライ君と別れるのが嫌みだった。

「あーそうだー!」

お姉ちゃんは何か思いついたようで、私の元からするりと離れるとライ君の元へ向かった。

正直嫌な予感しかしない…

「ねえライ君?せっかくだからうちで一緒にご飯食べない?」

「え…?」

お姉ちゃんから爆弾を投下された。

食事会

すいせい side

私は今家でシャワーを浴びている…結局あの後…

(材料いっぱい買ったし一緒にご飯食べようよ？ね！)

(は、はい、ご迷惑でなければ…)

(決まりー！さ、いこいこー！)

(ちよ、ちよっとお姉ちゃん！)

お姉ちゃんはライ君の背中を押しながらマンションに押し込んでいった。

(ライ君も嫌がってはなかったけど、迷惑じゃなかったかな…というか男の子を家に呼ぶなんて初めてだからどう過ごせばいいか分からない…)

私はシャワーを浴び終えて、髪をドライヤーで乾かして部屋着を着てリビングに向かった。

リビングに入るといい匂いがしてきた。お姉ちゃんが作った料理を並べていて、キッチンではライ君が料理をしていた。

「いやー、ライ君手際がすごいねー。」

「普段料理をよくしているからかもしれないね。でもお姉さんも流石の手際です。」

「あはは、何だか男の子にお姉さんって言われると弟が出来た気分になるよ。」

ライ君とお姉ちゃんが談笑しながら食事の準備を進めていた。何だかお姉ちゃんが羨ましい…

「あ、すいちちゃんお風呂終わったー？」

「すまないすいせい、準備がもうすぐ終わるからもう少しだけ待ってくれるか？..」

「あ、うん。何か私も手伝うよ。」

「じゃあ食器の準備をお願いしてもいいかい？」

私は頷き、ライ君がフライパンで調理をしていたオムライスに乗せる用のお皿を探した。

食器がキツチンの後ろの戸棚にあるのでライ君と背中合わせになる形となった。

普段学園でしか会わないライ君が家に、しかもすぐ後ろにいることに違和感を感じてしまう。

オムライスを盛り付ける用のお皿を見つけて、ライ君に手渡したときに手と手が当たってしまった。

「っ!!」

なんとか表情には出さなかったが、内心驚いてしまった。

いつもと違う状況だからか、普段意識しないところでも意識してしまふ…

「よし、盛り付けも終わったし、リビングに行こうか。」

「う、うん、私お腹空いちやっただよ！」

ライ君から声を掛けられてなんとか我に返り、お皿を持ってリビングに向かった。

ライス side

すいせい達と食事の準備を終えて、リビングのテーブルの椅子に座った。

テーブルには僕が作ったオムライス、お姉さんに作ってもらったサラダとコンスープが並んでいる。

オムライスのソースは一応トマトソースとデミグラスソースの2種類を用意した。

我ながらソースはいい出来なものを作ることができたと思う。

「よし、じゃあ食べよっかー！いったきまーす！」

お姉さんの掛け声で食事が始まった。

僕はトマトソース、すいせいとお姉さんはデミグラスソースを選ん

でいた。

「んー！このオムライス卵がフワフワで、ソースもコクがあつて凄く美味しいよー！」

「ほんとだ！お店で食べるオムライスみたいで美味しい！」

よかつた、何とか2人には好評みたいだった。自分でも食べてみたがいつも通りの味だ。

お姉さんが作ってくれたコーンスープも飲んでみた。

「このコーンスープも美味しいですね。コーンの甘味がしっかりと出ていて優しい味だ。」

「えへへ、それは自信作なんだー、気に入ってくれて嬉しいよ。」

すいせいはオムライスを気に入ってくれていたようで、もうすぐ食べ終わりそうな勢いだった。

「すいせい、まだチキンライスは残っているからオムライスのおかわりいるかい？」

「いるー!!」

「…？すいせい、サラダは食べないのか？」

すいせいのお皿を見るとサラダに手をつけていないようだった。

「…え？何のこと？」

…すいせいは僕から視線を外し、そっぽを向いていた。なるほど野菜が嫌いのようだ。ただ、僕はそれを見逃すほど甘くはなく、

「…サラダも食べないとオムライスは作らないからね。」

「そ、そんな!?ライ君私を殺す気!？」

すいせいは椅子から立ち上がり僕の肩を揺さぶってきた。

「し、しっかり野菜も食べないとだめだ！」

「すいちゃんは玉ねぎ以外の野菜は野菜って認めてないのー!!」

そう叫ぶすいせいは泣き出しそうな顔をしていた。今までに見たことがないすいせいの表情に何故かドキッと感じてしまった。

「それに私だけじゃなくてお姉ちゃんにも注意してよ！」

「え？」

「あつ…」

すいせいに言われてお姉さんの方を見ると確かにサラダが

減っていないかった。

まさか姉妹揃って…

「い、いやだなあすいちちゃん、一番最後に食べようとしてただけだよ…」

「お姉さん。」

「な。なあにライ君？」

「本当に食べますか？」

「う、うう…」

ダウトだ。星街家はみんな野菜が嫌いなのだろうか…

「…2人ともせめてそのお皿にあるサラダを半分は食べてください。それまではオムライスは没収です。」

「そ、そんなあ…」

こうして星街姉妹への食への教育を始めることにした…

何とか2人はサラダを食べた。すいせいに至っては半泣き状態になっていたが、流石に野菜も食べないとバランスが悪い。

「うう…ライ君食べたよ…」

「年下の子に怒られたの初めてかも…お姉ちゃん悲しい…」

2人は目の光を失い、呻き声を上げながらお皿の上のサラダを完食していた。

「2人ともよく頑張りましたね。おかわりのオムライスもうできてますよ。」

「やったあ!!」

一瞬で2人の目の光りが戻り、笑顔も戻った。

「そ、そんなにオムライスが食べたかったのか？」

「だって…ライ君のオムライス凄く美味しかったんだもん…」

「嫌いな野菜を我慢して食べる価値はあるよ…」

「そ、そうか…」

…ここまで褒めてもらえるとはいっておらず、少し照れてしまった。「ライ君顔赤いけどどうしたの？」

「…何でもないよ。」

美味しそうにオムライスを食べ、ほっぺにソースがついたすいせいを見ると笑顔になった。

また今度違う料理も作ってあげようか…

契約

夕食を終えてそろそろ学園に帰ろうかと思っていた。

「よし、それじゃあ僕はこの辺で…」

「えー、ライ君もう帰っちゃうのー?」

帰ることを伝えるとお姉さんが残念そうな声を出していた。

「一応学園の門限が決まっているので、それまでには戻っておこうかと。」

「そつかあ…門限なら仕方ないね…でもまた遊びに来てね?」

「ありがとうございます。是非ご迷惑でなければ。」

「あ、ライ君、帰るなら見送るよ。」

「ありがとうございます。」

「私も私もー。」

星街姉妹に見送ってもらえることとなり、学園へ戻ることにした。

すいせい side

マンションの下まで降り、ライ君を見送ることにした。

楽しい時間はあつという間で、名残惜しささえ感じている。

「じゃあライ君気を付けてね。」

「はい、今日は本当にありがとうございます。」

「あつ…」

「ん? すいちゃんどうしたの?」

「ただ…ライ君と離れそうになった時と同じことが起きてしまっ
た…」

「伝えようと思っていない言葉が勝手に漏れてしまう…」

「ううん、何でもない…」

「…すいせい、もしよかったら僕と少し歩かないか?」

「え?」

「まだ道を完全に把握してなくて、少しだけ案内をしてもらえるとあ
りがたいんだ。」

「え、でも…」

ライ君に街を案内したときに道を覚えたって言ってたから、この辺りももう覚えたのかと思っていたけど…

「すいちちゃん、行っておいでよ？ライ君も困ってるみたいだし。」

お姉ちゃんも微笑みながら言ってきた。

「…うん、分かった。」

ライ君の学園までの帰り道を一緒に歩いていた。この辺りは街灯が多く、暗くはないので安全ではある。

少し歩いているとライ君が話し出した。

「すまないすいせい、僕は1つ嘘をついてしまった。」

「え？嘘？」

「ああ、道をまだ完全にしていないと言ったが、実はもうほとんど覚えているんだ。」

「あー、やっぱり？ちよつとそんな気はしてたんだ。」

やっぱり、あのライ君が複雑でないこの道を覚えられなかったというのは違和感があった。でもそうなるかと1つおかしなことがある。

「やはりすいせいには気づかれていたか…」

「まあね、でもどうして嘘ついたので？」

付き合いはまだ短いライ君に下心とかがないのがよくわかる。ただそれを含めても、ライ君が嘘をつく理由がよくわからなかった。

「…すいせいが何か言いたそうにしていたからかな？」

「え？」

「すいせいを家に送って帰ろうとした時と、さつき見送ってもらおうとした時にすいせいが僕に何か言いたそうに感じたから…お姉さんの前とかでは言いづらい内容なのかと思って。言いたくなければ無理には聞かないけど…」

「…ライ君は何でもお見通しだね。」

流石に私の心の整理もついていない状態なので、この気持ちを伝えるわけにはいかない。でもあのことは話してみてもいいかな…

私はライ君より一步前に出て、夜空を見上げた。

「ライ君私ね夢があるんだ。子供のころからずっと大好きだった歌で、世界中のみんなを元気にしたり、幸せな気持ちにしてあげたい：そんな歌に関わる仕事とかを将来やってみたいんだ。」

「そうか、でもすいせいこの歌には僕や不知建のみんなも元気にしてもらってたよ。カラオケの時にも言ったけど、本当にすいせいの歌には人の心を動かせる力があると思う。だから僕もすいせいの歌を色んな人に聞いてもらえたらいいなって思っているよ。」

不思議とライ君に掛けられる言葉には自分には本当にそんな力があるのかもしれない、というような自信が湧いてくる。

「じゃあライ君一っお願いしてもいい？」

「？なんだい？」

私は身体を振り返し、ライ君の顔をしっかりと見て伝えた。

「もし、私が他の人の前で歌を披露するために、ステージみたいところに立つことがあったら、一番近くで私の姿をライ君に見てほしいんだ。そして、挫折そうになった時は：私のことをそばで支えてほしい：」

気持ちを伝えているときに、言葉を繋げようとして途切れ途切れになっちゃったけど、今ライ君に伝えたいことは全て伝えた。

「もちろんだ。僕に力になれることであれば何でもするよ。すいせいの夢を応援させてくれ。」

私の真っすぐな気持ちに、ライ君も真っすぐな気持ちで答えてくれた。

お姉ちゃんや不知建のみんなと同じようにライ君も大事にしていきたい：失いたくないと思ってしまう：

伝えた気持ちと心で考えていた恥ずかしさをごまかすように、ライ君に向かって一歩進み、ライ君に正面からもたれかかるように頭をライ君の肩に預けた。ライ君はしっかりと受け止めてくれて、そのままライ君の顔を直接見ずに言葉を紡いだ。

「約束：破ったら許さないからね。」

「ああ、僕とすいせいの約束：いや、契約だな。」

「契約…いいね、それ。」

「ああ、僕はすいせいに力を。」

「私はライ君に居場所を。」

「契約成立だな。」

ライ君は微笑み、手を差し出してきた。

私も笑みを浮かべてそれに応じ、手を伸ばし握手をした。

夜空の雲が晴れ、星々が2人を照らし出した。

生徒会室

僕がアツシユフォード学園に転入してきて2か月近く経った。

学園生活にも慣れてきて、一人でこの広い学園を行動しても道に迷ったりという問題がなくなってきた。

「よし、ではこの問題を…皇。」

「はい、X||3です。」

「よろしい。」

「…やっぱライって頭いいんだなあ…」

僕の近くの席にいるスバルが言葉を漏らしていた。

今のところ授業も問題なく着いていけていて、最近はクラスメイトから分らないところをいく質問もされたりしている。

所謂普通の学園生活を送ることができて毎日楽しい。

以前体験入部をした不知建は結局このまま入部してもいいものなのかと思っていたが、この学園の校則の中にはクラブや委員会などにはいくつ所属してあっても問題はない、という校則があったため、フレア達の後押しもあり、僕は不知建設の正式なメンバーとなった。不知建のみんなは僕の加入に大いに喜んでくれていた。特にせいとが嬉しそうにしていたが、何か僕が入っていいことでもあったのだろうか？

今では放課後に用事がない日には不知建の部室に立ち寄ることにしている。

体験入部の際にはいなかったもう一人のメンバー、白銀ノエルと知り合うことができた。

フレアと彼女は同じクラスメイトで、以前話していたフレアとシエアハウスをしているメンバーのうちの一人でもあるらしい。

2人はとても仲が良いようで、基本的にはいつも一緒に行動をしていて、僕の気のせいだとは思いますが、ノエルがフレアを見ている時の目と他の人を見る時の目が違うように感じられた。まあ、仲が良いから大切に思っているということなのであろう。

そんな学園生活を謳歌していたある日、僕とおかゆがクラス当番であったため、クラスの皆の課題を担任の先生に提出するために、放課後2人で職員室に向かっていた。

「ライ君ほとんど課題持ってもらっちゃってるけど重くない？」

「流石におかゆがこれを持つのは大変だろうし、あんまり重くないから大丈夫だよ。」

「ライ君は優しいねー。ありがとう。」

おかゆとはクラスメイトの中で一番仲良くなれた友人でもあり、彼女にもよく学園の案内やお世話をしてもらった。

彼女とは波長が合うのかクラスでもよく話すし、移動教室の際も一緒に行動し、昼食もよくスバルと一緒に食べたりする。彼女は彼女の祖母と一緒に暮らしているらしく、今度スバルと家に遊びに行く約束もしている。

課題を先生に渡し、職員室を出た後そのままおかゆは家に帰るらしく、それぞれ挨拶をして別れた。

僕もそのままクラブハウスに戻るか不知建の部室に行くか迷っていたところ、

「うーん、前が見えなあい…」

職員室から出てきた生徒から唸り声が聞こえたので振り向くと、かなりの量の書類を抱えた大きな黒い耳と尻尾が特徴な獣人がいた。

「ん？ミオさん？」

「んえ？そ、その声はライ君？」

以前食堂で知り合った大神ミオさんだった。書類が多すぎるせいで僕の顔が見えていないようだった。

「ああ、その書類はどうしたんだい？」

「これ生徒会で処理しないといけない書類なの。でもウチ1人じゃ持つが多すぎたみたいで前が見えないんだよお。」

書類を持ちながらミオさんがふらついていたので、僕はミオさんが

持っている書類を半分受け取った。

「前が見えないと危ないよ？僕も運ぶの手伝うよ。」

「あ、ありがとう、本当助かるよお。」

僕はミオさんと生徒会室まで書類を運ぶこととなった。生徒会室まで続く廊下を2人で歩いているとミオさんに話しかけられた。

「そういえばライ君学園には慣れたー？」

「そうだね、学園の中に友達ができたし、クラブにも入ったから毎日楽しいよ。」

「へー、なんのクラブに入ったの？」

「不知火建設だ。」

「不知建!？」

ミオさんがびっくりした声を出したので僕もびっくりして危うく書類を落としそうになった。

「ど、どうしたんだい？」

「いや、ライ君が不知建に入るのが意外過ぎて…脅されたりとかしてないよね？」

「そんなことはされていないよ。すいせいやフレア達も優しいし。」

「フレアはともかく、すいちゃんが優しいのか…ライ君やるねえ。」

「…不知建に入るのはまずいのか？」

「うーん、まずいってわけではないけど、よく生徒会室に部費の抗議をしにきたり、噂では生徒会を乗っ取ろうとしているって話をよく聞くから…」

「乗っ取り…僕が活動している時はそんな話を聞いていないから、流石にその話は飛躍しすぎていると思うよ。」

僕の記憶が正しければそんなことはしていないはずだ。たまに僕以外の皆がサングラスをかけてなにか会議をしているところを見かけていて、よくわからない暗号で話していたが、ただのミーティングだと思う。…おそらく。

「ウチの気のせいだったらいんだけど…あつ、生徒会室に着いたよ。」

ミオさんと話しているうちに生徒会室前まで着き、ミオさんと一緒に生徒会室に入室した。

生徒会室には僕らが入室する前にすでに、生徒会長の席で書類の整理をしている人物がいて、入室した音に気付いたのか席を立ちあがった。

「あやめえー。新しい書類持ってきたよおー。」

「ミオちゃんありがとう。…あれ？ライ君も一緒なんだ余？」

「やああやめ、久しぶりだね。」

僕らの目の前にいるのがこの学園の生徒会長である鬼神、百鬼あやめだ。

以前ミオさんと一緒にタイピングで知り合い、この学園にやってきたことを歓迎してもらった。

「ライ君に職員室から書類運んでもらうの手伝ってもらったんだよー。」

「そうだったんだ！ライ君ミオちゃんを助けてくれてありがとう！」

「少し手伝っただけさ、じゃあ僕はこの辺で失礼するよ。」

「あつ、ライ君待って！」

書類も運び終えたので、僕はこのまま帰宅しようとしたが、あやめから呼び止められて、

「ねえねえライ君、

生徒会に興味ない？」

予想にもしていない言葉をあやめに投げかけられた。

生徒会室 2

生徒会室にミオさんと書類を届けに来たらあやめから生徒会に興味がないか、と声を掛けられた。

「生徒会に興味か…全くないわけではないが…どうしてだい？」

単純に何故そのような質問をあやめがしてきたことに疑問を持った。

「ふっふっふ…実はライ君を生徒会に入れたいとずっと思ってたんだ余!!」

あやめは僕の目の前までやってきて、僕の方に指をビシツと刺して質問に答えた。

なるほど、質問の意図は理解した。だが何故僕を生徒会に…？

「あー、そういえば初めてライ君に会ったときそんなこと話してたねえ。でも確かにライ君みたいな優秀な生徒が生徒会にいてくれたら助かるね。」

ミオさんは思い出したようにあやめに同調した。

あやめはうんうん、と首を縦に振っていた。

「先生からの授業の評価も高いし、体育の授業でも運動抜群！おまけに階段から落ちそうになった生徒を受け止めていたっていう報告も生徒たちから上がっているんだ余！そんな優秀な生徒は是非、我が生徒会に入ってほしいんだ余！」

…どうやら僕の行動は思っていたよりも色んな人に見られているみたいだ。

奇異な目ではなく、ただの評価として見てもらえていることはありがたいことではあるが。

ただ生徒会は学園の象徴とも呼べる組織ということである。

そんな組織の一員に転入してきたばかりの僕は本当に相応しいのが不安には残る部分である…

「ウチから見てもライ君は生徒の模範になれるような生徒だと思うから、転入したばかりの部分は気にしなくてもいいと思うよっ。」

「…少し考えてもいいかい？」

「えっ…？」

さっきまでウキウキしていたあやめが固まってしまった。

「ら、ライ君…生徒会に入ってくれないの…？」

よく見るとあやめの目が少し潤んでいる気がする…ま、まずい…

「余、余がこの間食堂で意地悪なことしたから…？ライ君、余のこと嫌いになっちゃった…？」

あやめは僕の手を取りながら今にも泣き出しそうになってしまっていた。

「ち、違う！そんな重要な役目をすぐ了承するわけにもいかないと思っ、考える時間がほしいと思っただけなんだ！」

必死で弁明をしたが、あやめが泣き止む気配はない…どうすれば…

…やはりあれしかないのか…

「…分かった、僕を生徒会に入れてくれ…」

「えっ!!ほんと!？」

僕が生徒会に加入する意思を伝えた途端、あやめが泣き止みパツと明るい笑顔になった。

「やったあ!!ライ君が生徒会に入ってくれた余!!」

…なんだかあやめの策にはまってしまった気がするな…

ミオさんが僕の隣に苦笑いをしながらやってきた。

「あはは…ライ君もやられちゃったか。他の生徒会メンバーの子の中にも同じ流れで入った子もいるよ。」

「…流星は生徒会長だと思っただよ…あやめのあの交渉力は上に立つ者には必要なかもしれないね…」

あのあやめの泣きそうな顔を見た途端断れる気がしなかった。恐らく今までの交渉においても有利に動いていたに違いない。

ただミオさん曰く、あのあやめの泣き顔は狙ってやっていないらしい。

あやめは将来社長の座に就く方が成功するかもしれない…

「さてさて、無事ライ君が生徒会に入ってくれたことだし、役職はどうしようかな?」

「そうだねえ、副会長の席は空いているけど、まだちよつと流石に副会長は早すぎるかもねー。」

「僕も流石に副会長はちよつと…」

「むむむ…今はどの役職が空いているんだっけ?」

「今はさつき言った副会長と、書記長、風紀委員長、あと美化委員長の席があいているよ。」

ミオさんはすぐさま資料を確認し、どの役職が空いているかを教えてくれた。

「あ、でもそれぞれの委員会ではもうすでに、長がいるんだけど、男女で合わせて長を2名まで任命されることになってるんだ。生徒会長だけは1人しか任命されないけどね。」

副会長はまだ早すぎる気も僕もしていたから一旦副会長は除外しよう。

そうすると候補に上がってくるのが書記長、風紀委員長、美化委員長だ。

「まあ、任命式が行われないとまだ役職を決定することができないし、もうすぐ何人かの生徒会メンバーがやってくると思うから、任命式前に気になった委員会の体験をしてもいいよ?」

ミオさんから役職の体験の提案をしてもらった。

どの委員会の体験をしようかと思っていると、生徒会室の扉が開かれる音がした。扉の向こうに振り返ると、2名の生徒がいた。

「あやめ先輩、ミオ先輩お疲れ様です!」

「こんやっぴー。」

1人はグレーのショートヘアの子で、頭に大きな星の形をした髪飾りをしており、背中から天使のような羽が生えている。

もう1人の子は紫のツインテールで、八重歯と腰から生えている鋭い尻尾が特徴的な子だ。

「かなたちちゃん、トワちお疲れ様だ余〜。」

「あれ？男の子？」

「ほんとだ、でもどこかで見たことがあるような顔のような…？」

入室してきた2人が僕に気づいたようだ。この子達も生徒会のメンバーなのだろうか？

「2人に紹介するね！今日から生徒会に入ることになった2年生のライ君だ余！仲良くしてあげてね！」

「ええっ!!新メンバーだったんですか!？」

「これはまたいきなり…あやめちゃんが決めたんでしょう？」

「えへへ、ライ君は生徒会に必要な人材だと思っただ余。」

2人はそれぞれの反応をしていたが、とりあえず自己紹介をすることにした。

「改めて生徒会に加入することになった2―Bの皇ライです。この学園に転入してまだ2ヶ月ほどですがよろしくお願いします。」

「あ、初めまして！僕は1―A、天使の天音かなたです！生徒会では美化委員長を担当しています！」

「トワも初めましてですね。同じく1―A、悪魔の常闇トワです。トワは風紀委員長を務めています。」

2人ともポルカと同じ1年生のようだ。1年生で生徒会に努めているのは驚いたが、この2人もとても優秀なんだろうな。

そんなことを考えていると常闇さんから声を掛けられた。

「あの皇先輩、先輩ってすいちゃんと仲良かったりします？」

「すいちゃん…すいせいのことかい？すいせいは確かに友人だが…」

「ああやっぱり、じゃあすいちゃんが言っていたのは先輩のことだったんですね。」

「すいせいが僕のことを話していたのか？」

「はい、よくトワはすいちゃんとよくゲームで一緒に遊んだり、カラオケに行ったりするんですけど、最近転入してきた子と仲良くなれた、ってよく話してくれるんですよ。優しくていい人だから機会があったらトワにも紹介したいって。」

すいせいがそんなことを…僕がいないときにそんなことを話してくれるのは嬉しいが何だか恥ずかしいな。

「でも確かにすいちやんが言ってたとおりで優しそうな人で安心しました！是非生徒会で一緒に頑張りましょ！」

にしし、と白い歯を見せながら常闇さんが笑った。

…なんだろう、自己紹介の時に悪魔と言っていたからもしかしたら悪い子なのかもしれない、と少しでも思ってしまった自分が情けない…すごくいい子じゃないか…

見た目は確かに悪魔かもしれないが本当は天使なのかもしれない。

「お、2人とも仲良さそうだねえ、ライ君とりあえずトワの風紀委員から体験してみる？」

「そうだね、お願いしてもいいかな常闇さん？」

「勿論です！トワのことはトワって呼んでください！」

「わかったよトワ、僕もライで構わないよ。」

「よろしくお願いしますライ先輩！」

「ちえー、僕の美化委員にも来てほしかったなあ。」

「もちろん天音さんの委員にも興味があるから、風紀委員の次にお願いしてもいいかな？」

「本当ですか？やったあ！」

こうして僕は生徒会に加入することとなった。

慌ただしい日々が始まりそうな気がするが、それもそれで楽しみにしておこう…

礼拝堂

あやめの（強制）勧誘で僕は生徒会に入ることとなった。

入った後はトワと天音さんからそれぞれ委員会の仕事と役割を教えてもらい、2人の委員会をそれぞれ体験してみた。

トワの風紀委員は学園内の風紀を取り締まっていて、朝は学園の門の前に立ち、生徒が乱れた服装をしていると注意をしたり、遅刻者を取り締まっていた。

ただこの学園の服装への規則はそこまで厳しくないため、ほとんど注意することはなかった。

遅刻者のリストを見せてもらうと、リストの中にみこの名前が入っていたが、そつとリストを閉じ見なかったことにした。

委員会を通してトワと話す機会があったが、彼女は悪魔ということもあり見た目で誤解されることがあるらしく、以前は少し自身の見た目にコンプレックスがあったそうだが。

トワも僕と同じくあやめに生徒会に勧誘されたようで、最初は乗り気ではなかったそうだが、生徒会の活動を行っていくうちに、彼女自身の真面目さや優しさ、意志の強さを周りに理解してもらえたようだ。で、彼女に自信に繋がりが、見た目のことも気にしなくなったようだ。

僕もトワに自分が転入した理由、コンプレックスの部分を話すと凄く共感をしてくれて、

「ライ先輩も生徒会での活動を通して、コンプレックスがなくなるというですね。トワも力になれることがあれば協力します！」

と言ってくれた。本当に凄くいい子だった…

僕もトワの力になれることがあれば協力することを伝えるととびきりの笑顔で喜んでくれた。

天音さんの美化委員は学園内の環境の美化、清掃用具の管理、そして学園内の花壇やプランターの花のお世話などを行っている。

仕事量で見るとかなり多いが、天音さんは背中に生えている羽で飛ぶことができ、移動や作業はかなりスムーズにテキパキできていた。僕も普段から掃除は好きで、委員会の活動を手伝っているときはかなり楽しかった。

天音さんとも作業の間話す機会があり、彼女の秘密を一つ教えてもらった。

その秘密とは彼女は握力がかなり強いらしい。彼女は恥ずかしがりながら握力測定器で数値を披露をしてくれたが、55.9kgというところでもない数値が出ていた。

僕自身の握力も計ってみたが50kgだったので男性よりも強い握力に凄いと思ってしまうた。

本人は女性として握力が強いことに不満があるらしく普段はこの握力を隠しているようだ。

ただ普段の生活では力の加減が難しいらしく、日常品の中でよく壊れてしまうことがあるらしい…

2人の委員会を経験させてもらったが、結局どの委員会に所属するかはまだ決まっていない。

あやめやミオさんからも生徒会に加入はしてもらったが、いきなり決まったことではあるので、委員会は決めるのはゆっくりで構わないし、今のところは生徒会の仕事もたまに手伝いに来てくれればそれでもいいそうだ。

一応生徒会に加入することになったことをクラスのおかゆとスバル、不知建のみんなに伝えることにした。

おかゆとスバルは応援してくれるようで、あやめとミオさんが困っていたら助けてあげてほしいと言っていた。

不知建のみんなはすごくいい笑顔で祝福してくれて、生徒会で何か大事な情報がゲットできたら共有してほしいとフレアに言われた。

みんなが祝福してくれたとき何故かいつも不知建のミーティングで使っているサングラスをメンバー全員が付けていて、僕にもサング

ラスをプレゼントしてくれた。

でもみんなから祝福してもらえるのはとても嬉しかった。フレアに言われた通り何か情報の共有は行っていいと思う。

生徒会に加入してから1週間、放課後に僕は学園の体育館の隣にある礼拝堂に立ち寄ろうとしていた。

以前すいせいとみこに学園を案内してもらったときに建物の一部として紹介してもらい気になっていた。

礼拝堂の静かな雰囲気が入っており、たまに気分をリラックスさせたい時立ち寄ることにしている。

僕は礼拝堂の入り口を入ろうとすると中に人がいる気配を感じた。

(先客かな…?)

礼拝堂の中を確認してみると、中央の主祭壇に2人の人物がいることを確認できた。

1人は修道女の格好をした赤髪の女性。もう1人は神父のキャソックと言われる服装と眼鏡をしており、白い髪と頭上の可愛らしいふわふわした耳が特徴で、恐らく女性と思われる。

その2人は僕が礼拝堂に入ったことに気づいたようで、赤髪の修道女が話し始めた。

「ああ…神父様、また迷える子羊がこの礼拝堂にやってまいりました…」

「そうですねシスターマリン、迷える子羊を救済していきましょう。」

迷える子羊…?もしかして僕のことだろうか?

「さあ、迷える子羊よ。あなたが懺悔をしたいことをお聞かせください。あなたが悔い改めることであなたの罪は神に許されることでしょう。」

「懺悔?いや特に懺悔をしに来たというわけではないが…」

「いえいえ、この礼拝堂に来るということは何か後ろめたいことがあるということです。さあ、そのご自身の見た目で何人の女性を侍らせてきたのかを懺悔してごらんなさい。」

…なんだか無理矢理懺悔をさせられそうな雰囲気になってきているな…

しかし本当に何も思いつかない…僕の悩みでもいいのだろうか？

「では懺悔の代わりではないですが、悩みを聞いてもらえますか？」

「ええ、何でも聞かせてください。」

僕はシスターと神父にこの学園に転入してきたこと、その理由について話をしてみた。

「なるほど、あなたはそこご自身の見た目に幼少期の頃からコンプレックスに近い悩みを抱えていて、この学園に転入してきたのですね？」

「まあ周りの目線というところですかね？この学園に来てからはあまりその悩みがなくなってきましたが…」

「安心してください、あなたの悩みはご自身の過去の経験から生み出されたものです。それをこれからの生き方で上書きしていただいだけの話なので、この学園での生活があなたの悩みを解決してくれることでしょう。」

神父からはこのようなアドバイスをいただいた。確かに焦っても悩みは解決しないし、少しずつ前に進んでいけばいいのかな…

「ありがとうございます。なんだか気持ちが悪くなりました。」

「いいですよ、我々は迷える子羊を救済するのが役目。では今回寄付金として…」

シスターが話を進めようとしたとき、礼拝堂の入り口から誰かが入ってきた。

「すいませーん、生徒から礼拝堂で変なことをしているって通報が入ったんですけどお？」

入り口からの声に振り返ると生徒会風紀委員長のトワがいた。

「トワ？」

「あれ？ライ先輩？」

「な、なんの御用ですか？今は迷える子羊の相談に乗っているだけですよっ。」

シスターは何故か焦っている様子だった。僕の悩みに乗っている

ただであつたんだが？

「ライ先輩こんなところで何してたんですか？」

「礼拝堂で心をリラックスさせようと来たんだが、シスターと神父がいて僕の悩みを聞いてもらっていたんだ。」

「へえ…」

僕の話聞いてトワはシスターをじつと見つめていた。

「そ、そうですねーいかがわしいことや怪しいことなどはなにも…」

「そういえばライ先輩、このシスターから何か変なこと言われませんでしたか？」

「変なこと？…：そういえば寄付金って話が出ていた気が。」

「ぎ、ぎくうー！」

相談が終わった後に寄付金の話が聞こえていたがあれは何の話だったんだろう…？

僕からの報告を聞くとトワはすごい笑顔になっていた。

「よーし船長、ちよーつと話を聞きたいから生徒会室まで来てもらえますか？」

「い、いやー、船長って誰のことですかね…：神父様逃げましょう!!」

シスターは神父がいたところを振り返ったがそこには誰もいなかった。

「ああ、神父ならさつき礼拝堂から出て行っていましたよ？」

「フブちゃん!?裏切ったのかあいつ!!」

「はいはい、とりあえず船長は生徒会室に連行ね。じゃあライ先輩ごゆっくり。」

「あ、ああ。」

「待ってトワ様！き、君もたすけてくださいあい!!」

シスターは叫びながらトワに首根っこを掴まれて礼拝堂から生徒会室に連行されていった。

普段は静かなはずの礼拝堂からは考えられない騒ぎが起きたが、ようやく静けさに包まれた。

やはりこの場所は静かな方が合っているな…

しばらくの間礼拝堂の中で目を閉じて心をリラックスさせること

にした。

勉強会

いつも通りの学園での授業が終わり、放課後の時間が訪れた。

普段であれば授業が終わればクラブハウスや自室に戻るか、不知建の部室、生徒会室に行く予定がある。

だが今日はクラスメイトのスバルが今日の数学の授業でどうしても分からないところがあるので、放課後教室に残って教えてほしい、と懇願されたため、スバルへの特別授業を開催しようとしていた。「ライほんごめんな…スバル今日の授業のちんぷんかんぷんすぎて…」

「全然かまわないよ。確かに今日の授業はちよつと難しかったし、僕も復習がてら付き合うよ。」

「ありがと…でもなんでおかゆも残ってるの？別に今日の授業躓いてなかったのに。」

スバルの席の前に僕が座り、その隣に参加予定ではなかったおかゆがちよこんと座っていた。

「いやー、今日は家に帰っても特にすることがないから、2人ともうちよつと一緒にいたかったんだよ。」

「ええ…邪魔すんなよ…?」

「だいじょぶだいじょぶ、多分ほとんど寝てるから。」

「まあ参加人数が多くて悪いことはないし…じゃあおかゆ、僕がスバルに教えている中で捕捉するべきところがあったら教えてくれるかい?」

「オツケー、任せてよ。」

こうして僕とおかゆの2人体制でスバルのサポートをすることになった。

「じゃあ早速始めようとするか。まずは基礎からおさらいしよう。」

「あれ?簡単なところからでいいの?」

スバルから疑問の声が上がった。

「こういう時って難しい問題をガンガン解いていくのが大事とか思ってたんだけど…」

「確かに応用問題を解いていくことは大切だ。でも応用問題も難問もまずは基礎ができていないと解くことが難しいんだ。特に数学は基礎の公式とかの覚え方が間違っていると、そもそも解けないことが多いからね。」

「なるほど…」

「逆に言うとも基礎がしつかりと理解ができていけば、どんな問題でもある程度順序立てて解くことができるから、基礎は本当に大事だよ。」

「ライが言うとも説得力あるな…」

「うんうん、本当に先生みたいだね。」

「よし、放課後だからあまり時間もなしそろそろ始めるぞ?」

「はい!ライ先生!」

こうしてスバルの特訓が始まった。

「先生!出来ました!!」

「どれどれ、採点してみるよ。」

授業内容としては、学園の授業と同じ流れで行い、スバルが理解ができなかったところをさらに噛み砕いて説明をした。

それである程度スバルが理解ができたなら、僕が作成した問題をノートに記載させ、解かせる。これを一連の流れとして行っていた。

「うん、問1〜問3までは正解だ。でも問4だけ惜しいな。」

「え、どこどこ?」

スバルは勉強が苦手というイメージを持っていたが、飲み込みが早く、要領が良かったため勉強を教えることにそこまで手がからなかった。

現状スバルは基礎の部分はあらかた理解ができており、応用の部分で躓いている、といった状況だ。

ただ、僕とおかゆが教えている感じでは応用も、解き方さえ理解ができればそのうち解けるようになると思う。

「途中まではちゃんと合っているよ。ただ最後の部分はここの公式を当てはめて…」

「ああ！そっか！」

「スバルちゃんこの短時間でここまで理解できるなんて覚えるの早いねえ。」

「ああ、成長スピードがかなり速いと思うよ。」

「へへへ、でもここまでできるようになったのも2人が教えるの上手いからだって！」

僕とおかゆがスバルを褒めると、照れくさそうに笑った。

教室の窓から外の様子を見ると、もうすぐ日が暮れそうになっており辺りが若干暗くなってきた。

「よし、じゃあ最後に一通りおさらいをしてお開きにしようか。スバル、あともうひと踏ん張りだ。」

「うん!!」

あれからもう一度今日の振り返りを行い、再度問題をスバルに解かせてみた。

「うん、スバル全問正解だ。」

「よっしゃあ!!」

なんとかスバルは全問正解することができた。

苦手だった問題を克服できたことが嬉しかったようでスバルは喜んでいて。

「おめでどうスバルちゃん、ライ君もお疲れ様。」

「スバルにここまで教えられたのもおかゆのサポートの賜物だよ、分かりやすい言葉でスバルに教えてくれて助かった。」

「…2人共ほんとに遅い時間まであんがとな、ここまでスバルに付き合ってくれて…」

「ん？何言っているのスバルちゃん？」

「え…？」

僕とおかゆは顔を見合わせて笑いスバルに伝えた。

「友達なら当然だろ（でしょ）？」

「！…へへっ、そうだよな！友達だもん!!」

スバルはとびきりな笑顔を見せてくれて、今日の勉強会は終了となった。

僕たちは教室から退室し、それぞれの岐路につくことになった。

「2人とも気を付けて帰るんだよ?」

「うん、おかゆと家近いから大丈夫だよ。」

「そうそう。あ、ライ君前に話したけど僕の家は今度遊びにおいでよ。」

「ああ、近いうちには是非頼むよ。」

「えへへ、約束だよ?」

「あつ!じゃあ今度スバルの家にも来てよ!」

「分かった。でも今日はもう遅いし、また明日話そうか。」

「それもそうだな、じゃあなライ!」

「ライ君また明日。」

2人は走りながら学園の門まで向かっていった。

「さて、僕もクラブハウスに戻るか…ん?」

僕も自室に戻ろうとした時に、誰かの視線を後ろから感じた。

1人だけの視線ではない、複数の視線だ。

確認しようとして後ろを振り返ったが、そこには誰もいなかった。

「気のせいかな…?」

遅い時間の学園に人がいるとも思えなかったので、気のせいと思うことにして自室に戻ることにした。

「あれが2—Bの皇ライか…」

「さっきごつちの視線に気づいてなかった?」

「どうなんだろう?たまたまじゃない?」

ライが去ったあと複数の人影が現れた。

人影の全員がいつの間にか撮影されていたライの写真を手を持っていた。

「総帥、どうするでござるか？」

人影のうちの1人から総帥と呼ばれた人物が前に出て、言葉を発した。

「以前トワ様と一緒に学園の前に立っていた男…絶対許さん！」

総帥なる人物はライの写真を手で握りつぶし、怒りを露わにしていた…

全員集結

「うーん…」

「あれー？ライ君悩み事？」

「ライが悩み事って珍しいな…」

学園での授業間の休憩時間にふと考え事をしているとおかゆとスバルに気づかれた。

「いや、悩み事ではないんだが、今朝に不思議なことがあって…」

「不思議なこと?？」

僕は2人の言葉に肯定の意味を込めて頷いた。

「僕が暮らしているクラブハウスで毎朝クラブハウス内の施設を清掃してくれている人がいるんだけど、僕の部屋は自分で掃除をしているから毎朝僕の部屋のごみの回収だけお願いしているんだ。毎朝部屋の前にごみ袋を置いてあるんだけど、今日はいつもより遅くなっちゃって…」

今朝

（今日はちよつとだけ起きるのが遅くなってしまった…ごみ回収間に合うかな…）

いつも通りの部屋の前にごみ袋を置こうと部屋から出ると、

「あつ…」

「？」

部屋の前に見知らぬ可愛らしい小柄な少女がいた。

少女はメイドの格好をしており、髪は綺麗なピンク色で長い髪を2つに束ねていた。

見た目からするに僕と同年か、近い年齢の子であろう。

その少女と僕は目が合ったがすぐに視線を外されてしまった。すると少女がとても小さな声で、

「ア、アノオオ…ゴ、ゴミイ…」

「ああ、いつもありがとうございます。」

恐らくこの少女が毎朝ごみを回収してくれているのであろう、と考
えお礼を伝えた。

僕は少女に手に持っていたごみ袋を手渡すと少女は受け取り僕に
一礼をした。

すると少女は凄いスピードで走り出し、その場を立ち去っていつ
た。

(風のような子だな…?)

取り残された僕はそのようなことを考えていた。

「…というようなことがあったんだ。その子は僕を見ているときずっと怯えている気がして、僕は何かしてしまっただろうか…」

「ああ…」

2人に今朝の出来事を話し終わると2人は何故か納得しているよ
うな顔をしていた。

「スバルちゃん…」

「ああ…多分スバルもおかゆと同じこと考えてると思う…」

2人は顔を見合わせて頷いていた。僕だけが状況を把握できてい
ないようだ…

「2人とも何か心当たりが？」

「うん…多分それあくあのことだと思うよ？」

スバルから聞き慣れない名前が出てきた。

「あくあ？もしかしてスバルはそのメイドの子と知り合いなのか？」

「スバルちゃんだけじゃなくて僕もねー。ライ君が会った女の子は僕
たちと同じ学年で2―Cの湊あくあ。あくあは僕やスバルちゃんと
も友達で、よく遊んだりしてるよ。確かこの学園でYAGOOにお
願いされたアルバイトとして、清掃や身の回りのお世話をやってるっ

て言ってたよ。」

「アルバイトか。だから僕のクラブハウスの清掃もやってくれているのか。」

「あくあは料理以外の家事は中々の腕前だからね。ただあくあはかなり人見知りでね。初対面の人とはうまく話せなかったりするんだけど、悪気があるわけじゃないから今朝のことは許してあげてね？」

「人見知り…そうだったのか。」

「まあ仲が良いやつにはよく喋ったりもするから、今度スバル達と遊ぶときにでも紹介するよ。」

「ありがとうスバル。いつもお世話になってるお礼をしたいから頼むよ。」

湊あくあ：近いうちにまた会えることができるだろうか…

そんなことを考えていたが、まさかその日のうちにまた再開することになるとは今の時点での僕は考えもしていなかった。

放課後、今日は不知建のみんなと街に遊びに行く予定があったので、街に向かっている。

「いやー、メンバーが全員揃うと気持ちいいねえ。」

部長のフレアが感慨深く呟いた。

前回はノエルがいなかったが今日は彼女も参加しているので、不知建メンバーが全員揃っている日だ。

「みんなこの前はごめんね。団長が入ってる部活が忙しくてどうしても参加できなくて…ライ君もせっかくの体験入部だったのにごめんねえ？」

「僕は大丈夫だよ。改めてよろしく頼む。」

ノエルは不知建に入る前より剣道部に所属しており、そこで部長を努めている。

彼女は普段とても温厚でのんびり屋さんだと言われているが、部活ではかなり動きが俊敏かつ優雅らしい。その動きが聖騎士に見えることから部活内では団長と呼ばれて慕われているようだ。

僕も以前剣道を習い事でやっていたことをノエルに伝えると、是非今度部活に遊びにきてほしいと誘ってもらえた。

「ねえねえライ君！」

ノエルと談笑していると、すいせいが僕の腕を引っ張ってきた。

「ライ君、一緒に写真撮りたいんだけど、そのまま正面を向いたまま私と顔の高さを合わせるように屈んでもらってもいい？」

「?こっかい?」

「はいチーズ！」

すいせいの指示に従い屈むと、すいせいが自身のスマホで僕とすいせいの写真を撮った。

「えへへ、ありがとう！」

「別に構わないが、いきなりどうしたんだい？」

「ライ君と付き合い長くなってきたけどさ、まだ写真一緒に撮ったことがなかったから欲しいな、って思っちゃって。」

確かに写真はこの学園に来る前のIDカード用の写真しか撮っていないかった。

僕のスマホにすいせいから今撮ったばかりのツーショットの写真が送られてきた。

すいせいは写真を見て嬉しそうに微笑んでいた。嬉しく感じてくれているなら僕も嬉しくなる。

すいせいが写真を見ているところをみことポルカが覗き込むと、

「あー!すいちゃんずるい!!」

「へへへん、いいでしょ。」

「ぐぬぬ…ライ君!みこ達とも撮るにえ！」

「ああ、構わないが…」

みことポルカとも写真を撮ろうとしたが、

「こらーみこちとポルカー。そんなことやったら街で遊ぶ時間どんどん無くなっちゃうよっ。」

先頭を歩いていたフレアに2人は注意されていた。

「えー、でも部長…」

「みこ達もライ君と写真撮りたいにえ…」

2人は口を尖らせてフレアに抗議していた。フレアも2人の気持ちを汲み取ってあげたいと思っっているようで何か案を考えているようだった。

「うーん、そうだなあ…あつ、じゃあさ！今日はゲーセンで遊んで、その終わりに不知建メンバー全員でプリクラ撮るってのはどうかな？」
「おお！」

フレアの場合に2人は満足したようで、そのまま僕の方に振り返りみことポルカに手を引っ張られた。

「ライ君ゲーセンに急ぐにえ！」

「ライ先輩早くしないと時間なくなっちゃいますよ！」

「はいはい…2人とも急いで転ばないようにね。」

僕は2人に引っ張られながらも、この状況が楽しいと感じていた。時間は有限のため、僕たちは急いで街に向かって走り出した。

すいせい side

「あはは、なにやってんのみこち達。」

「ライ君も随分不知建に馴染んできたね…ノエちゃん？何やってんの？」

「ライ君達が手を繋いでるの見てると団長もフレアと手繋ぎたいなあ、って思っちゃって。」

「はあ…ちよつとだけだよ。」

「うへへ、フレアあ…」

「ごめんやっぱりやめとくわ。」

「フレア?!そんなのあんまりだよお…あびやびやびや…」

「ノエルまた脳が破壊されちゃってるよ…いいのふーたん？」

「まあそのうち元に戻るって…それよりすいちゃんさあ…」

ふーたんが言葉をそこで区切って私に耳打ちしてきた。

「すいちゃん、ライ君のこと好きでしょ？」

「!!…うん、好きだよ。」

やっぱりふーたんにはバレてたか…

以前ライ君と約束…いや、契約だ。あの日以降からライ君に惹かれて、長い時間を過ごしてきた今、私はライ君に恋をしてしまったている。

ライ君には私のこの気持ちのことを今すぐ伝える予定はない。

ただ今は不知建のみんなとライ君といふこの時間を大事にしたいから…

みこちに似たようなことを言われたときにも感じたが、改めて他人から言われると恥ずかしい気がする…

「ふふふ、そっかそっかあ…青春ですなあ…」

「でもこのことライ君には言わないでね？」

「もちろんだよ。不知建の部長の名に懸けて言いません。」

「ふーたんだからそこは信頼してるけどね…あ、ノエルにも聞かれてたんだ…」

「大丈夫大丈夫、ノエちゃん今脳が破壊されてる状態だから聞こえてないよ。」

「あびやびやびや…」

「ならいつか…あつ！みこち達もうあんな遠くまで！」

「ほんとだ、私たちも急ごう！」

「すいちゃん、応援してるからね。」

「…ありがとう。」

その言葉を皮切りにふーたんと一緒にノエルの手を引いてライ君達を追いかけるように走り出した。

銀狼

あれから不知建メンバー全員で街の中のゲームセンターに辿り着いた。

トウキョウ租界の中でもかなり大きな規模のゲームセンターのよう
うで、メンバーの皆や学園の生徒もよくここを利用するみたいだ。

「ゲームセンターか…僕こういうところ初めて来たんだけど、どんな
ゲームがあるんだ?」

「」「ええっ!」「」

僕の何気ない発言で不知建の皆が驚いた顔で僕の方に振り向いた。

「ライ君…ゲーセン来たことないの?」

フレアが恐る恐る質問をしてきた。

「ああ、前の学校では友達と帰ったりとかしていなかったから…この
間皆と行ったカラオケも初めてだったんだ。」

僕の話を聞くとみこが僕の目をじつと見つめていた。

「ライ君…」

「な、なんだ?」

「さっきのすいちゃんの時みたいに屈むにえ。」

「?」

みこの指示に従い少し屈むと、みこに頭を撫でられた。

「ライ君…辛かったんだにえ…」

「ライ先輩…ポルカ達が傍にいますからね?」

ポルカにも頭を撫でられた。

…何故か2人に憐れな目で見られている気がする…

すいせいとノエルからも、

「ライ君いっぱい思いで作ろうね…?」

「団長がギョってしてあげようか?」

という僕が可哀想な人間であるかのような反応をされた…

段々と僕はいたたまれない気持ちになり、その場から走り出した。

「あっ!ライ君!」

「ま、待つんだにえ!!」

誰も僕を探さないでくれ…

その後すいせいとフレアが僕に追いつき、2人に腕を掴まれながらゲームセンター入り口前に戻る事となった。

何とか落ち着きを取り戻し、思わず錯乱してしまったことを皆に謝罪をして入店をした。

店の中には様々な施設があり、モニターに表示されている映像を元に遊ぶビデオゲーム（格闘ゲーム、ガンシューティングゲーム、音楽ゲーム、レースゲーム）、

景品をクレーンやレバーなどで掴んで獲得するクレーンゲーム、インスタント写真を撮影し、それを印刷したシールを製造するプリンクラなど、

多くの娯楽施設で溢れていた。

各自で好きなゲームを楽しんで、最後に皆でプリクラを撮ろうという話になったので、一旦解散という形になった。

僕は初めてなので、皆が遊んでいる様子を見て遊ぶものを決めようと思う。

と、思っていたが解散した後すいせいだけ僕と同じ場所に残っていた。

「あれ？すいせいは遊びに行かないのかい？」

「いやー、遊ぼうかなとは思ってたんだけどライ君ゲーセン初めてなんでしょ？一緒に回った方が色々ゲームの紹介してあげられるからライ君も選びやすいかなあって思ってたさ。」

「それは助かるよ、ありがとうすいせい。」

すいせいは困ったときなどに手を差し伸べてくれる。僕もすいせいが困ったときは力になりたいが、この学園にいる間はまだ先の

ようだ…

「ううん、…ライ君一個お願いがあるんだけどさ、ゲーセンを回る時だけ手繋いでもいい？」

「手を？」

「ほ、ほら…ここかなり広いからさ！結構逸れちゃったりすることが多いから！」

「なるほど、確かにここは広いから迷子になりそうだな…」

「ここで逸れてしまうと時間のロスにも繋がってしまうかもしれない。」

「ここはすいせいの提案に乗ることにした。」

「じゃあ行こうか、すいせい。」

すいせいに向けて手を差し出した。

「うん！」

すいせいも僕の差し出した手を伸ばし、手を繋いだ。

すいせいの手は暖かく、女の子特有の指の細さ、柔らかさがあった。

「えへへ…」

すいせいは僕の顔を見て恥ずかしそうにしながら微笑んでくれた。

すいせいの嬉しそうな顔を見ると僕も嬉しくなる。僕もすいせいに笑顔で返した。

すいせいと2人で店内を回っていると、クレーンゲームのコーナーに着いた。

すいせい曰くクレーンを操作をして景品をゲットする、というシンプルなゲーム内容だった。

辺りを見渡すと大きなぬいぐるみやお菓子などが景品となっているようで、一旦ここで遊んでみることにした。

僕ほどの景品の台がいいか探していると、大きな狼のぬいぐるみが陳列してる台を発見した。

狼の色はシルバーで、僕の髪色と同じ色ということもあって少し興

味が出た。

「ライ君いい台見つけたー?」

すいせいも台を探していたようで、僕がこの台に興味があることを伝えると頷いた。

「狼かつこいいじゃん!でもこの狼なんだかライ君に似てるよね?」

「ああ、僕の髪と一緒にの色をしているからな。僕もちよつと興味があるんだ。」

「確かに髪色とも似てるけど、顔もちよつと似てない?かつこいいけど優しい目をしてるところとかさ。」

「顔も?そうかな?」

「ねえねえ、せつかくだしやってみようよ!」

すいせいの一押しもあり、僕はこのクレーンゲームで遊んでみることにした。

ルールや動かし方はすいせいに教えてもらい理解はできたので、問題はなと思う。

僕は台にお金を入れてレバーでクレーンを操作した。

狼の位置とクレーンの位置をしっかりと確認し、僕はボタンを押した。

クレーンは狼に向かって下がっていき、アームが胴体の部分をしっかりと掴んだ。

そのままクレーンが狼を持ち上げて、景品の取り出し口まで運び、アームが開かれ狼をゲットすることができた。

「ええ!?ライ君一発ゲットってすごいじゃん!!」

「たまたまだよ、すいせいの教えが良かったのかもしれないな。」

取り出し口の狼を手にとってみると、見た目よりも大きく感じられた。

手触りも柔らかく、抱き心地も凄くいい。

「ライ君写真撮るからその子抱いたままこっち向いてー?」

すいせいはスマホを構えて僕とぬいぐるみの写真を撮ってくれた。

「うん!いい感じ!ねえライ君、私もその子抱っこしてみてもいい?」
「もちろん。」

僕は抱えていたぬいぐるみをすいせいに渡した。

すいせいも僕と同じようにぬいぐるみを抱きしめていた。

「うわあーすっごいフワフワ！めっちゃ抱き心地いいねえ…」

すいせいは抱きしめながらすごく満足そうな顔をしていた。

ぬいぐるみを正面から見つめ微笑んでいて、気に入っているようだった。

その姿を見た僕はある提案をした。

「すいせい…よかったらそのぬいぐるみもらってくれないか？」

「え？」

「ゲームを教えてくれたのはすいせいだし、すいせいもそのぬいぐるみを気に入っているみたいだからどうかなんて。」

「ほんとにこの子もらっちゃってもいいの…？」

「ああ、すいせいがそれで喜んでくれるなら僕も嬉しい。」

すいせいは僕の提案に驚いているようだったが、嬉しそうにもしていた。

「…じやありがたいただくね、ありがとうライ君！」

ぬいぐるみを抱きかかえながらすいせいは笑顔を見せてくれた。

最近すいせいが笑顔を見せてくれると僕は嬉しく感じる人が多い。僕はすいせいの笑顔を見るのが好きなのかもしれない…

すいせいと他のクレインゲームのコーナーを探索していると、ポルカとみこを発見した。

ポルカは大きな猫のぬいぐるみを持っており、みこも同じぬいぐるみをゲットしようとして試みているようであった。

「ぐぬぬ…全然取れる気がしないにえ…」

「みこち違うやつにしたら？結構お金使っちゃってるでしょ？」

「でも！みこもこの猫ちゃん欲しいもん！」

「みこちまたやってんのー?」

「ん? すいちゃんと言君?…あっ!! すいちゃんそのぬいぐるみ!」

「へっへー、いいでしょー!」

みこは僕がすいせいに渡したぬいぐるみを見て羨ましがっているようだった。

「…みこはぬいぐるみが取れなくて苦労しているのに…ポルポルもすいちゃんもずるいにえー!」

「ポルカ3回目でこの子取れちゃったからなあ…」

確かにみこだけぬいぐるみが取れないのは可哀想な気がする…

「頭はアームで掴めるけど、取り出し口に運ぶまでに落ちちゃうんだにえ…」

みこがプレイしていた台を見ると、大きな猫のぬいぐるみが陳列されており、僕が見た限りだともう少しで取れそうな気がしていた。

「みこ、今度は頭じゃなくて胴体を掴んでみらうかい?」

「にえ? 胴体?」

みこは不思議そうな顔をしながらも、僕の言ったとおりに操作をした。

すると、アームがしっかりと固定されたようでそのまま取り出し口までぬいぐるみを運ぶことができていた。

「やったあああ! 取れたにえ!!」

「みこちやったじゃん! ポルカとお揃いだね!」

みこちとポルカは互いに喜び合っていた。

「ライ君教えてくれてありがとにえ!」

「どういたしまして、みこ他にお勧めなゲームはないか?」

「そうだにえ…あっち側にゾンビを倒すシューティングゲームがあるんだけど、みこ的には面白かったからお勧めだにえ。」

「あー、あっち側のやつね。ししろんも…あ、ポルカの友達もそのゲーム好きですよ。」

みこはポルカのお勧めのゲームを教えてください、次はそちらに向かうことにした。

「ありがとう、教えてもらったゲームもやってみるよ。」

「みこ達はもうちよつとここら辺で遊んでおくにえ。」

「そのあとふーたんとノエルも探さなきゃね。」

「僕たちもそれが終わったら合流するよ。」

「みこちとポルカ、後でぬいぐるみ持って写真撮ろうよ。」

「撮る撮る〜！」

「じゃあまたあとでにえ〜。」

「一旦みこことポルカと別れた。」

「ライ君行こっか？」

「ああ。」

僕とすいせいはまた手を繋ぎ直し次のゲームの場所に向かった。

遊戯女王

すいせいと手を繋いだままみこ達にお勧めされたゲームコーナーに向かっていった。

僕はすいせいの手を柔らかいと感じていたが、すいせいも何か感じていたようだ。

「ライ君って身体細いのになんか手がつしりしておつきいよねー。」

「そうかな？すいせいの手は細くて柔らかいね。」

「ちよ、なんか恥ずかしいからその発言やめて！」

そんなことを話しながら歩いていると、目的のゲームの近くまで着いた。

みこ達も言っていたようにかなり人気があるゾンビを倒すガンシューティングゲームらしく、すでに先客の女の子が遊んでいた。

その子は僕たちと同じ学園の制服を着ており、その制服の上からパーカーを着て、キャップを被っており、さらにそのキャップの上にパーカーに付属しているフードを被っていて、顔はこちらからはよく見えなかった。

プレイを観察していると、ゾンビを倒した数や銃の弾を当てた箇所、自身が生き残っているタイムをポイントとして計上していき、ランキングを競っていく、というようなゲーム形式だ。

その子は襲ってくるゾンビの群れを的確に頭を撃ち抜いて倒し、全てのゾンビを倒し尽くしていた。

「凄いな…」

僕はその子のプレイを見て感心していると、すいせいは首を傾げていた。

「…なーんかあの格好と後ろ姿見覚えがある気がするんだよなあ…」

プレイが終わりそのゲームの前から移動し、その子が僕らの方向に向かって歩いてきていた。

ちやうど正面から来ていてすれ違いそうになったが、

「ああっ!!」

すいせいがその子を指さし大きな声を上げた。

その子はビクツと驚き、その拍子で被っていたフードが外れた。

「君は…」

フードを被っていて気づかなかったが、フードが外れたことにより綺麗なピンクの髪が見え、顔もハッキリと見えた。

そう、その子の正体は僕が朝クラブハウスで出会った少女、湊あくあであった。

「あくたーん!!」

すいせいは湊さんの名前を呼び抱き着いていた。

「ス、スイチャン…」

やはりおかゆ達が言っていたように彼女は極度の人見知りらしい。すいせいが抱き着いたことによつてどうしたらいいか分からない、というように困惑しているようだった。

ただ、すいせいの反応を見る限り、恐らく仲がいい関係ではあると思う。

「あつきたーん!こんなところで会うなんて奇遇。ゲームして遊んでたの?」

「ウ、ウン…」

「そうだよねー!あくたんゲーム大好きだもんね!」

「ウン…」

「ねえねえあくたん!この辺りに新しいハンバーガーショップできたから今度一緒に食べにこうよー!」

「ウン…タベル…」

「やったあ!日程とかは電話するから2人で決めようね?」

「ウン…」

…仲がいいとは思う…

見た限りではすいせいが湊さんを圧倒しているように見えるが、2人のコミュニケーションの取り方であると信じたい…

すいせいは満足したのか。僕の方に振り返り湊さんを引っ張ってきた。

「ライ君紹介するね!私の友達の湊あくあ!あくたんっていうの!

めつちやくちやゲームが上手な女の子で、すつごく可愛いのだ!!」
「アツ…」

すいせいが僕に湊さんの紹介をしてくれたが、僕は彼女を知っていた。
た。

湊さんも僕の顔を見て思い出してくれたようだ。

「…こんにちは湊さん、今朝以来だね。」

僕は湊さんに挨拶をすると彼女は首を縦に何度も降ってくれた。

「あれ？ライ君あくたんのこと知ってるの？」

「ああ、実は…」

僕はすいせいに今朝の経緯を説明した。

「なるほどねー、確かにあくたんクラブハウスのバイトやってるって
言ってたよね？」

「うん…」

湊さんの声が少し大きくなってきた。少し慣れてきたのだろうか？

そして僕は湊さんに伝えたいことを思い出し、彼女の顔を見つめて
伝えた。

「湊さん…いつもクラブハウスの清掃や僕のごみ袋の処理とかしてく
れてありがとう。おかげでいつも不都合なく過ごせているよ。」

僕からの日頃のお礼を伝えると、湊さんも僕の顔を見て話してくれ
た。

「ううん…ライ君いつも綺麗に使ってくれているし、ごみの量も多く
ないから特に苦労してないよ…？」

たどたどしいが何とか湊さんと会話ができ、お礼を伝えることがで
きた。

するとすいせいからある提案が出た。

「ねえねえ、せっかくだしさ3人で遊ばない？」

確かに、この機会に是非湊さんとも仲良くなりたいたい。

「そうだね、湊さんはどう？」

「うん、遊びたい。あと、ライ君…」

「？」

「あくあでいいよ…?」

そう言った後彼女は顔を赤らめてうつむいた。

僕とすいせいは彼女の様子を見た後、顔を見合わせて互いに微笑んだ。

彼女は人見知りではあるが、とても優しい心の持ち主であるのだと感じた。

この調子だとすぐ仲良くなれそうだ…

その後3人で先程のガンシューティングゲームで遊んだ。

あくあはすいせいの言う通りゲームの腕もよく、ゲームに関する知識も多く持ち合わせていて、初心者の僕でも楽しめるようにゲームに関するアドバイスをしてくれた。

1度目は動作やルールの確認をあくあとしながらプレイしていたので、スコアは伸びなかったが、2度目では的確にゾンビを撃ち抜いたり、立ち回りを理解ができていたので、スコアがかなり伸び、今までのゲームをプレイした人のランキングの中で10位に食い込むことができた。

ランキングを見てみると同じ名前の方が記載されており、よく見ると

AqukinMaster

と言う名前が10位以上のランキングに全て記載されていた。

AqukinMasterという名前はあくあがゲームで遊ぶ際のユーザーネームらしく、このゲーム以外のゲームのランキングにも名前が載っているようだった。

あくあは自分が好きなもののお話を話すことは好きなようで、僕にいっぱい話しかけてくれた。

すいせいは僕があくあに教えてもらっている間も黄色い悲鳴を上げながらあくあに話しかけていた。

先程のようにすいせいが一方的に話していてもあくあは頑張つて

受け答えをしていた。

あくあ曰く、すいせいはいつもいっぱい話しかけてくれて、コミュニケーションを取ろうとしてくれるのは嬉しいらしい。

上手く返せないときもあるようだが、すいせいもちゃんとあくあが話すのを待つてあげているようで実はあくあとしても話しやすいそうだ。

すいせいとあくあはゲームセンター以外でもパソコンや家庭用ゲーム機で遊んでいるらしく、そこに生徒会のトワを加えて3人で遊んでいるようで、今度僕も遊びに加えたいとあくあから誘ってもらった。

あくあから見ると僕はゲームのセンスがあるとのことで、他のゲームでも遊んでみたいと言ってくれたので喜んで了承した。

この後に不知建のみんなとプリクラを撮るので誘ってみたらそれは恥ずかしいようで、逃げるようにして帰っていった。

次に彼女と遊ぶのが楽しみだ…

あくあと別れ僕とすいせいは不知建の皆とプリクラを撮るためにプリクラコーナーに向かっていた。

既に他のメンバーは集合しており、僕たちを待つていたようだった。

「すいちゃんライ君遅い〜!」

部長のフレアに注意をされてしまった。

「すまない…ゲームセンターが初めてだったものだからいっぱい遊んでしまったよ。」

「まあライ君がゲーセンの良さを知れたということでもいいんじゃない?」

怒られていた僕たちにノエルが助け舟を出してくれた。

「そういえばノエルとフレアはどこで遊んでいたんだ?」

僕の質問にノエルは満面の笑みを浮かべ、フレアは少し疲れている

ような顔をしていた。

「団長とフレアはねえ…ずっとプリクラを撮ってたの！」

そう言ったノエルは大量の写真を取り出した。

「ノエちゃんずっと開放してくれなくて…疲れちゃったよ。」

フレアはそう言いつつも嫌な顔はしていなかった。やっぱり2人はとても仲がいいな…

「すいちゃんはあれからライ君とずっとデートだったにえ？」

「…みこちー？何か言ったー？」

「…なんでもありません…」

みこことすいせいも仲良く話しているようだった。みこの顔が引きつっているように見えるのは気のせいだろう。

「ねえねえ、皆早く撮ろうよ。」

ポルカが痺れを切らしたようで、皆をせかしてきた。

フレアもポルカに同調し、皆に向かって声を掛けた。

「そうだねえ、時間もなくなってきたしそろそろ撮ろっか？」

「…はあーい。」

すいせい side

プリクラを不知建のみんなと撮り終わって、解散して家に帰宅した。

私の部屋にはお姉ちゃんの部屋ほどではないがぬいぐるみを飾っている。

そして今日ライ君からもらった狼のぬいぐるみが仲間に加わった。

今はそのぬいぐるみを持ち上げて正面から見つめている。

この子を見つめっているとライ君からもらった時の嬉しさを思い出して顔が緩んでしまう。

「えへへ…嬉しいなあ…」

ライ君から：好きな人から初めてもらったプレゼント。
ライ君にその気がないと分かっているも嬉しいものは嬉しい。
私は狼のぬいぐるみを胸元に抱きしめた。

(今はライ君に気持ちを伝えはしないけどいつかは…)

図書館

いつも騒がしい学園は今日は休日。

クラブ活動をしている生徒はグラウンドを走っていたり、校舎にいるが授業がある日に比べるとその数は少ない。

いつもの騒がしい雰囲気も好きだが、物静かな雰囲気も僕は好きだ。

そんな僕は最近予定がない日は学園のある場所に立ち寄っている。

「さて、今日は何の本を読もうかな？」

そう、僕が普段暮らしているクラブハウス内の図書室だ。

僕は読書が好きで、小さなころから小説、図鑑、専門書など様々な書籍を読み漁ってきた。

本は自分が知らないこと、考え方などを広げてくれる。

作者によつて様々な表現の仕方があるので、そんな発見をするのも楽しみでもある。

休日のため図書室を利用する生徒は多くはないが、この図書室には漫画や雑誌も置いてあるので、寮生活をしている生徒などは利用している姿が見受けられる。

以前みこが漫画を読むために利用をしているのを見かけたことがあり、漫画を読んで爆笑していたところを窓口の人に注意されて涙目になっているのを見かけた。

当たり前だが、図書室では静かにしよう。

僕は気になった小説を2冊選んで手に取り、読むための席を探していた。

僕がよく利用するのは図書室の奥の窓際の席であるが、生憎先客がいて、利用することができなかった。

使えないものは仕方なく、その隣の席を利用することにした。

僕は席に着き、本を読み始めようとした。

(?)

僕は視線を感じ、隣の席に視線を移した。

そこにはライトブルーの長髪でウェーブがかかっており、白い花飾りが特徴で綺麗な黄色い目をした女の子がいた。

耳が人間よりも長いため恐らくエルフだろうか…？

その子はずっと僕の目をじーっと見つめていた。

気になってしまった僕は声をかけてしまった。

「あの、僕に何か？」

その言葉でその子はハツとなり、

「ご、ごめんなさいー！」

僕に謝罪をし、そのまま読書を再開したようだった。

僕は不思議に思いながらも気にしないようにし、読書を始めた。

3時間ほどで読み終えたところで、また別の本を探しに行こうかと思ったときに僕のスマホに着信が入った。

連絡相手はあやめであった。

内容は生徒会メンバーで街に出て喫茶店でお茶会をするようでそこに参加しないか、というお誘いだった。

特に断る理由もなかったなので、参加する意思をあやめに伝えて、席を立ち上がり、図書室を後にした。

???
side

隣に座っていた男子が図書室を後にしていく…

でもあれは間違いない…10年ぶりに再会することには思わなかったけど…

「ライ君…この学園にいたなんて…」

声をかければよかったと後悔をしているが、先程はライ君を見過ぎでしまい彼に怪しまれてしまっている可能性があったのでそれでは

きなかった。

ライ君は私のことは覚えていないかもしれない…でもそれでもかまわない。

次に会ったときは…

制服から私服に着替えて学園前のモノレールに乗り、街に到着した。

あやめに教えてもらった喫茶店の前まで着くと、その店の前にトワが立っていた。

「あつ、ライ先輩！」

「やあ、トワ。」

トワも今日は制服ではなく、ガリー系の女の子らしい私服で来ていた。

「？ライ先輩？どうしました？」

「いや、トワの私服を初めて見たなって思ってる。」

「あ、確かに…どうです？」

「よく似合ってる、可愛いよ。」

「えへへ、ありがとうございます!!」

トワは照れ臭そうに笑っていた。

トワに聞くと今いるのは僕たちだけで、あやめたちは道が混んでいるようで10分ほど遅れているようだ。

外で待つのも退屈なので、先に喫茶店の中で待っていることにした。

トワ曰く、この喫茶店で提供されるデザートはすごく人気らしく、生徒会メンバーでよく集まったりしているらしい。

デザートは皆が来てから決めるということで、先に飲み物を頼んで待つことにし、僕はコーヒー、トワは紅茶にした。

生徒会の皆を待つ間にトワと飲み物を飲みながら雑談することに

した。

「そういえばライ先輩、この間あくたんと会ったんですね？」

「ああ、不知建の皆とゲームセンターに行ったときにたまたまね。」

「この間すいちゃんとかくたんとゲームしてるときにその話が出たんですよ。3人で遊んでていいなあって思っちゃって…」

そういうトワは少し拗ねているような寂しいような顔をしていた。

「トワもライ先輩と一緒に遊びたいです…だめですか？」

「ダメなわけではないよ。あくあたちからトワもよく一緒に遊んでるって話を聞いたから今度4人でゲームしようって約束したんだ。」

「本当ですか!？」

この前あくあとすいせいと話した内容を伝えるとトワの顔が明るくなった。

「それで今日はその件でトワにお願いがあつて…」

「トワに?何ですか?」

「僕皆で遊ぶ用のゲーム機やPCを持っていなくてさ…2人はトワが結構詳しいって言うていたから、今度PC選びとかを手伝ってくれないか?」

「!!勿論です!トワに任せてください!!」

「ありがとうトワ。」

いきなりのお願ひにもかかわらず、トワは快く引き受けてくれた。

やはりトワは優しくいい子だな…

「2人ともお待たせ。」

「ごめんねー、道が混んでて混んでて…」

トワとの話の間に生徒会メンバーのあやめ、ミオさんがやってきた。

天音さんは別の予定があるらしく、今日は残念ながら欠席のようだ。

「あやめちゃん、ミオちゃんこんやっぴー。」

「ライ君急に呼び出してごめんだ余。」

「全然、むしろ呼んでくれて嬉しいよ。」

「ライ君の生徒会加入の歓迎会やってなかったからねえ。今日はかな

たがないからウチらだけだけど、今度全員でやる予定だからねえ
く。」

「ありがとうミオさん。楽しみにしてるよ。」

「余、お腹空いちやった…デザート頼もく。」

「僕、パフエとパンケーキ食べたいな。」

「ライ先輩食べますね!？」

「確かに人よりも良く食べはするかな…?」

「人より食べていてそのスタイル…羨ましい…」

「ライ君女の子を敵に回した余…」

「…ちよつとお手洗いに行つてくるね。」

「あつ、逃げた。」

僕はその場から戦術的撤退をした。そしてトワ、僕は決して逃げ
はしない。…逃げてはいない。

トワ side

ライ先輩…うまい具合に逃げたな…

そんなことを考えていると、ミオちゃんに話しかけられた。

「トワ、何かいいことあった?」

「えっ?…何で?」

「トワいいことあったとき身体を横に揺らす癖あるからさ。」

「そんな癖があったのか…気を付けよう。」

「いいことというか…ライ先輩にお願い事されたから?」

トワはミオちゃんにライ先輩にお願いされた内容を話した。

「なるほどね。確かにそれはトワが適任かもね。ライ君から頼られ
たのが嬉しかったの?」

「うーん、その気持ちもあるかもだけど、一番はトワと仲が良い友達と
の和をライ先輩が広げているってことかな?トワの友達はいい子し
かないから、ライ先輩にどんどん知ってもらっているのが嬉しいと

「どうか…」

「そつかあ…確かにライ君自身もいい子だから、そういった繋がりが
どんだん広がるのは嬉しいよねえ。」

ミオちゃんもトワの気持ちに共感してくれた。

「あやめはどう思う?」

ミオちゃん正面に座っていて、メニュー表を眺めているあやめちや
んに声を掛けた。

「…」

「あやめ聞いている?」

「ん?ごめん、余なんも聞いとらんかった。」

「…」

トワとミオちゃんは見つめ合い、ため息をついた。

「あやめ、罰としてあやめが頼んだデザート最初の一口ウチがもら
うね?」

「あつ、トワも。」

「ええっ!?ふ、2人とも酷い余お!」

あやめちゃんが涙ぐみながら抗議をしていたが聞かなかつたこと
にした。

…トワの最高の友達のためにもトワができることはサポートして
いきたい。

その第一歩としてライ先輩の環境を整えてあげよう。

注文したデザートが運ばれてきて、ライ先輩も戻ってきた。

「ただいま…あやめどうかしたのかい?」

「ら、ライ君…ミオちゃん達に酷いことされたんだ余…」

「?トワ、何かあったのかい?」

ライ先輩がトワに質問してきた。その答えにトワは、

「なんでもないですよ、ライ先輩♪」

トワは悪魔らしくいたずらっぽい笑みを浮かべてあげた。

級友

「ここが僕の家だよ。」

「おお、これは風情があるな。」

「おかゆ家に来るの久々だなあ。」

今日は以前から約束をしていたおかゆの家に遊び行くことになっていた。

おかゆの家は和風建築の家で、僕の実家も和風建築になっているから少し懐かしい雰囲気を感じた。

「さあさあ、入って〜。」

「お邪魔します。」

「おっじゃましま〜す!」

おかゆの家に入り、おかゆの部屋まで案内してもらった。

「あらあら、おかゆお帰り。」

「あ、婆ちゃんただいま〜。」

部屋をおかゆに案内してもらった途中でおかゆのお婆さんに出くわした。

おかゆのお婆さんはおかゆのように猫の獣人ではなく、普通の人間のようなだった。

「おかゆの婆ちゃんこんちわ〜!」

「スバルちゃんいらっしやい。久しぶりに来てくれて嬉しいよ。あら、男の子?」

「初めまして、皇ライといいます。おかゆさんとは学園でのクラスメイトで仲良くさせていただいています。」

「あなたがライ君ね?おかゆから話は聞いてるよ。」

「そうだったんですか?」

「学園に転入生が来て、仲良くなれた〜って嬉しそうにしてるのよ?」
「もーう、婆ちゃん恥ずかしいからやめてよ〜。」

お婆さんの報告におかゆが若干照れているようだった。

「あ、そうだ、これつまらないものですが受け取ってください。」

「あら、っ！丁寧にどうも。まあどら焼きー！」

おかゆの家に遊びに行くことが決まったときに、おかゆのお婆さんに手土産が必要だと思い、おかゆからお婆さんの好物を聞いてキョウトから取り寄せておいたものだ。

「ありがとうねえ、後で部屋におにぎり持って行くからゆつくりして行ってね。」

「ありがとうございます。」

「やったあ！おにぎりおにぎりー！」

「おかゆの婆ちゃんのおにぎり美味いんだよなあ…」

おかゆのお婆さんに挨拶を終え、おかゆの部屋に向かった。

「ようこそ僕の部屋へ。」

「特に前に来た時と変わってないな。」

「お邪魔します。」

おかゆの部屋は女の子らしい部屋であるが、本棚には多くの漫画、机にはPC、家庭用ゲーム機が多く置かれており、ゲームが好きなおかゆらしい部屋になっていた。

「…ん？」

おかゆの部屋を見渡しベッドに目をやっていると、布団の中が少し動いているのが見えた。

しばらく観察していると布団の中からもぞもぞと猫が現れた。

「にやあ。」

「てまにやんただいまー。」

「おおてまにやん、久々だなあ。」

「てまにやん？猫の名前かい？」

「そうそう、本当は手毬っていうんだけどかわいいでしょー？」

おかゆがてまにやんを抱きかかえ僕に差し出してきた。

僕はそのまま受け取り、てまにやんを胸に抱えた。

てまにやんは僕の顔をじっと見つめていたので、僕も思わず見つめ返してしまった。

その様子を見ていた2人は可笑しかったのか噴き出していた。

「あつはつは、ライ君見つめすぎだよお〜。」

「ら、ライ…そんな真面目な顔で見つめ合わなくてもっ…」

2人の反応はあまり気にせず、てまにやんの柔らかい毛並みの頭を撫でた。

「猫ってかわいいな…」

「ライ君てまにやん気に入った？」

「ああ、僕もちよつと猫を飼いたいなって気持ちになったよ。」

僕が撫でるのを続けているとてまにやんも気持ちがいいのか嬉しそうに喉を鳴らしていた。

「むー、てまにやんいいなあ…ねえライ君僕も撫でてみて？」

「おかゆを？」

「てまにやんを見てるとすっごい気持ちよさそうにしてるから、頭撫でてみてほしいなあって。」

「まあ構わないが…」

おかゆの要望でおかゆの頭を撫でた。

おかゆの頭はてまにやんのように柔らかく、手触りとしてはおかゆの方が心地がいい。

「んっ…」

おかゆはくすぐったいのか声を我慢しているようだった。

「ふわあ…あつ…気持ちいい…」

…頭を撫でているだけのはずだがおかゆの様子がおかしい気がする…

しかし、おかゆの頭の感触をもう少し楽しみたいと思う自分がいて手が止まらない…

「あん…ライ君…だめえ…」

「はいストープ!!」

我を失いかけていると、スバルが僕とおかゆの間に入り止めてくれ

た。

「ああん、スバルちゃん何で止めるのー？」

「バカかお前は!? 友達同士の変なところなんか見たくねえわ! ライも何やってんだよ!!」

「すまない…おかゆの頭の感触がよくてつい夢中に…」

「全く…2人の変な様子見せられるスバルの気持ちにもなってよ!」

スバルに初めて怒られてしまった…

確かにスバルからしたら置いてけぼりになってしまっている状況だった。

「てか今日はライにゲーム教えるんだろ? 早く遊ぼうよ。」

「それもそうだったねえ、ライ君今度ゲーム機買いに行くんでしょ?」

「ああ、トワに教えてもらいながら買いに行く予定なんだ。」

「オツケー、じゃあ僕たちがよく遊んでいるゲームは基本的にみんなやってるやつだからそれで遊んでいこう。」

「ありがとう、僕自身が今までゲームをやってこなかったから色々教えてもらって助かるよ。」

「いいっていいって、スバルたちもライと遊べることで増えると嬉しいからさ。」

おかゆとスバルはクラスメイトの中でも一番仲がいい友人だ。

そんな2人は僕が困った時や分からないことがあった時はすぐに助けてくれる。

こんな2人に見合った友人に僕は慣れているのだろうか…

「ん? どうしたのライ君?」

「なんか神妙な顔つきだな?」

「…2人は僕が困ったらいつも助けてくれていたらいいだろう? 僕は2人に何かできていのか、って考えててさ。」

僕は2人に考えていたことを伝えると、2人は顔を見合わせた後、不思議そうな顔をしていた。

「僕たちいつもライ君に助けてもらっているよ?」

「この前も遅い時間までスバルに勉強を教えてくれたし。」

「僕もクラス当番の日に課題持ってもらっちゃったし、授業中寝

ちやつてる時も起こしてくれてるし。」

「お菓子とかも作ってくれるしな！」

「2人とも…」

「僕たちだけじゃなくてクラスの皆や生徒会の皆、ライ君が所属してる不知建の皆、きつとライ君に助けてもらってることが多いはずだよ？」

「そうそう、それにライも前言ってたじゃん？友達なら当然、ってさ！！」

「…そうだったな、ありがとう2人とも。」

この2人には頭が上がらない…

僕の抱えていた悩みもあつという間に解消してしまふ。

ならば僕は2人が助けを求めれば必ず力になろうと誓った。

「さてさて、じゃあ早速ゲームしようよ。」

「スバルレースゲームやりたい！」

「レースゲームか、この前すいせいとあくあとゲームセンターで少し遊んだな。」

「ライ、あくあと仲良くなれたの!？」

「すいせいから紹介してもらって、そこからゲームについてあくあとに教えてもらったんだ。」

「おお、人見知りのあくあとそんなに早く仲良くなれるなんてライ君やるねえ…」

「…あくあ仕込みってことならライに勝てる気しなくなってきた…」

「じゃあこのレースゲームで最下位の人は罰ゲームにしない？レースで1番になった人の言うことを聞くとかどう？」

「面白そうだな、それでやってみよう。」

「ライ!?そんなゲームに乗るなあああ！」

レースの結果僕とおかゆが1位になったときに、スバルが最下位だったときがそれぞれ1回ずつあり、罰ゲームが決定した。

おかゆはスバルに対して部屋の片付け、漫画の整理を手伝わせられていた。

僕は今の時点で聞かせる内容がなかったので保留にした。

スバルには何をしてもらおうか…

「おいライ！悪い顔になってんぞ!!」

「気のせいだ。」

襲来

学園での授業が終わった後、主に最近は不知建の部室ではなく生徒会室に赴いていた。

実は近々学園で大きなイベントである学園祭が行われる予定で、その準備に必要な予算の編成や報告書の作成のためにあやめから手伝ってほしいという要請が来たからだ。

もちろん僕も生徒会に所属しているので断る理由もなく、承諾した。

生徒会室に入ると机の上には書類が山積みになっており、生徒会メンバーは頭を抱えていた。

僕は書類の作成などの作業は苦ではなかったので、自分が処理する報告書はすぐ終わった。

ただ、天音さんが少し苦戦していたので天音さんの分も引き受けた。

「あやめ、頼まれた報告書の作成終わったよ。」

「ライ君ありがとう、本当助かった余。」

「ライ先輩手伝ってくれてありがとうございます！」

「どういたしました、お役に立てたのなら何よりだ。」

「ぶはあ…トワもやっと終わったあ…」

皆一通り処理を終えたようで一息ついていた。

「皆お疲れ様、お茶淹れたから飲んでねえ。」

ミオさんが一息入れるタイミングを見計らってお茶を淹れてくれていた。

僕はこのタイミングで出すのが得策かと思い、持参したお土産を取り出した。

「皆、実はキョウトから取り寄せたどら焼きを持ってきているんだが食べないか？ミオさんが淹れたお茶にも合うと思うから、よかったら受け取ってほしい。」

そう、先日おかゆの家に遊びに行った際にお土産として持っていつ

たどら焼きだ。おかゆの家へのお土産だけではなく、生徒会メンバー用と不知建メンバー用にそれぞれ取り寄せておいた。

「どら焼き!?!余どら焼き大好き!!」

「やったあ!」

「ライ先輩ありがとうございます!」

「ライ君わざわざありがとうございます。」

皆喜んでくれているようだった。そのまま皆に配っていると、僕のスマホに着信が入った。相手は…フレアだ。

「ごめん皆、電話が入ったから少し席を外すね。」

皆へ了承を取り、生徒会室から出て電話に出た。

「もしもし?」

「あ、もしもしライ君?今大丈夫?」

「ああ、ちょうど生徒会の仕事もキリがいいところまで終わったから大丈夫だよ。」

「よかった、この後不知建メンバーで学園祭についてのミーティングするんだけど、ライ君も久しぶりに参加できないかなって思ってた連絡したんだ。」

「そうだったのか、確かに最近生徒会の仕事が続いていたから不知建に顔を出せていなかったからな…」

「きつと皆ライ君の顔見たいと思ってるよ。でも来れそうだったらで全然大丈夫なんだけど…」

フレアの言葉で不知建メンバーの皆の顔を思い浮かべた。久しぶりに皆に会いたい、という気持ちが生まれてきた。

「分かった、不知建に寄る用事もあったし、生徒会の皆に挨拶したら部屋に向かうよ。」

「ほんと!?!じゃあ部室で待ってるね!」

「ああ、じゃあまた後で。」

フレアとの会話が終わり、電話を切った。

急いで仕事を終わらせて不知火建の部室に向かう…

フレア side

現在部室には私とすいちゃんがいる。ノエちゃんは剣道部に顔出し、ポルカは部室に向かっている途中、みこちは…小テストの補修らしい。

ちようど今ライ君に電話をし、ミーティングに参加するか確認したところ久しぶりに参加できる、と確認が取れて電話を終えた。

すると、すいちゃんが不安そうな顔をして声を掛けてきた。

「ふ、ふーたん、ライ君どうだった…?」

私はその不安を吹き飛ばしてあげるためにも笑顔で答えてあげた。

「ライ君今日は来るって！生徒会の仕事を終わらせてからみたいだけど。」

「本当!？」

その答えにすいちゃんの顔が明るくなり、嬉しそうだった。

「よかったねすいちゃん。」

「うん…嬉しい。」

最近ライ君が部室に来てなかったこともあり、すいちゃんは寂しそうだった。

すいちゃんだけではなく、不知建の皆、もちろん私もだがライ君がないことに寂しさを覚えていた。

でも今日は部室に顔を出すと彼は約束をしてくれた。忙しい中でも私たちの関りを大切にしてくれる彼の優しさを感じられて嬉しい。

「でもすいちゃん、ライ君の連絡先知ってるなら連絡でもしてみればよかったんじゃない?」

「だ、だって、何て連絡したらいいか分からなくて…」

「うーん、ライ君なら何て送っても返事してくれそうだけどなー。」

「それは…そうかもだけど…」

そう言いながらすいちゃんは頭を俯いていた。

この頃のすいちゃんはとても可愛い。もちろん元からも可愛いけど、恋をしてからもっと可愛くなった気がする。

「まあそれはともあれ、ライ君に学園祭一緒に回れるか聞くんでしょ？」

「うん、でももう回る人が決まっていたらどうしよう…」

「もう…すいちゃん考えすぎー。」

先程可愛くなったと言ったが、ちよつと弱くなったとも感じる。気持ちちはわからなくもないけど…

「じゃあさ、今から聞いてみなよ？生徒会室まで迎えに行つてさ。」

「ええ!？」

「ええ!?!、じゃありません。ほら、行った行つた。」

私はすいちゃんの背中を押して、部室から追いやろうとした。

入り口の前まで押すと、すいちゃんの耳元で囁いてあげた。

「大丈夫、すいちゃんなら上手くいくよ。」

「!フレア…」

すいちゃんは顔だけ私を見ていたが、そのまま前を向き直し、深呼吸をしていた。

「ふう…よし!行つてくる!」

「いつてらつしやい!」

すいちゃんは部室を飛び出し、生徒会室の方向へ走り出した。

「すいちゃん、頑張つて…」

ライside

フレアとの電話を終えた後、あやめ達に不知建に顔を出さないといけなくなつたことを伝えると、仕事も落ち着いたし、今日は行つても構わない、と頬に餃子を付けたあやめが言ってくれたので僕は不知建の部室に向かうこととなった。

久しぶりの不知建での活動にわくわくしている自分がいて、部室に向かう足取りが軽かった。

フレア…ノエル…ポルカ…みこ…そしてすいせい…皆の顔を思い

浮かべて僕は部室への道を辿っていた。

部室に向かうための階段が目に入り、階段を上ろうとした時、階段の上から聞き覚えがある声に呼び掛けられた。

「ライ君!!」

「…すいせい?」

フレアと一緒に部室で待っているはずのすいせいがいた。

すいせいの様子からすると、先ほどまで走っていたようで肩で息をしていた。

何故走ってこちらに来ていたのかは気になったが、それでも久しぶりにすいせいに会えたことの方が嬉しかった。

「久しぶりだねすいせい、会えて嬉しいよ。」

「!!…私もライ君に会えて嬉しい。」

すいせいも同じ気持ちだったようだ。僕は嬉しくなり笑顔を浮かべた。

そんな中すいせいは呼吸を整え、僕の目を真つすぐと見つめた。

「ライ君…お願いがあるの。」

「お願い?」

僕が繰り返した言葉にすいせいは頷いた。

「学園祭の日…私と!」

すいせいの言葉を聞いている途中、僕が通ってきた廊下からの視線に気づいた。

(この視線…以前スバル達と勉強会で解散した時に感じたものと同じ…?)

視線を感じる方に振り返ると2人の人物の姿が見えた。

1人はシャチのような黒いフードを頭に被り、フードと同じマスクを付けた少女。

もう1人は刀を背負った侍のような…忍者のような恰好をした少女。

よく見ると2人はそれぞれ耳にインカムのような内線機を付けていた。

「あ、いたいた、標的見つけたよー。」

「ラプ殿、どうするでござるか?」

2人は誰かと通信をしているようだった。

先ほどのフードの少女が言った標的…2人の視線が僕に向いていることから導き出される答えは…

「標的というのは僕のことかな?」

「うん、そうだよー。皇ライせんぱあい。」

「風真たちの総帥の命令でござる、いざ尋常に…」

フードの少女は腰を落とし姿勢を低く構え、侍少女は背負った刀を鞘ごと取り出し構えた。

「勝負!!」

2人は真つ直ぐ僕に詰め寄ってきた。

(まずいな…不知建の皆の用のどら焼きが…仕方ない…)

僕は階段の上にいるすいせいに声を掛けた。

「すいせいーこれを預かっていてくれ!」

そのまますいせいにどら焼きが入った紙袋を投げ渡した。

「えっ!?わ、わあ!!」

すいせいは何とか紙袋を胸元でキャッチしてくれた。その姿を見届けた僕は正面の2人に向き合った。

フードの少女は拳を構えて、侍少女は鞘に収められた刀でそれぞれ殴りつけてきた。

連続で攻撃が繰り出されているが、僕はそれを次々と躲していた。

(この2人なかなか動きが素早い…でも見切れないことはないな。)

動きは素早い攻撃パターンが一定で、ある程度予測はできるため、彼女らの攻撃は僕には当たらなかった。

しばらく攻撃が続いていたが、なかなか攻撃が当たらないため、2人の動きが止まった。

「もう、何で当たらないのー!」

「悪いけど、君たちの動きはもう見切ったよ。」

「この短時間で風真達の動きを見切ったでござるか!」

攻撃が当たらなければどうということもない。しかし、こちらは攻

撃する理由がないので攻撃はしていない。そのため決着がつくこともないので、このまま攻防が続くのは少し面倒だ。

(このまま距離を置くのが得策か…だったら！)

僕は2人に背を向けて思いつきり廊下を走り出した。先程までの動きを見るとスピードではこちらに分があると判断し、追いつかれなようなスピードで距離を空けることにした。

「ええ!?はっや!!」

「ま、待つでござるー!」

2人は追いかけて来るが、予想通り僕との距離の差を埋めることはできていないようだった。

僕はそのままスピードを緩めず、廊下の先の階段を勢いよく登り、彼女らを撒くことにした。

???
side

「あーあ、取り逃しちゃった。」

「あそこまで手強いとは…無念でござる!」

標的を取り逃がした…組織内で掃除屋と用心棒と呼ばれている2人がミツシヨンに失敗するのは初めてだった。

皇ライ…総帥から受けたミツシヨンは彼を捕縛すること…

このミツシヨンに失敗すると給料を半年分カットすると総帥に言われた瞬間から、今回はどんな手段を使っても完遂すると仲間と誓った。

彼の姿を見失いはしたが、特に問題はない。

「沙花又、位置は特定できたでござるか?」

「もちろんだよいろはちゃん、シャチの特性舐めないでよねー。」

沙花又と呼ばれた少女はシャチが持っている特性の超音波で情報の発信が行えており、標的がどこに逃げたのかも既に把握済みであった。

「こよちゃん。標的の彼、そっちの実験室の近くに行つたから準備お

「願いー。」

『はあい！まっかせてー！』

インカムで仲間連絡を取り、捕縛の準備を進めていく。

総帥の嫉妬で出されたミッションなので、彼には申し訳ない気持ちはあるが、こちらにも色々事情があるため仕方がない。

「さ、風真たちも後を追うでござるよ。」

「あーん、待ってよいろはちゃん。」

我々も引き続き標的の後を追いつ出した。

総帥

追手の2人を振り切り、3階の理科実験室の前までやって来た。
(彼女らの目的は不明だが、しばらくの間姿を隠しておくのがいいかな…)

僕がそんなことを考えていると、実験室の扉が開かれていることに気づいた。

ここは普段は授業の時間にしか使われておらず、現在は放課後の時間であるため、人の出入りも無いと判断しここに身を隠すことにした。

実験室の中に入り、辺りを見渡すと、窓が黒いカーテンで覆われているため薄暗く、机の上に顕微鏡、スタンドに立てかけられている液体が入っている試験管やフラスコ、棚には標本や人体模型が置かれており少しだけ不気味な雰囲気を感じられた。

「ここならすぐには見つからなそうだな…」

そんな独り言を呟いていると、置き去りにしてしまったせいせいのことを思い出した。

一応せいせいに連絡しておいた方がいいと思い、電話をかけようとしたその時、

「じゃっじゃじゃーん!!」

「!?」

いきなりの陽気な声と実験室の電気がついたことにより僕は驚いてしまった。

声のする実験室の入り口の方へ振り返ると、そこには笑顔を浮かべ、白衣を着た薄桃色の髪色で頭部に耳が生えた女の子がいた。

「君は…きっきの2人の仲間かな?」

「そうですー!初めまして皇ライ先輩、こよはh o l o o Xの頭脳、博衣こよりでーす!」

その子はウインクをしながら自己紹介をしてきた…

先程の2人と比べて好戦的ではないように見えるが油断はできない

い。

「こよたちの目的は先輩の捕縛なんですー、だから捕まってくれませんか？」

「…僕を捕まえてどうする気かな？」

「さあ？こよたちはラプちゃんに命令されただけでそこまでは聞いてませんね。」

博衣こよりと名乗った女の子はそう言いながら実験室の扉を閉め、鍵をかけた。

(鍵をかけられた…そうになると脱出手段は一つしかない…)

僕は脱出の経路として考えていた窓を見た。

ここは3階。窓から飛び降りても恐らく問題はない。問題はどのタイミングで実行に移るかだが…

「あ、先輩？窓から逃げようとか考えてます？」

「…その口ぶりからすると何かしらの対策があるみたいだね？」

「はい！窓の外にはルイルイが待機しているので、例えば窓から逃げ出したとしても無駄ですよー？」

なるほど、仲間を既に配置していたということか。窓付近で待機しているということは恐らく空を飛べる特性を持っていると思っただいだろう。

何かここを脱出する手段はないか…

頭をフル回転させていると、先程すいせいに連絡を取ろうとしていたことを思い出した。

僕は机の下に屈み込み、スマホですいせいに理科実験室にいることをメッセージで伝えた。

そしてすぐさま立ち上がり、再び彼女と向き合った。

しかし、そのタイミングで僕はある違和感に気づいた。

(何だ？この甘い匂いは…っ!?)

僕がこの匂いに気づいた瞬間、強烈な眠気に襲われ、床に膝をついた。

「あつ、やっと効いてきましたかー？」

「これは…催眠ガ…ス…」

ぼやける視界に映ったのは試験管とフラスコを手元に持っていた彼女の姿だった。

「この液体同士を合わせると、あら不思議！簡単な催眠ガスの出来上がり、つてもう聞こえてませんか？」

意識を手放すまいと抗いを続けたが、視界がどんどん暗くなっ
ていき、そして…

僕の意識は暗闇に落ちた…

こよりside

「ふう、やっと終わったよお…」

ラプちゃんから命じられたターゲットの捕縛に成功した。

本来はいろはちゃん達の時点で確保できる想定だったが、思っていたよりもやり手だったようだ。

確かにこよがここまで追い込むことができたが、その間でも脱出の手段を色々考えていたようだったし、ルイルイが窓で待機していなければ、本当に窓から逃げられていたかもしれない。

さて、しばらく起きることはないけど早めに連行しないとねー。

外にいるルイルイにインカムで連絡を取ることにした。

「ルイルイ？ターゲットの捕縛完了したから運ぶの手伝ってー？」

『オツケー。ラプラスに任務完了の連絡入れるから、終わったら運びましよう。』

「はあい。」

連絡を終えた後、眠っている彼に目を向けた。

「うーん、ラプちゃんの用事が終わればもちやいたいなあ…モルモットとして優秀そうだし…あつ、助手という手もありかも。」

そんなことを考えながら眠っている彼の頭を撫でてあげた。

すいせい side

「はあ…はあ…」

ライ君が女子生徒に襲われているところに遭遇してしまった。

あの2人には見覚えがある。確かh o l o xとかいう変な集団のメンバーだったはずだ。

その2人からライ君が上手く逃げ切ったのは目で追っていたが、あつという間に見失ってしまった。

ライ君が逃げた方角を追って探していたがどこにも彼は見つからない。

途方に暮れているとライ君から連絡がきた。

『3階の理科実験室にいる。』

ライ君からのメッセージを確認した瞬間目的地向かって走り出した。

(待っててライ君…聞いてほしいことがあるんだから…)

そんな思いを抱き、ライ君がいるはずの理科実験室に到着した。

「ライ君!!」

扉を開けながら彼の名前を呼んだ。

いつもであれば、名前を呼ぶと笑顔を向けながら返事をしてくれる彼からの返答があるはずだった。

しかし実際は広くて暗い実験室に私の声が木霊しただけであった

…

(いない?…どうして…)

彼がいないという事実が私の不安を駆り立てる。

急いで彼の携帯に電話をした。

帰ってきた声は携帯の電源が切られているという音声だけだった。

ライ君が?の場所を伝えた可能性を考えたが一瞬でその考えを否定した。

ライ君がそんなくだらしない嘘をつく筈がない。

走ったお陰で頭に酸素が足りていないことと、私の思考を落ち着かせるために呼吸を整えた。

徐々に思考がクリアになってきて、辺りを見渡した。

ライ君がこの実験室にいたのはおそらく事実。であればここでも何かがあったに違いない。

私は実験室で探索を始めると、暗い床に光るものを見つけて拾い上げた。

「これって…ライ君のサングラス？」

間違いない。不知建の正式メンバーになり、ライ君が生徒会に加入したときにフレアが渡したものだ。

これは不知建メンバーの証。不知建を大切にしてきている彼がこんなところに置き去りにするのはとても考えられない。

(じゃあどうして…もしかして捕まってしまったとか…?)

最初のあの2人は標的と言いつ、ライ君を狙っていた。

倒すのではなく、捕まえるということも標的と言いつてもおかしくない。

「ライ君を探さなきゃ…」

あんな変な集団に捕まったらライ君が何をされてしまうか分からない。

ただ、私だけでは探すのは難しい。そこである人物に電話をかけた。

「もしもし、ちよつと力を貸してほしいことがあつて…」

ライ s i d e

「うっ…」

目を開くと辺りは薄暗く、窓がない見知らぬ一室にいた。

部屋は暗く、奥までははっきりと見ることができなかつた。

(確かさっきまで僕は実験室で眠らされて…)

眠りから意識が徐々に覚醒し始め、自分が置かれている立場に気が付いた。

僕の身体は椅子に座っている状態で、腕と足は肘掛けと脚に縄で四

肢が縛られており、身動きが取れない状態になっていた。

試しに身体を動かしてみたが、縄が強く縛られているため動く気配はなかった。

自分がこういった状況になっているのは間違いなく、最初に襲撃してきた2人、実験室で出会ったこよりという少女によるものだろう。(さて、どうしたものか…)

そのようなことを考えていると、部屋の奥から人の気配を感じた。

「ほおーん、博士の催眠ガスからもう目が覚めてんのか。」

「やっぱり沙花又たちを軽くあしらったただけの実力はあるということかしら?。」

声と足音が徐々に近づいてきて僕の目の前まで来た。

足音が止まった瞬間、薄暗い部屋が急に明るくなり目がくらんだ。

目が光に慣れて視力が戻り、正面をしっかりと見据えた。

すると僕の目の前には、2人の人物がいた。

1人は高身長で目が鷹のように鋭い女性。

そしてもう1人は対極的に低身長で、大きな角が特徴で拘束具のような服を着ている少女だった。

その幼女が僕に向かって話しかけてきた。

「お前が皇ライだな?。」

「そうだが…君たちは?。」

「ふっふっふっ…よくぞ聞いた!!。」

幼女は待つてましたと言わんばかりに、高身長の女性と一緒に自己紹介を高らかに始めた。

「刮目せよ!吾輩の名はラプラス・ダークネス!h o l o Xの総帥にして、ラプラスの悪魔だ!!。」

「そして私はh o l o Xの女幹部、鷹嶺ルイと申します。以後お見知りおきを。」

2人の自己紹介を聞いて僕はあることに気づいた。

「悪魔?トワと同じなのかい?。」

僕がその質問をすると、ラプラスと名乗った幼女の身体が固まった。

固まったのは一瞬で、幼女が僕に向かって手を翳すと縄が僕の身体をきつく縛り始めた。

「ぐっ…締め付けが…」

「お前があの方の名前を口に出すな。」

彼女の黄金の目の輝きが増している…

おそらく念力のような力を使っているのだろう。

先程まで僕を襲撃してきた3人はラプ、という名前を出していた。僕を襲う指示を出していたのはおそらく彼女に間違いない。

ただ疑問に思っているのが、なぜ彼女は僕にこのようなことをするのだろうか？

僕の記憶には今までに彼女と出会った記憶がない…

「なぜ自分がこんな目にあっているのか、と考えているようだ。吾輩はそこにも腹が立つ。」

「ラプ、程々にしておきなさいよ？このアジトもいつ見つかるかわからないんだから。」

「ああ、こいつに2つ質問をしたらずらかるぞ。」

2人の会話から察するに僕に聞きたいことがあるようだ。

だから僕を捕まえる必要があったのか…？

幼女が僕に真つすぐ目を合わせて来た。

吸い込まれてしまいそうな黄金の瞳に思わず目を逸らしたくなるがそれはできなかった。

「今の話を聞いているからわかると思うが、お前には答えてもらおうことがある。黙っていれば縄の縛りをもっと強める。勿論嘘についても強めるからな？」

「…分かった。」

「では1つ目の質問だ。お前は生徒会に所属しているな？何故生徒会に入った？」

「…生徒会長のあやめにスカウトされたからだ。生徒会に入る前からあやめとは友達で、生徒会の仕事を手伝ってほしいと頼まれた。」

「なるほど、嘘ではないようだ。では次の質問だ…」

僕は次の質問が来るのを待った。…が、なかなか次の質問が来な

い。

彼女の様子を見てみると、顔を下に俯いており、わずかだが身体が震えていた。

「あの…」

「勝手に発言するな！」

彼女は再び僕に手を翳し縄の縛りを強めた。

「っ！」

縛られている四肢に痛みが生じ、声が出そうになるが必死に堪えた。

「お前は質問にだけ答えればいい…最後に大事な質問だ。…お前は生徒会風紀委員長の常闇トワと…っ、付き合ってるのか!？」

「……………はっ！」

彼女から予想もしない質問が来たため間抜けな声が出てしまった。

僕とトワが？付き合う、というのは男女間の交際のことか…？

「質問に答えろ!!」

「ぐあっ！」

締め付けがさらにきつくなる。自身の骨が軋むような感覚だ。

「お前がトワ様と生徒会の活動をしているところを見かけたことがある…お前と話しているときのトワ様のあんな笑顔…吾輩は見たことがない！」

「ちよ、ちよっとラプ、落ち着きなさい！」

鷹嶺ルイと名乗った女性が止めに入ろうにしたとき、部屋のドアが思い切り開かれる音がした。

「誰だ!？」

ラプラスがドアの方に意識を向けて集中が切れたからか、縄の縛りの強さが元に戻った。

痛みが引いたことにより一息つけたので、僕もドアの方に目を向けた。

ドアから2人の人物が入ってくるのが見えて、その2人が誰かが分かった瞬間僕は安堵した。

「ライ君!!」

「助けに来ましたよライ先輩。」

「…すいせい…トワ…」

僕の学園内での知人の中でも、最も頼りになる2人が現れた。

記憶

すいせい side

…holoXアジトに向かう前の実験室…

ライ君を何とか探し出したと思った私はトワに連絡をした。

「もしもしトワ、ちょっと力を貸してほしいことがあって…」

『どしたんすいちちゃん？急ぎの要件？今トワ、ライ先輩にもらったどら焼き食べながら休憩中なんだけど…』

「そのライ君に関係することなの！お願い!!」

『…分かった。すぐ行くから場所教えて?』

私の必死な声に只事ではないと気づいてくれたトワに場所を教えた。

5分後にトワはすぐに実験室に駆けつけてくれた。

そのまま私は事情をトワに説明した。

「なーほーね。ライ先輩がholoXに攫われた可能性がある…：ラプラスの奴何考えてんだか…」

「私も探したいんだけど場所に心当たりがなくて…だからトワお願い！」

私はトワに頼み込んだ。その姿を見たトワは私を安心させるように笑顔を浮かべた。

「まあ他ならぬすいちちゃん頼みだからね、任せといてよ。ちなみにすいちちゃん何でもいいからライ先輩の私物とか持つてない?」

「ライ君の?…あつ、サングラスなら持つてるよ。」

私は実験室で落ちていたライ君のサングラスをトワに渡した。

「うんうん、これがあれば大丈夫。」

「でもこれでどうするの?」

「まあまあ見ててよ、ちょっとだけ離れてて?」

そう言ったトワから少し離れた。離れたところからトワの様子を見ていると、トワは目を閉じて何も無い空間に手を翳した。

すると何も無い空間から黒い扉が現れ、扉がゆっくりと開かれた。

扉の中から小さな黒い丸っこい生き物が出てきた。

「トワこの子は?」

「この子はビビっていうの。トワの使い魔なんだー。」

そう説明するトワはビビという生き物をトワの頭の上に乗つけると、ライ君のサングラスをビビに見せていた。

「ビビ、このサングラスの持ち主がどこにいるか探せる?」

ビビはサングラスをじーっと見つめた後、トワの頭の上から飛び降り、実験室の扉から出て行った。

「多分見つけたみたい、すいちゃん追いかけてよ!」

「うん!!」

「ライ君!!」

実験室でいなくなったライ君をやつと見つけた。

私の予想通りライ君は捕まっていたんだ。

「…すいせい…トワ…」

いつも通り返ってきたライ君の声。

ただ、ライ君の様子からすると疲弊しているようで、私たちに気づかせないよう無理をしているように見えた。

ライ君をこんな目に合わせたのはこいつらだ…

h o l o Xの総帥と幹部だった気がする。恐らく首謀者は総帥だろう。

「ト、ト、ト、トワ様!」

「…ラプラス、生徒会の風紀委員長だけでなく、不知建のメンバーよ。」

「ラプラス!ライ先輩に何やってんだ!」

トワは総帥に詰め寄ろうとしていた。

「ち、違うんっすよトワ様!吾輩、この男に質問することがあっただけで…」

「質問？ライ先輩から何聞こうとしてんの？」

「そ、それは…」

何だかトワの質問に答えたくないようだった。

でもそのおかげであいつは今ライ君から意識を離してる。今のうちには…

「こ、こいつとトワ様が付き合ってるかを確認したかったんですよ!!」

…は？トワとライ君が付き合ってる…？

「はああああ!?!」

トワもそんなことを言われるとは予想できていなかったようで、素っ頓狂な声を出していた。

「な、何でそんなことになってんだよ!」

「前トワ様の生徒会の活動中にこいつと話してるのを見かけて…その時のトワ様凄く楽しそうな顔をしてたから…」

「ちげーわ!ライ先輩と話すのは確かに楽しいけど…だとしてもその考えは飛躍しすぎだろうが!」

トワは必死に否定していた。

そっか…ライ君は生徒会でも活動しているから、そこでの人との関わりは知らなかったな…

トワがちよつと羨ましいかも…

そんなことを考えていると事態が進もうとしていた。

「もういいんすよ!吾輩のこのラプラスの瞳をこいつに使えば真実が分かる!…ここにいる全員にも見せてやる!」

「ちよ、ライ君に何する気!?!」

「ラプラス!それはやめておきなさい!」

「うるさい!」

総帥がそう言うと、女幹部と私は念力のような力で地面に抑えつけられた。

動けない…ライ君を助けなきゃいけないのに…!

女幹部も立ちあがろうとしているようだったが、苦戦していた。

ただトワだけは立ち上がった。トワの方が悪魔としては立場が上だから影響を受けていないようだった。

そんな私たちの様子を見て、黄金の瞳をさらに輝かせていた総帥はライ君に向き直り、目を合わせていた。

「これから吾輩のラプラスの瞳を使って、お前の記憶と心を映像として投影する。この力は消耗が激しいからできれば使いたくなくなかったが…」

「や、やめ…ぐあっ！」

ライ君の身体に縛られている縄が強くなっている。彼の苦しんでいる声を聴くなんて耐えられない。

「お願い！もうやめて！」

「ラプラスやめろ！」

私の声を聴いてトワが阻止するために走り出した。

「さあ、お前がこの学園で1番大事に思っている人物を教えろ！」

トワがライ君達に手が届きそうになったその瞬間、部屋が黄金の輝きに包まれた。

私はあまりの眩しさに目を閉じた。

恐る恐る目を開くと、既に光が収まっていた。

ライ君の方を見るとライ君は目を閉じて項垂れていた。おそらく意識がないと思う。

するとライ君の身体から白い球体のような物が出てきて、部屋の中央に浮かび出した。

「これがライ君の記憶と心…？」

その球体は徐々に光が強くなり、球体に人の顔が浮かんできた。

その球体に映った人物は…トワだった…

確かあの球体に映るのはライ君が学園で1番大事だと思っている人…

やっぱりあいつの言う通りライ君はトワが好きだったんだ…

「あれ…う…おかしいな…」

私の目から涙が溢れてきた…

目の前が霞んで何も見えない…

私は立っているのも、この映像を見るのが辛くなり顔を下に向けて座り込んでしまった。

「すいちゃん！すいちゃん！」

トワが必死に私の身体を揺さぶってくる。

「…何、トワ？」

「あの映像ちゃんと見て！」

「…いや、いいよ…ライ君が誰を大事に思っているのか分かったし…」

「馬鹿！いいからほら、立つ！」

トワに腕を掴まれて無理矢理立たされた。

正直もう見たくなくなかったが、トワに言われるまま球体を見た。

さつきと同じようにトワが映っていたが、トワだけでなく、トワと同じ生徒会のメンバー、ライ君のクラスメイト、不知建メンバーが映し出されていた。

映像の最後には私の姿が映し出されていた。

ライ君と最初に出会った頃、不知建の体験入部、ゲーセンでぬいぐるみをプレゼントしてくれた時、色々なライ君と私との思い出が映し出されていく…

するとあることに気づいたトワが私に耳打ちをしてきた。

「ねえすいちゃん、他の皆よりすいちゃんが映し出されている時間長くない？」

「!!」

確かにライ君と仲が良い人や、よく関わりがある人が映し出されていたが、一瞬顔が映る程度だった。

(私の場合は思い出も…もしかして…)

球体の光が弱くなってきた最後の映像が映し出された。

(約束…破ったら許さないからね。)

(ああ。僕とすいせいの約束…いや、契約だな。)

これは…ライ君と私だけが知っている契約…

ライ君もあの日から私のことを大事だと思っていてくれてたのかな…

また涙が溢れてきたがさつきとは違う種類の涙だ。

「すいちゃん…よかったね。」

トワは私に声をかけながら背中を撫でてくれた。

トワもフレアと同じで私のライ君への気持ちを知っていた。

「ありがとう…トワ…」

そして球体の光が消え、ライ君の身体に吸い込まれるように戻っていった。

これでひと段落…あれ？ライ君の側にいたはずのあいつがいない？

「ねえ？総帥はどこ行ったの？」

部屋の周りを見渡すとドアの前にこそそこそ逃げ出そうとしている総帥の姿が見えた。

そのままドアが開かれて逃げだすために走り出そうとした瞬間、何かに躓いたのか盛大に転んだ。

「いつてええええ!?!」

「逃すかアホ！」

そう言うトワを見ると、トワは事前に自分の尻尾を使い総帥の足に巻き付けていたようだった。

「今日という今日はこつてり絞つてやるからな！覚悟しとけ！」

「ト、トワ様あ！あつ、でもそれもいいかも…」

トワは総帥の足を掴み、引きずって部屋を出ていった。

残された女幹部はライ君の元に近づき、ライ君を縛っていた縄を翼で切り裂いた。

そして私の方を向き謝罪をしてきた。

「ごめんなさい。私達がラプラスの暴走に手を貸した結果、あなた達に迷惑をかけてしまった。」

「まあ私は別にいいけど、ライ君には目を覚ましたら直接伝えてあげて？」

「ええ約束するわ。では私はラプラスを助けに行ってくるからこれで…」

女幹部はそう言い残し部屋を後にした。

部屋にはライ君と私だけが残された。

「…ライ君？」

寝たままのライ君に声をかけて、身体を揺すってみた。

しかしライ君はまだ目を覚ます気配がない。
「…保健室に運びますかあ…」

保健室

すいせい side

あれから私はライ君を保健室に連れて行き、フレアに電話をして事の顛末を伝えた。

「そう、ライ君が目を覚さないから起きるまではこのまま一緒にいたいの…」

『そっかあ、すいちゃんもライ君も色々大変だったね…ミーティングは別日でも大丈夫だから、今日はすいちゃんが一緒にいてあげて?』
「うん、ありがとうふーたん。じゃあまた…」

私はふーたんとの会話を終えて電話を切った。

姉街にも念のため帰りが遅くなることを連絡しておいた。

保健室の外で電話をしていたので、再び保健室に入った。

ライ君は保健室のベッドで眠りについており、保健室の先生に容態を診てもらっていた。

「ちよこ先生、ライ君はどう?」

「あらすいせい様。特にライ様の様子変わりはないわね。」

彼女は癒月ちよこ。この保健室の主で悪魔だ。見た目もスタイルも良く、性格も穏やかなため生徒からもかなりの人気を誇っている。ただ仕事中に居眠りして他の先生に怒られている姿をよく見かける…

ちよこ先生はライ君の頭を触りながら診断結果を教えてくれた。

「呼吸の乱れもないし、外傷もあるわけじゃないからそのうち目を覚ますと思うんだけど…」

「そっか…」

その話を聞いたあと保健室の机にライ君から預かっていた紙袋を置き、ベッドの横にある椅子に座って目の前で眠っているライ君に視線を移した。

(異常はない…それでも起きないのは何でなんだろう…?)

静かに眠っているライ君に疑問を思っているとちよこ先生に話し

かけられた。

「それにしてもすいせい様が男の子を保健室に連れて来た時はびっくりしたけれど…大切な人なの？」

「…うん、不知建の皆とか私が大切に思っている人達と同じくらいにね…」

「うふふ、すいせい様が言うなんて余程大切な人なのね。ライ様が目を覚ますまで保健室は自由に使っていていいからね？」

「ありがとうちよこ先生。」

「さて、ふああ…ちよつとちよこは眠いから眠るわ…」

ちよこ先生はそう言うのと保健室の空いているベッドに潜り込みすぐに寝てしまった。

私はちよこ先生が眠る姿を見て相変わらずだなど溜息をつくど、

「ううっ…」

眠っているライ君から呻き声のような声が発せられた。

「ライ君!? どうしたの!？」

私は椅子から立ち上がりライ君の様子を見た。

額から冷や汗が浮かんでいる…うなされているみたいだ…

「行かないでくれ…」

とても小さな声でライ君の口から言葉が漏れていた。

その言葉に続いてライ君の腕が何かを求めるかのように宙に伸びた。

「ライ君っ…」

私は安心をさせるためにライ君の手を両手で掴んだ…

ライ side

「()は…?」

僕は気付くと学園の廊下に立っていた。

(僕は確かラプラスという少女に拘束されていたはずだが…?)

覚えているのはラプラスという少女が僕に近づき、黄金の瞳で覗かれてから…ここからが思い出せない…

よく周りを見渡すと自分がいる位置が生徒室の近くの廊下であることに気が付いた。

とりあえずここにいっても何も始まらない。僕は生徒会室に赴くことにした。

生徒会室前に辿り着くと中から声が聞こえてきて、誰かがいるのが分かった。

僕はいつも通り生徒会室に入室した。

「でさあ…ん？」

僕が生徒会室に入ると会話が止まった。僕はいつもの皆がいると思いい顔をみ渡すと驚くべき光景が広がっていた。

確かにあやめ、ミオさん、トワ、天音さんの4人がいた。

しかし皆の髪色と瞳の色が黒だった。ミオさんはいつもの黒色のままであったが、ミオさんの特徴でもある大きな耳と尻尾、これらが無くなっていた…

あやめも角、トワの細長い尻尾、天音さんの天使の羽、それぞれ皆の特徴でもあった部分が無くなっていた、それが無いのが当たり前かのように…

「？えつと…君は？」

黒髪のアやめが僕に声をかけてきた。

「あやめ？何で髪色が黒に？それに皆も…」

「ん？君は私のこと知ってるの？」

「…え？」

「あやめちゃんー。あやめちゃん生徒会長なんだから、生徒があやめちゃんのこと知っててもおかしくないでしょ？」

「あつ、それもそっか！」

トワにそう言われたあやめは納得していた。

そして僕の方を向き直し会話を続けた。

「えつと、君は日本人…じゃないよね？あまり見たことがない見た目をしているから海外からの転入生かな？」

「でも海外からの転入生の話とかあったっけ？」

「確かに見たことがない綺麗な銀髪だねえ。瞳もウチらと違って碧いし…」

「でも日本語上手でしたね？僕英語苦手だから凄いなあ…」

皆が僕にそれぞれの感想を漏らしていた。

（皆僕に関する記憶がないのか…？）

そして僕はあることを思い出してきた。

以前の学校の人達の反応を…

僕に向けてくる奇異な物を見るような視線、僕はその視線がとても苦手だった。

「…すまない、迷惑をかけた。」

僕はそう言い生徒会室から駆け出した。

「あつ！ちよつと君!!」

あやめに声を掛けられたが、それを振り払い廊下を駆け抜けた。

学園の廊下を走っていると、教室の中にいる生徒、廊下を歩いている生徒の姿がいくつも見えた。

だがその姿はいつもの多種多様な姿の生徒ではなく、皆黒目黒髪の日本人の人間の姿になっていた。

その生徒たちからも僕の見た目の珍しさからか、僕に視線を向けていた。

僕はその視線に耐えられず目を瞑り、ある場所に向かって走り出した。

僕が目指したのは不知建の部室だった。

ここにいる皆はいつも通りの皆でいてくれていることを信じてやってきた。

（頼む…）

僕は部室の扉に立ち、心を落ち着かせて扉を開けた。

そこにいたのはみこ、ポルカ、ノエル、フレアで、やはり皆も他の生徒と同じように黒髪で普通の人間になっていた。

「おー入部希望者!？」

部室に入ってきた僕に声を掛けたのはフレアだった。

やはり彼女からも僕の記憶が消えているようで、入部希望者と勘違いしているようだった。

（やっぱりダメか…）

僕は皆の記憶が消えていることにショックを覚えたが、返事を返した。

「…ああ、ちよつと前から気になっていたんだ。」

「ほんと!？」

フレアは瞳を輝かせていた。いつもの綺麗な橙色ではないが黒色の瞳が輝いていた。

「おお、初めて見るイケメン君だね。」

「確かに…あつ！でも団長は勿論フレア一筋だかね！」

「はいはいありがとねー。」

「遂にノエたんといちちゃんに後輩ができるんだにえ。」

みこの言葉であることに気づいた。

「この部室にいるはずのすいせいがない…」

「部員はもう1人いるのかい?？」

「うん、今日は日直だから教室にいるはずだけど…えっ!？」

僕はみこの言葉を聞き、すいせいがいる教室に走って向かった。

（すいせい…）

自分でもよく分からないがとてもすいせいに会いたいという気持ちが生まれていた。

この学園で1番よく接してくれた彼女がいないという不安に駆られているのかもしれない…

そうしているうちにすいせいの3年生の教室の近くに着いた。

すると教室の後ろから1人の生徒が出てきた。その生徒はいつも通りの綺麗な水色の髪色のすいせいだった。

「すいせい!!」

思わず大きな声ですいせいに呼び掛けた。すいせいは僕の声でこちらに振り返ると、静かに微笑み歩き出して行った。

「いま、待ってくれー!」

僕はすいせいを追いかけるために走った。しかし、走っているはずなのにすいせいとの距離が全く埋まらない。そればかりかどんどん距離が空いてしまっている…

全速力で走っているが状況は何も変わらなかった。

すいせいを追うことに夢中で気がついていなかったが、周りの景色がどんどん黒く塗り潰されていく…

「行かないでくれ…!」

すいせいに手を伸ばしたが虚しくも届かない…

そして僕の目の前も黒く塗りつぶされていき、意識が闇に落ちた。

すいせい side

ライ君がうなされ始めてからしばらく経ったあと、呻き声が止まった。

私はその様子を見て安心し、一旦手を離した。

するとその途端ライ君は目を覚まし、飛び起きた。

「わあ!?!ライ君!?!」

「はあ…はあ…すい…せい…?」

いきなりライ君が飛び起きたことに私はびっくりしてしまった。

起きて私を見たライ君はいつもより落ち着きがないように見えた。まるでずつと探し求めていた物を見つけたかのような顔をして。

「大丈夫ライ君? 水でも買ってこよ…!?!」

起きたライ君の側に近づき、声を掛けたら予想していないことが起きた。

そう…

ライ君に抱き締められた…

「すいせいー…よかった…」

「ら、ライ君!?どうしたの!？」

いきなりライ君に抱き締められたことが衝撃的すぎて思考がストップしてしまった。

起きたばかりで混乱しているのだろうか…?

無理に引き剥がす訳にもいけなく、少し様子を見た。

するとライ君は落ち着いたのか私から離れ、顔が真っ青になっていた。

「す、すまないすいせい！僕はとんでもないことを…」

「あつ…ううん、大丈夫だよ？」

ライ君がとても申し訳なきように私に謝罪をしてきた。

別に私は嫌では…気にしていなかったので、謝罪を受け入れた。

(でも本当にドキドキしたあ…)

ライ side

(最悪だ…僕はすいせいに対して何ということ…)

僕は夢の中のすいせいを追い求めることに夢中になってしまい、現実のすいせいを抱き締めてしまった。

…いや、仮に夢の中だとしても何故抱きしめる必要があるんだ…

正直今の僕は起きたばかりということと、夢の中の出来事がショックな内容であったこともあり、頭が上手く機能していない。

(いつものようにすいせいと話すことができない…)

「すいせい…その…僕は…」

謝らないといけない、という気持ちがあるが、夢の中の皆のように僕に対する接し方が変わってしまったらどうしよう、という気持ちが生まれてしまい、うまく言葉に出来なくなってしまうている。

(僕はなんて情けないんだ…)

僕は何もできないままベッドの上で俯いてしまっていた。

そんな僕を見兼ねたのかすいせいは僕に近づき声を掛けてくれた。

「ねえライ君？今から屋上に行かない？」

「…え？」

「ちよつと空気吸いに行こうよ。ね？」

「…分かった。」

すいせいの提案に従い、僕とすいせいは保健室を後にし、学園の屋上に向かうことにした。

「うーん…やっぱり屋上は気持ちいい！」

すいせいは屋上で大きな伸びをしていた。

外は夕暮れで、周りの景色が夕日で照らされてとても綺麗だった。

屋上で吹く風は心地よく、少し僕の心を落ち着かせてくれた。

今ならちゃんと話せることができると思いついせいに話しかけた。

「すいせい、僕はラプラスに眠らされてから夢を見ていたんだ。」

「夢？」

僕は覚えている夢の内容をすいせいに伝えた。

「そっか…それはライ君にとってなかなかきつい夢だね…」

「多分それで僕はあるなことをしてしまったんだと思う…すいせい、本当にすまなかった。」

改めてすいせいに謝罪をした。

するとすいせいは僕の方へ振り返り声を掛けてきた。

「ライ君、1つだけ質問していい？」

「なんだい？」

「どうしてライ君は夢の中で私を追い求めたの？」

すいせいは真剣な顔で僕の顔を真っ直ぐ見つめてきた。

(何故すいせいを追い求めたのか…その答えは決まっている。)

「それは、すいせいがこの学園の中で一番大事な人だからだ。」

そう言い、僕もすいせいの目を真っ直ぐ見つめ返した。

「不知建の皆、生徒会の皆、クラスの皆、学園で僕によくしてくれる人達、この皆も勿論大事な人達だ。でもすいせいはこの学園に来てから過ぐす時間も長くて、君と過ぐす時間は刺激的で楽しくて、そして…何より契約者だからな。」

「…やっぱり覚えててくれたんだ…」

すいせいは真剣な顔から優しい笑顔を浮かべてくれた。

「私は抱きしめられたことは本当に気にしてないけど、ライ君は気になっっているようだったから改めて許します！」

「…ありがとう、すいせい。」

僕はすいせいの言葉で安心した。

何だか喉につつかえていたものが取れた感覚になった。

するとすいせいが僕に歩み寄って来た。

「…ライ君、1個だけお願いがあるんだけど聞いてくれる？」

「…僕にできることなら何でも言ってくれ。」

夕日が沈みかけてきており、沈む前の最後の光がすいせいに注がれ、すいせいを輝かせた。

「学園祭の日、私と一緒に回ってください!!」

…学園祭当日が楽しみだ…

試験

すいせいと学園祭を一緒に回ることを約束してから一週間。あれから再び学園祭の準備に追われていた。

生徒会での手伝い、クラスと不知建での出し物の準備、忙しい日々が続いていたが、僕は皆で協力して学園祭の準備をするのが楽しかった。皆も同じ気持ちだったようで、苦戦しながらも楽しそうに準備を進めていた。

学園祭も2週間後に迫ってきており、あらかたの準備は終わっているが、学園祭までに1つの大きな壁が待ち構えていた。それは…「来週から定期試験か…」

クラスメイトのスバルが机に顔を突っ伏しながら嘆いていた。

そう、学園祭の前に学生の本分である学業、定期試験が待ち構えていた。

しかも今回の試験は成績に大きく影響してくるようだ。

「今回のテストで出題教科の半分を赤点採ったやつは学園祭の期間補修だからしっかりと勉強しとけよー。」

と、担任の先生から大きな釘を刺された。

クラスメイトの何人かがその言葉を聞いた瞬間、顔面が蒼白になっていた。

今回の試験の範囲はすでに発表されているが、かなり範囲が広いものとなっていた。

その範囲の中にはかなり難しい単元が含まれている教科があり、苦戦することが予想される。

「ふむ、この学園での試験を受けるのは初めてだが、少し難しいかもな。」

「ライ君もそう思う？僕も今回はしっかりと勉強しなきゃ。」

隣に座っているおかゆも同じ気持ちだったようだ。

「ライとおかゆでも難しいならスバルはどうなっちゃうんだよ…」

前の席に座っているスバルが涙目でこちらに振り向いてきた。

「まあ確かに難しいが、前の勉強会の時みたいにしつかりと基礎が理解できれば問題ないと思うよ？それにスバルが良ければ今回も勉強会をやるうと思うが…」

「まじで!? 本当頼むよ!!」

「ライ君く、僕も参加していい?」

「勿論。おかゆにも参加してほしいと思っていたんだ。」

「ありがとう。今回も教室でやる?」

「一応その予定だ。2人の予定次第だけど、早速今日からやろうと思うんだが…」

「ライ君!!」

「ん?」

2人と勉強会の話を進めていると、教室のドアの方向から聞き覚えがある声に呼びかけられた。

声がする方に振り返ると、そこにはノエルがいた。

「ノエル?」

「ライ君やつほー。」

遅れてノエルの後ろからフレアが顔を覗かせた。

「フレアまで? あれ、今日って不知建での活動って何かあったか?」

僕の記憶が正しければ今日は不知建での活動は特にない予定のはず…

「あ、違う違う、今日は不知建での活動は関係ないの。」

「?じゃあ僕に何か別の用事が?」

「そうそう、特にノエちゃんがねー。」

そうフレアに言われてノエルの方に視線を向けると、ノエルが僕の方に歩み寄ってきた。

いつもの穏やかな優しい表情のノエルではなく、真剣な顔をした彼女がこちらに向かってくるのはなかなか迫力があつた。

「ライ君!」

「は、はい。」

ノエルの勢いに押され、つい敬語になってしまった。ノエルは何を言おうとしているのだろうか…

「団長に…勉強を教えてください…」

…生徒がもう1人増えた。

前回のようにおかゆとスバルの3人で勉強会を開く予定であったが、急遽ノエルとフレアも参加することになった。

不知建にいる間ノエルが成績が悪いという話を特に聞いたことがなかったが、出題範囲の中でどうしても分からないところがあるようで、このまま試験に臨むと赤点になってしまう可能性があるらしい。「もし赤点を取ってフレアと学園祭を回れなくなったら団長は死んじまう…」

そう呟いたノエルの目から光が失われており、相当深刻らしい…フレアと一緒に勉強をしていたようで、フレアから教えてもらいながら勉強を進めていたが2人では限界がきたようだ。

以前不知建の部室でノエルが課題をしているときに分からないところを教えてあげたことがあったが、その時の教え方がノエルには分かりやすかったようで、それで僕らの教室までやって来たそうだ。

「お願いだよライ君…団長を助けると思って力を貸してくれないかな…？」

ノエルは手を合わせてお願いをしてきた。

ノエルは不知建での活動中や、廊下ですれ違った時なども僕によく声を掛けてくれていて、とても良く接してくれている。僕にとって良き友人である彼女の力になってあげることができるのであれば断る理由はない。

「勿論だよノエル。せっかくの学園祭を回りたい人と回れないのはとても辛いと思うし…僕ができる範囲で良ければ力になるよ。」

「ライ君…ありがどうううう！」

ノエルは僕の手を両手で掴み感謝の言葉を伝えてきた。

「じゃあ早速この5人で始めようか。フレアとはおかゆは1人でも問題ないと思うからまずは各自で勉強を進めてみてほしい。スバルとノエルは僕が教えながら一緒に進めていこう。」

「はい。」

「ノエル…一緒に頑張ろうな！」

「はい！スバル先輩！（はあ…スバル先輩めちやくちやかわええ…）」

すいせい side

「うう…すいちゃんここ分かんないにえ…」

「またあ？どこ？」

私とみこちは放課後の教室で試験に向けて勉強をしている。

といつても、ほとんどはみこちが分からないところを教えてあげているだけなのだが…

「ここはこうやってドーンって解くんだよ。お分かり??」

「擬音でわかんねえよ！もうちよつと分かりやすく教えてほしいにえ…」

「そんなこと言ってもなあ…何で分かんないの？」

「キイイー…あーあ、すいちゃんがライ君みたいに教え方が上手かったらいいのに…」

「あつ、みこち。そういえばすいちゃん今お腹空いてたんだ、もう帰っていい？」

「嘘です！もう一回教えてください星街さん!!」

今回の試験赤点が多かったら学園祭に参加できないから私もしっかり勉強したいんだけどなあ…

でもみこちを放っておくわけにもいかない。

…もう少しみこちを弄って遊んでから本格的に始めよう。

ライside

「よし、皆一旦20分くらい休憩にしよう。」

「つ、疲れた：スバル、購買でお菓子買ってくる！」

「あつスバル先輩、団長も行きます〜。」

2人は教室を抜けて購買に向かった。

教室に残ったのは僕とおかゆ、フレアの3人となった。

「2人とも順調に進んでるかな？」

「うんー、ライ君の授業に耳を傾けながら問題に取り組んでいたからちゃんと解けてるよ〜。」

「私もー。やっぱりライ君教え方上手だねえ。」

「それはどうも。スバルとノエルもちゃんと着いてきてくれているから何とかかなりそうで安心してるよ。」

スバルは前回教えたことは家でも復習をしつかりしていたようで、ちゃんと覚えていたので特に教えることに苦労はしなかった。ノエルに関しても基礎はしっかりできていたので、応用の考え方を教えてあげるだけだったので、この調子でいけば2人とも問題はなさそうであつた。

僕もちょうどひと息つくこうと思い、自動販売機で飲み物を購入しようとした。

すると、そのタイミングでフレアに呼びかけられた。

「ねえライ君、勉強と関係ないことだけどーつ聞いてもいい？」

「ん？なんだい？」

「学園祭の期間中にさ、誰かと一緒に回る予定とかある？」

「ああ、すいせいと一緒に回る約束をしたよ。」

「ええ!!ライ君本当!？」

おかゆが机から飛び上がり、驚いていた。

「…そっかあ。」

フレアは微笑んでいた。何故微笑んでいるのかは分からないが、す

ごく優しい表情だ。

「僕、すっごくびっくりしちゃった…ライ君、僕応援してるからね！」
「？ありがとう…？」

すいせいと学園祭を回るだけだがおかゆから応援された。

「じゃあライ君、すいちゃんをしつかりエスコートしないとねー。」

「そうか…僕にできるだろうか…？」

「すいちゃんならライ君と一緒にだったらどこでも楽しんでくれそうだけれどね。すいちゃんは割とその場のノリで楽しむタイプだし。」

「でも計画してあげたらあげたで喜びそうだけれどね。」

「あー、確かにそれは分かるかも。」

おかゆとフレアはそれぞれの話で盛り上がっていた。

事前にすいせいに何処を回りたいか聞いておいた方がいいのかもしれないな…

そんなことを考えていたらスバルとノエルが教室に帰ってきた。

2人の両手を見ると大量のお菓子が抱えられていた。

「皆ー、一緒に食べながら休憩しよー。」

「購買のおばちゃんに試験勉強で残ってるって伝えたらいっぱいサービスしてもらっちゃったよ。」

「わーい、スバルちゃんノエルちゃんありがとう。」

「ライ君も一緒に選ば？」

「…ああ。」

少し疲労が出てきていたが、もうひと踏ん張り頑張ってみよう。

辺りが暗くなる前に勉強会が終わり、全員で教室を後にして学園内の廊下を歩いていた。

歩きながらスバルとノエルの2人から感謝の言葉を告げられた。

「ライ…今回もありがとな…家帰ってから頑張ってみるよ。」

「団長もだよ、ライ君のおかげで何とかかなりそうだよ。」

「お役に立てて何よりだ。それに2人ともほとんど理解できていたから、あと数日くらいで完璧にできると思うよ。」

するとおかゆから皆にある提案をした。

「ねえねえ、1つ提案なんだけど試験までの期間皆で勉強会するのはどうかな？ そうすればスバルちゃん達も安心だろうし。実は僕もライ君に質問したいところが出てきたから、勉強会をやってももらいたいんだよねえ。」

「あつ、それいいかも。実は私も分かんないところ出てきてさー。」

「いいんじゃないか？ 僕も教えながら振り返ることができるし…スバル達もいいかい？」

「はい！先生!!」

2人の返事が何だかおかしくて僕は笑ってしまった。

「おつ、ライが笑うの珍しいな。」

「確かに。」

「…僕ってそんなに笑っていないか？」

「うーん、いつもは真顔になっているのが多いかも？」

「でもたまに出る表情にギャップを感じるね。」

自分では表情を出しているつもりだったが、まだ乏しいらしい。自室に戻ったら笑顔の練習でもしようかな…

そんなことを話していると、上の階段から2人の生徒が降りてきた。

「やつと終わったにえ…」

「みこち家に帰ったらちゃんと復習してよ？」

みこちとすいせいだった。2人もまだ学校に残っていたらしい。

「あれ？みこちとすいちゃん？」

「ん？あつ！部長とノエたん！ライ君も！」

「スバルちゃんとおかゆちゃんもいるじゃない！」

2人は僕らに気づき階段を早足で降りてきた。

「やつほー、すいちゃんみこち。」

「2人も試験勉強してたのか？」

「そうそう、みこちに勉強教えててさー。」

「うう、部長…みこの頭を撫でて慰めてほしいにえ…」

「はいはい、よく頑張ったねー。」

「そっちは大人数だねー。」

「うん、団長とスバル先輩がライ君に教えてもらうために勉強会を開いてもらったの。」

「ええ！みこもそっちに参加したかったにえ！ライ君教えて!!」

「構わないが…今僕らが勉強しているのは2年生の内容だよ？」

「…実は2年生で習った内容の応用が出題範囲の中にあるんだにえ…」

なるほど、確かに2年生の内容でも、1年生で習った内容を使うことがあるので、みこが参加したがる理由に納得できた。

「じゃあ後で出題範囲を携帯に送ってくれないか？それを見て問題を考えておくよ。」

「ライ君…恩に着るにえ!!」

「えー、じゃあすいちゃんも明日から参加する〜。」

「勿論。すいせいも大歓迎だ。」

「えへへ、ライ君ありがと。」

すいせいと話をしているとすいせいの後ろからゆっくりおかゆとフレアが近づいていた。

すると2人はすいせいの腕を両側から掴み、2人に捕まった。

「すーいちゃん!」

「わあ!?な、何?」

「ちよーつと1分だけ話そっか?」

そういうと2人はすいせいの腕を掴んだまま帰り道の逆方向に歩き出し、すいせいは引きずられるような形で連れていかれた。

「皆は先に学園の門まで行ってー。」

「僕らもすぐ追いつくからさ〜。」

「えっ!何されるの私!?だ、誰か助けてー!」

すいせいの叫びもむなしく、3人の姿はすぐに見えなくなってしまった。

「…とりあえず僕はこのままクラブハウスに帰るから、皆また明日。」

「うん！ライ君バイバイ！」

「フレアたちにも伝えておくよ。」

今日のところはここで皆と別れ、帰路につくことにした。

明日からもまた大人数での勉強会になるだろう。

(皆のためにクッキーとか焼いて持っていこうかな…)

そう思いついた僕は早足になり、急いで明日の準備に取り掛かることにした。

皆で学園祭をしっかりと楽しむように…

四つ葉

「よし、そこまで！後ろの席から答案用紙を前に回してくれ。」

先生の試験終了の合図の声が教室内に響き渡った。

今日は定期試験最終日。この試験期間中、勉強会に参加していた皆と頑張つて勉強をした甲斐もあり、僕は試験の解答に困ることはなかった。

「終わったああああ!!」

スバルが机に突っ伏しながら声を上げた。

僕は今回の首尾はどうだったかスバルに聞いてみた。

「どうだったスバル？」

「ライ：今回はスバル史上一番勉強したから手ごたえはあったよ…でも疲れたあ…」

スバルは満足気な顔をしていた。

スバルが今回の勉強会で一番頑張っていたと僕は思っている。学校での勉強会が終わった後も僕に連絡を入れて熱心に質問をしていたからだ。

「お疲れ様、後は結果を待とう。」

「2人ともお疲れ様。」

スバルと話していると手をヒラヒラと振りながらおかゆが話しかけてきた。

おかゆは勉強会の中でも自分でしつかりと取り組んでいて時折僕に確認の質問をしていただけだったので特に心配はしていない。

「おかゆもお疲れ様。その様子なら問題はなかったみたいだね？」

「うん。勉強会でライ君に質問したところもバッチリ解けたから大丈夫だと思うよ。」

とりあえずクラスメイトの2人は問題なさそうでよかった。

(残る心配は勉強会に参加していたノエルとみこだけだが…)

そんなことを考えていると廊下を走る2つの大きな足音が近づいてきた。

すると足音が教室の前で止まり教室のドアが勢いよく開かれた。

「ライ君!!」

声がある方に振り返ると、たった今頭に思い浮かべていたノエルとみこがいた。

2人は走って疲れたのか息を整えていたが、2人とも笑顔で僕に向けてサムズアップをしていた。

その姿を見て上手くいったことを察した僕は同じく笑顔でサムズアップで返した。

試験が終わって数日が経過した。

それぞれの試験の答案用紙の返却が始まり、教室では生徒の阿鼻叫喚の声で溢れていた。

そして先生からスバルが名前を呼ばれスバルの番が回ってきた。

スバルが答案を先生から受け取る前は緊張しているように見えたが、受け取って点数を確認した瞬間スバルはその場で飛び跳ねていた。

「ライ！おかゆ！見てよこれ！」

スバルは僕とおかゆの元に自身の答案用紙を持ってきた。

点数を見ると全ての教科で赤点を回避し、平均点数は80点を超えていた。

「おお！すごいねスバルちゃん。」

「スバルは今回の試験勉強凄い頑張ってたからね。これくらいの点数は採れると思っていたよ。」

「スバルこんな点数採れたの初めてだよ…ライもおかゆも勉強会で助けてくれてあんがと!!」

はしゃいでいるスバルを見て僕とおかゆは微笑んだ。

友人の努力の結果が実って僕たちも嬉しい。

「そういえば2人は点数どうだった？」

「ん？ああ。」

「僕たちはこんな感じだよー。」

僕とおかゆはスバルに結果を見せた。

猫又おかゆ 平均90点

皇ライ 平均95点

「…お前ら化け物やん…」

何故かスバルに引かれてしまった。

学校が終わったその日の夜、僕は自室のPCの起動準備を行なっていた。

このPCはトワにお願いをして選んでもらい、購入していたものだ。

何故僕がPCを起動しているのかというと、夕方頃にあくあから連絡が入り、このようなメッセージが届いていたからだ。

『今宵20時、戦場に集結。』

このメッセージは以前あくあとすいせい、トワ、そして僕の4人でゲームで遊ぼうと約束をした時に作成されたチャットグループにあくあから送られていた。

僕はこの文章の意味が理解できておらず、個人でトワにチャットで確認をしたところあくあが言う戦場というのはゲームのことを指すらしい。

ついでにトワから今回遊ぶゲームについても事前にPCを購入した日にインストールをしてもらい、一緒にプレイをしていた。

ゲーム内容は4人1組のチームで戦うバトルロワイヤル形式となっており、20組のチームによる総勢80名が1つの広大なフィールドで戦い、フィールドの建物内などにある武器である銃や物資を拾

い集め、それらを使い1組の勝者を決めるのが基本ルールになっている。操作をするキャラクターの種類は豊富で、それぞれのキャラクターに特徴や能力がある。チームを組む際にもキャラクター同士のバランスと仲間内での連携も重要になってくる。

既に3人は僕を待っている状態で、準備も整ったので3人が会話をしている通話アプリのグループ通話に入った。

「すまない、待たせたね皆。」

「あつ！ライ先輩こんばんは！」

「ライ君遅いよー。」

「や、やつほーライ君…」

トワ、すいせい、そしてあくあからそれぞれ声を掛けられた。

基本的に学園内か租界で会って話すことがほとんどだったので、こういったアプリを通しての会話は何だか新鮮な感じがした。

3人はこのゲームでよく一緒に遊んでいるようで、Starten dというチームを組んで大会にも出たことがあるらしい。その中でもあくあは特に大会内でも高成績を収めたこともあるようだ。

以前のゲームセンターでのあくあの動きを見ていた僕は納得できしたが、まさかこんな可愛らしい女の子が戦場を駆け回り、敵を撃ち倒す姿があるとは普段のあくあの様子しか知らない人からすればさぞ驚かれるだろう…

「さて、ライ君も来たことだし早速始める？」

「そだねー、ライ先輩も大丈夫ですか？」

「ああ、皆の足を引っ張らないように頑張るよ。」

「ら、ライ君…あ、あていしが守ってあげるから！」

「ありがとうあくあ、頼りにしてるよ。」

「エへへ…」

ゲームが開始され、僕たちはフィールドで物資を拾い集めていた。僕はトワと一緒にプレイした時にも使用していたスナイパーライフルを今回もメイン武器にすることにした。

狙うのにコツがいるが、上手く当たれば一撃で敵を倒すことができるので僕は気に入っている。

ある程度物資が揃ったので皆で場所を移動しようとしたその時、

「…銃声!!」

トワがいち早く銃声に気付いた。音からするにここからそう遠くはない。

「よし、せっかくだしあいっら倒して物資奪おうよ!」

すいせいからの提案に皆が賛同した。

ここで上手く倒すことが出来れば敵の数を減らせるだけではなく、まとまった物資も獲得ができて一石二鳥だ。

僕達は銃声が鳴った方角に向かい、索敵を開始した。

現在は銃声がしないが、此処に向かうまでに銃声が鳴っていたので、恐らく別チーム同士が戦闘を行い、決着が着いた状態なのだろう。

索敵を開始して数分、敵を最初に発見したのは僕だった。

「皆、敵を確認した。南のビルの屋上に4人いる。」

「ライ君ナイス!」

「ほんとだ、見た感じ物資を漁っているみたいだから周りには全然警戒してないね。」

「あていしがスキルを使えば皆と一緒に屋上までワープできるけど、フルパだから勝ち切れるかちよつと怪しいかも…」

あくあが使用しているキャラクターのスキルは空間移動能力を所持しており、入口出口のワープホールを作成し、空間移動を可能にするスキルだ。

相手の裏をかくことができるので強力なスキルではあるが、デメリットとして連続での使用はできないため、使うなら絶好のタイミングでないとは効果は薄い。

そうなつてくるとまずは基点作りが必要だ。幸い相手はこちらに気づいていない。このアドバンテージを有効に使うためには…

「ライ先輩…」

「トワ、多分僕も同じことを考えていたよ。」

「??？」

すいせいとあくあは何のことだか分かっていないようだった。無理もない、これは以前一緒にプレイしたトワしか知らないことだ。

「ライ先輩に狙撃であいつらを抜いてもらおうと思つて…前一緒にした時も先輩はSR（スナイパーライフル）使つてただけど、全弾相手に当てることできてたからさ。」

「全弾!?マジで!？」

「…や、やつばあていしが見込んだだけはあるね!」

基本初心者の場合は連射ができて使いやすいSMG（サブマシンガン）やAR（アサルトライフル）を使うのがセオリーだ。

確かに僕も最初はARをメインに使おうと思つていたが、SRのヒット率が異常に高く、トワからも驚かれた程だった。

「ならライ君に狙撃がしやすい向かいのビルに移動して狙撃で抜いてもらつて、あていし達が抜いた敵以外を倒せばいけるね。」

「それでいこつか。あいつらのビルの下に移動するね。」

あくあの提案にすいせいが賛同したが僕は正直不安な部分がある。

「…僕に任せて大丈夫か? 前は上手くいったが今回も上手くいくとは…」

「え? だつてライ君ならやつてくれるでしょ?」

すいせいは首を傾げながら当たり前かのように言った。

あくあとトワは笑顔で僕を見ている。皆に信頼してもらつているということ嬉し。皆からの信頼を裏切るわけにはいかないな…

「わかったよ。屋上の敵の牽制は僕に任せてくれ。」

僕は3人にそう告げると敵の向かいのビルに移動を始めた。

(よし…まだいるな…)

移動が終わり、まだ敵がビルの屋上にいることが確認できた僕はSRを構えてスコープを覗き込んだ。

4人の内、屋上の入り口から遠い敵に狙いを定め引き金を引いた。撃ち出された弾丸は狙い通りの敵に命中し、その敵は倒れた。

残りの敵が味方が倒されたことで襲撃に気づき、すぐさま屋上の入り口を目指し走り出した。

僕はリロードをし、再度SRを構えた。残りの敵の内の2人は建物内に入ったが、1人が入り口から遠かったこともあり、まだ入り口に向かつて走っているのを視認できる状態であった。

(逃がさない…)

僕は建物内に逃げようとした最後の敵を逃がすまいと狙いを定め引き金を引いた。

逃げ遅れた敵にも弾丸が命中し、敵は倒れた。

「皆、屋上で2人を倒した。今ならいけるよ。」

「さつすがライ先輩！あくたん、すいちゃん！トワは下から迎え撃つから屋上から攻め込んで！」

「OK！あくたんお願い!!」

「うん！」

あくあとすいせいがあくあのスキルでビルの屋上まで一瞬で移動をしているのが見えて、そのまま2人は建物内に逃げ込んだ敵を追っていた。

トワも下から向かっているので挟み撃ちができ、人数も3vs2のためこちらが圧倒的に有利だ。

数分後、銃声が聞こえたが一瞬で収まった。

「ライ君終わったよー。」

あくあ達から戦闘終了の連絡が入った。

流星はと言うべきか仕事が早い。

彼女達からチーム連携が上手くいったことへの喜びの声が聞こえてきて、僕も嬉しくなった。

「よし、この調子で最後まで敵を倒しまくろうー！」

「おおーっ！」

あの後も数チームと戦闘があつたが、僕達のチームの連携が上手くいき、特に苦戦もすることなく僕達は最後まで生き残つて、チームの初陣は勝利で収めた形となつた。

最後に今回の招集者のあくあから皆への労いの言葉が送られた。

「皆今日はありがとう、久しぶりにすつごく楽しかったよ！」

「あくたーん!! 今日もかつこよかつたよおー!!」

「ウ、ウン…」

「トワも楽しかったー! チーム連携めちゃくちゃ良かったし、全然負ける気しなかつたし！」

「僕も楽しかった。あくあ、今日は誘つてくれてありがとう。」

今日は本当に楽しかった。今までテレビゲームなどをしてこなかつた僕からするととても刺激的で、皆と喜び合えたのも楽しかつた。

「ねえねえ皆、トワから提案があるんだけどさ…」

「ん? なになににトワちゃん?」

「この4人で新しいチーム作ろうよ! 絶対この4人なら大会とか出てもいい線いけると思うんだ!」

「!!」

「チーム? 以前3人で組んでたチームみたいなものかい?」

「そうです! ライ先輩本当に初めてとは思えないくらい上手いし! 状況判断とかも的確だしオーダーとかに向いてますよ!」

「確かに今までトワがメインでオーダー出してたからライ君が加わるともっと動き良くなりそうだね! 正直このチームなら負ける気しないもん!」

皆が新しいチームの結成に盛り上がりを見せていた。

この3人はとても仲が良い、それでいて雰囲気も優しく感じられた。そんなチームの輪に加えてもらえるのはとても光栄だ。

「僕でよければ是非。もっと皆と遊んでみたいしね。」

「決まり！最強チームの結成だね!!」

「あ、でも…」

「ん？どしたのトワ？」

「チーム名どうする？前はS t a r t e n dにしてたけどそのままにする？」

「うーん、ライ君が新しくチームに入ったから折角だし変えたいかも…」

「どうするあくたん？」

「あていし!?!えーつとえつと…あつ！そうだ！」

あくあは慌てふためいていたが、何か思いついたように明るい表情を見せた。

「ここは一番新人のライ君に決めてもらおうよ！」

「えっ、僕が考えるのか？」

「このチームでは先輩の言うことは絶対だからねえ…期待しているよ新人君。」

…何だかあくあが出会った最初の頃に比べると遠慮がなくなってきたという気がする…

スバル曰く、あくあは仲良くなった人には積極的に絡んでくれると言っていたので仲が良くなったことを喜ぶべきなのだろうが…

「いやー楽しみだねえ。」

「ライ先輩のセンスに期待しちゃうなあ。」

すいせいとトワもあくあに便乗してきた。

これでは下手な名前は付けられないな…

「うーん…」

僕は目を閉じて考え始めた。

(4人のチーム…4…4の数字が象徴なワード…あつ…)

僕は頭の中を駆け巡らせた結果、ある植物の名前が思い浮かんだ。

「クアドリフォリオ…省略してQ4なんていうのはどうだろう？イタリア語で四葉のクローバーって意味なんだが…」

「Q4…いいね！」

「四葉のクローバーか…4人チームにぴったりだし、お洒落っぽくていいじゃん！」

「やっぱライ先輩センスえぐいわあ…」

3人の反応を聴く限り、3人とも好感触のようで安心した。

「えー、ではStartend改めQ4！このチームでこれから頑張っているうー！」

「おーっ!!」「おー」

時刻を見ると日付が変わる前の時間になっていた。あくあの音頭を皮切りに今夜は解散することになった。

「それじゃああていし明日早いからもう寝るね！皆おやすみく。」

「トワもお風呂入ってからそろそろ寝なきや。またねく。」

「ああ、おやすみ。」

そしてあくあとトワは通話グループから抜けていった。僕もアプリを閉じようとしたがまだグループにすいせいがいることに気づいた。

「すいせい？まだ寝ないのかい？」

「あはは、実は夕方ちよつと寝ちゃってたからまだ眠くないんだよねー。」

なるほど、確かに昼寝をすると夜はなかなか寝付けないということはある。

(そういえばテスト期間中の間すいせいとあまり話せていなかったな…)

勉強会と一緒に参加はしていたが、お互いが忙しかったためいつもの会話ができていなかった気がする。

すいせいはまだ眠くないということだったのである提案をした。

「すいせい、まだ眠くないならこのまま少し話さないか？」

「!!うん！話そ話そ!!」

すいせいから了承の返事が返ってきた。

僕とすいせいは眠りにつくまでの間しばらく話した…

学園祭

「皆々、生徒会長の余だよー！今から学園祭の開始を宣言する余!!」
今日は学園祭当日。生徒会長であるあやめから学園の生徒全員に向けて放送が行われた。

すでに生徒の皆は準備が完了しており、学園の門には学園外から学園祭を楽しむためにやって来た方達の長蛇の列ができています。

いま放送をしている放送室には生徒会メンバーが全員集結している。

もちろん僕もいるが、ただ僕は今すぐこの場から逃げ出したい…
「宣言は新しい生徒会メンバーの皇ライ君から行われる余！」

あやめがそう言うと言っていたマイクを僕に向けて渡してきた。

「…あやめ、本当にやらないとダメかい？」

「もちろん！会長命令だ余！」

あやめは笑顔で僕の最後の望みを否定した。

誰かに助けを求めようとしたが、他のメンバーはあやめと同様僕に笑顔を向けるだけであった。

「さあライ先輩早く早く！」

「ウチ、楽しみだなあ。」

「ライ先輩、生徒の皆が待ってますよ？」

トワとミオさん、天音さんの様子を見て僕は逃げられないことを察した。

僕は今から行うことに対して思い切り深呼吸をし、覚悟決めてあやめからマイクを受け取った。

「…に、にゃああああ!!」

僕の合図と共に花火が打ちあがり、学園全域に学園祭のスタートが伝えられた。

この合図は決して僕が考えたのではなく、あやめが考案したものだ。

僕の合図を聞いていた生徒会のメンバーは皆お腹を抱えて笑って

いた。

(…消えてしまいたい…)

「「「あっはっはっはっは!!」「」」」

不知建の部室に笑い声が響いていた。

笑い声の原因は先程の学園全域に放送されていた生徒会メンバー兼不知火建設メンバーである皇ライの合図にであった。

「ら、ライ君のあんな声初めて聴いたにえw」

「ちよ、ちよと待って、お、お腹痛い：w」

「ライ君が放送を聞かないでほしい、って言ってた理由ってこれのことだったんだw」

「これは確かに聞かれたくないかもね：ん？ポルカ何しちよるん？」

「ん？ライ先輩の今の合図録音したからその音声チェック。」

「ポルカナイス!!」

「あ、その音声私に送ってー。」

「みこにもみこにも!!」

「へっへっへ：毎度ありい！」

「ライ君お疲れ様。さっきの放送可愛かったよ。」

「：おかゆ：できればそのことには触れないでくれ：」

「えー？どうして？」

「おかゆ：ライの気持ちを考えてやれって：」

僕は放送が終わった後すぐ教室に向かった。

向かう途中の生徒からの目が恥ずかしすぎてどうにかなってしま
いそうだった。

しかし今日は折角の学園祭、落ち込んだままでは周りの空気も悪く
なってしまうかもしれない。

僕は気持ちを切り替えてクラスの出し物の準備に取り掛かった。
学園祭は3日間に渡って行われて、僕は初日はクラスの出し物、2
日目は不知建の出し物、最終日は自由行動という予定になっている。

僕は生徒会メンバーなので学園の見回りを学園祭の期間中に行わ
なければいけないが、あやめからは学園で迷っている人や困っている
人がいれば助けてあげる、それだけをしてもらえばいいと言われた。

僕はこの学園の学園祭に参加するのが初めてだったので、あやめは
僕に学園祭を楽しめるよう考慮してくれたんだと思う。

あやめに感謝しながら僕は準備に必要な着替えを始めた。僕たち
のクラスの出し物というのは…

「よし、2-Bホストクラブ開店準備だよ〜！」

そう、ホストクラブである。

学園祭準備期間中。

「ライ君、僕たちのクラスの出し物はホストクラブに決まったわけな
らだけどき。」

「ああ、去年はおかゆとスバルがメインになって回っていたって聞い
ていたが。」

「そうそう〜。でも今年はクラスの皆の投票で僕とライ君がメインで
回すことになったからライ君にホストの極意を教えてあげるよ。」

「僕はあまりそういうのに疎いんだが…ホストは何をするんだ？」

「簡単に言えばお客さんを喜ばせてあげることかな？お客さんが望ん
でいること、夢を与えるのがホストの仕事なんだ。」

「夢を与える…ホストとは大変な仕事なんだな…」

「うーん、確かにお客さんによつては大変だったりするけど、基本的に
はお客さんと楽しくお話をするだけだから楽しいよ？お客さんが楽

しんでくれたら飲み物の注文もたくさんしてくれるし。」

「おかゆ：お前去年あんだだけ大変だったのに楽しかったのかよ…」

「うん！スバルちゃんも助けてくれたからねー、今回もよろしくね。」

「まあスバルは今回どちらかというと裏方側だからなるべく助けには入るけどさ。」

スバルはやれやれと肩をすくめていた。

おかゆは楽しく話をするだけでいいと言ったが中々難しいような気がする。

「お客さんを楽しませてあげるにはどんなことをしてあげればいいのかな？」

「基本的にこんな店に来る人は普段寂しい思いをしている人が多いからね。他愛もない話をしたり、褒めてあげると喜んでくれると思うよ？」

おかゆからホストの極意を学んでいると、おかゆが何かを思い出したかのような反応を見せた。

「あつ、そうそう。ライ君のホストをするの時の名前も決めなきゃね。」

「名前？ライじゃだめなのか？」

「ライ君、さつきも言ったようにホストは夢を与える仕事なんだよ？現実と同じままの名前だと夢の世界に浸ることができないんだよ。」

「な、なるほど…」

確かに一理ある。なんだか今日のおかゆはいつも以上に気合が入っている気がするな…

「というわけでホストになる時の名前を考えます。ちなみに僕はおか斗って名前だよ。」

「名前か：じゃあ僕もおか斗にちなんでライトなんていうのはどうかな？」

「おー、かっこよくていいじゃん。決まりだね。」

「ホストでライトか：人気者っぽいけど、何かすんごいやっかいような客を抱えてそんな名前だな…」

：スバルが不穏な内容をボソツと呟いていたが敢えて僕は気にし

ないようにした…

「あとは口調を変えてみよっか？ライ君いつも1人称は僕だけど俺に変えてみたりとか。」

「口調…お、俺か…難しいな…」

「うわあ…ライが俺って言うてんの違和感しかねえわ…」

「確かに物心つく前からずっと僕だったからね。でも1人称を変えるのは不思議だけどなんか楽しいな。」

「でしよでしよー？僕もおか斗の時は俺って言うてるけど違う自分になりきるみたいで楽しいよー？」

「違う自分になりきるか…」

自分を別の何かになりきるなど考えたこともなかった。

おかゆの感性は人とは違う部分があるが、僕にとつて新たな方向から物事を見ることができるようになった気がするので彼女の話聞くのはとてもためになるし、なにより楽しい。

「…やっぱりおかゆは凄いな…よく僕が考えもしないことを思いつくな…」

「えへへ…もつと褒めてもいいんだよー？」

「いやいやライ、そう考えないのが普通だから。」

おかゆが嬉しそうにしている中スバルがツツコミを入れてきた。

おかゆは気にしないまま僕に頭を差し出してきたのでその頭を僕は撫でた。以前彼女の家に遊びに行ったときに頭を撫でてから時折頭を撫でることをおかゆに求められている。

彼女の頭は猫以上に触り心地がいいので役得だと思いつつ頭を撫でることにしている。

「ふわあ…至福の時に…」

「お前ほんとにライに頭撫でられるの好きだよな？」

「うんー、力加減が絶妙で気持ちいいんだー。」

僕はおかゆの頭を撫でながら話を進めることにした。

「そういうえば衣装とかどうすればいいんだ？」

「ああ、衣装はスーツなんだけど、演劇部から借りてくるからそれ着てもらえばいいよ。メイクもちよつとするけどクラスメイトに得意な

子がいるからやってくれるしスバルからも頼んでおくよ。」

「ありがとうスバル。じゃあ僕はホストの話し方の練習でもするかな…」

「ライ…この学園まじでやっかいな客多いから気をつけろよ…?」

「…肝に銘じておくよ。」

その後少しの不安を抱えながら僕はおかゆとホストの練習に励んだ…

そして今日が学園祭本番当日。

「ライト、準備はいいか?」

「ああ、おか斗。今日はお客さんを全力で楽しませてあげよう。」

黒いスーツを着たおか斗。それに対をなすように白スーツを纏った僕…いや俺。

「…さあ!開店だ!!」

学園祭2

俺とおか斗の合図でお店が開店した。

お客様はスバルやクラスメイトによって順番に通されるようになっており、耳に付けているインカムでやり取りをしている。

『じゃあ2人ともお客さん通していくぞ?…って、おわあ!?』

「スバル?」

やり取りをしていたスバルから悲鳴のような声が聞こえてきた。何かトラブルでもあったのだろうか?

そんなことを考えていると、ドアが勢いよく開かれた。

「おか斗くうーん!ラミイが来たよー!!」

恐らくスバルの悲鳴の原因であろう女の子が俺達の前に現れた。

その子はライトブルーの長髪のエルフで、以前図書館で僕の隣の席に座っていた子だった。

「やあラミイ、今年もよく来てくれたね。」

「もおーう、違うでしょ?俺だけのラミイでしょ?」

「あはは、ごめんごめん。俺だけのラミイ。」

「そうそう♪…ん?あなたは…」

ラミイと呼ばれた少女は俺の存在に気づいた。

「初めましてお嬢様、俺はライトといいます。よければお嬢様の名前を教えてくださいませんか?」

「やだあ!ちよーイケメン君じゃーん!ラミイは雪花ラミイっていうのー!ライト君はライトだけのラミイって呼んでね?」

図書館で初めて会った時とは比べもつかないテンションの差に内心驚いてしまったが、何とか名前を聞き出すことに成功した。

僕は早速おか斗から学んだことを実践することにした。

「素敵なお名前ですね、そして何よりお綺麗だ。」

「ほんとにいく?ちよーうれしいー!」

「ライトは今日初めて働く新人なんだよ。優しくしてあげてね?ラミイだけのラミイ」お、俺だけのラミイ…」

「もつちろーん！ラミイが優しくしてあげちゃうー！」

「ありがとうございます、とても嬉しいです。」

「なんか敬語だと他人行儀みたいな感じがして嫌だなあ…まあでも紳士っぽい感じも悪くないから特別に許しちゃうー！」

「ご機嫌を損ねなくてよかったです。」

ラミイを席まで案内し、3人で席についた。

ラミイはどうやら俺に興味を持ったようでも質問をしてきた。

「ライト君は去年いなかったでしょ？どこから来たの??」

「俺はここに来る前はキョウトにいたんです。」

「キョウト…やっぱり…」

「??」

ラミイは俺が以前キョウトにいたことを教えると何か考え事をしているようだった。

何を考えているのか首を傾げるとラミイはハッと我に返ったようでも話を続けた。

「キョウトはやっぱり美人が多いもんね！ライト君もちよーかつこいいし、お肌も綺麗だよねー！」

「ありがとうございます、ライトだけのラミイもお嬢様、という言葉にぴったりなくらいお綺麗です。」

「いやだもーう！褒めても注文しかないよー！」

ラミイは自分の頬を両手で抑えて、嬉しそうにしていた。図書館ので見かけた時にも感じていたが本当にどこかの令嬢と思えるように彼女はとても綺麗だった。

「ねえ俺だけのラミイ？俺のことはほったらかしなの？」

そう言いながらラミイの隣の席に腰を下ろしたおか斗が、ラミイの肩に腕を回し詰め寄った。

「ライトを可愛がってほしいって頼んだけど、俺も相手してくれなきや寂しいよ？」

「おか斗くんごめーん！お詫びに飲み物注文するから許してー！」

「ほんとに？じゃあライトのデビュー記念にシャンパン（ノンアルコール）頼んでもいい？」

「もっしろん！もう好きなの頼んじやって!!」

「ありがとう、俺だけのラミイだーいすき。」

「お、おか斗君もう一回言って?」

「俺だけのラミイだいだーいすき。」

「ああん！ラミイもしゆきしゆき〜!」

流石はおか斗。あつという間にラミイの好感度を上げてしまった。

（俺も何かしないと…あつ、そうだ、おか斗に教えてもらったあの技が…）

（いいライ君？ホストに来る女の子は基本的にイケメンが好きなんだ。ライ君お顔がすっごいかっこいいから微笑んであげると女の子からの黄色い悲鳴が鳴りやまないはずだよ!!）

おか斗からもらったアドバイスを思い出し、隣に座っているラミイに向けて微笑みを浮かべてみた。

「じゃあライト君にも何か言ってもらお…っ!？」

僕の方に目を向けたラミイが驚いた顔のまま固まってしまった。

それからしばらくして我に返ったのか俺の方に身体を寄せてきた。お互いが向き合う形となり、ラミイが俺の顔に両手を伸ばし、両手で俺の顔を包んだ。

ラミイの手はひんやりとしていて少し驚いたが、彼女は僕を真つすぐ見つめてきている。

彼女の目は何かを確かめようとしているような、真剣な目をしている。

（彼女の目…どこかで見たような…?）

ラミイと出会った図書館ではなく、それ以前に見かけたようなそんな感覚に襲われた。

そんなことを考えていると教室の扉が開かれた。

「どもー、ここにラミちゃん来てません?」

扉から現れたのは長身の女性だった。ツーサイドアップに髪をまとめてあり、髪色は俺と似ている灰色、頭部にあるフワフワの耳はまるで獅子を連想させた。

さっきの言葉から察するに彼女はラミイを探していたようだ。

「あーっ！ししろーん!!」

探されていた張本人は俺の顔をパツと離し、勢いよく立ち上がってししろんと呼んだ彼女のもとに走り出した。

ししろん…どこかで聞いた覚えがある言葉のような…？

「もう、ラミちゃん待ち合わせ時間過ぎちゃってるよ？」

「ごめーん！ついつい夢中になっちゃって時間に気づかなかったのさ。」

「そんなことだろうとは思ったけどねー、あたしお腹空いたから一緒に屋台回ろうよ。」

「うんうん！じゃあ早速行こう！あつ、おか斗君ライト君、2人ともありがとうね。シャンパンの代金受付に払っておくから！」

「わーい、俺だけのラミイありがとう。」

「ありがとうございます。」

お礼を言うとラミイは急いで受付まで走って向かった。

「あつ、もしかして皇先輩ですか？」

ししろんと呼ばれていた女性は僕を見ながら質問をしてきた。彼女は俺…僕を何故知っているのだろうか？

「そうだけど、君は？」

「あたしは獅白ぼたんっていいいます。おまるんから良く先輩の話聞かせてもらってます。」

「ポルカから？…あつ、もしかしてポルカが言っていたゲームが上手なししろんっていうのは…」

「あはは、それは多分あたしのことですね。」

思い出した。ししろんという名前は以前不知建の皆でゲームセンターに遊びに行ったときにポルカから出た名前だ。ポルカが楽しそうな顔をしながら語っていたのを覚えている。

「今度時間できたときゆっくり話してみませんか？」

「…是非。ポルカの友人なら大歓迎だ。」

「やрий、ありがとうございます！じゃああたしとラミイちゃんはこれでおかゆ先輩もまた〜。」

「うん、ぼたんちゃんまたね〜。」

ししろん…獅白さんは僕とおかゆに手を振りながら出て行った。

「ふう…初のお客さんの相手は終わったな…」

「ライ君お疲れ様〜。初めてでラミイをさばききつたの凄いや〜！」

「事前におかゆに教わっていたおかげだよ。前知識がなければ本当に大変だったと思う…あつ、そうだスバルは？」

冒頭でスバルの悲鳴を聞いていたが、その後のスバルのことを忘れていた。

ちようどそのことを思い出したタイミングで、スバルが入り口の扉からよろめきながら姿を現した。

「ふ、二人とも…」

「スバルちゃん？どうしたのさ？」

「店を開けた瞬間ラミイが突撃してきてさ…それでスバル達が吹っ飛ばされて…」

「スバルも大変だったんだな…」

「ライもな…ラミイ来年から出禁にするかな…」

「でもラミイちゃんと代金は支払ってくれてるよ？」

「ぐぬぬ…確かに」

「さて、僕はそろそろ着替えてくるよ。」

「あつ、ライ君そろそろ時間だよね？」

「えっ？ライどこか行くの？」

「生徒会の仕事の一環で学園内のパトロールをするんだ。」

「ええ!?!じゃあ店どうすんだよ!?!」

「…スバル。」

僕はスバルの肩を掴み、スバルの顔を真っ直ぐ見つめた。

「な、何だよ。」

「前おかゆの家で遊んだ時の罰ゲーム覚えてるか？」

「罰ゲーム？…あつ…」

以前おかゆの家でレースゲームで遊んだ時に獲得したスバルに言うことを一つ聞かせる権利を使わずに、今もまだ持っていた。

「ら、ライまさか…」

「そのまさかだ。スバル僕の代わりにホストを頼む。」

「おいっ！スバルにその地獄を押し付けるな!!」

「大丈夫、学園内でちゃんと宣伝してくるから。じゃあ僕はそろそろ行くよ。」

「ライ君お勤め頑張つてね。」

「待てライ！行くなああ!!」

再度スバルの悲鳴が聞こえたが、次の仕事が残っていたので僕は走り出した。

学園祭3

学園祭2日目。

現在の時刻は午前8時。学園祭は10時から開始されるが、不知建で実施する出し物の最終準備のために、僕は朝早くから部室にやって来た。

僕はクラブハウスからそのまま来たため一番乗りであった。事前にフレアから預かっていた部室の鍵を開けて、部室内にある電気ポットでお湯を沸かし、皆の到着を待った。

部室を開けて席に着いて5分ほど経つと、部室前の廊下から足音が聞こえてきた。

その足音がどんどん近づいてきて部室の前で足音が止まると、扉が勢いよく開かれた。

「ライ君！おっはよー!!」

元気な明るい声の正体は不知建の広告部長担当、星街すいせいであつた。

「おはようすいせい。」

「あれ？みこちはまだ来てないの？」

「ああ、まだ見かけていないが…」

「じゃあ寝坊してるかもねー、みこち朝に弱いし。全く…同じ学園で生活してるライ君は早く来てるのに。」

「まあみこらしいと言えばみこらしいが。」

「あはは、確かに。」

すいせいは僕に同意しながら荷物を部室の机に置き、僕の隣に座つた。

するとちようどポットのお湯が沸いたようで、僕はコーヒーを淹れる準備をしようとした。

「すいせい、コーヒーを淹れようと思うんだが紅茶でも飲むかい？」

「あつ、飲む飲むー!」

すいせいは苦いものは苦手なため紅茶にしてあげた。

ただ甘いものも得意ではないので甘さを控えめにした茶葉のものを選んだ。

「ねえライ君?」

「ん?」

準備をしているとすいせいが僕に話しかけてきた。

「明日、楽しみにしてるね!」

「…ああ、僕も楽しみだ。」

明日は学園祭3日目。この日はクラスや不知建の出し物はなく、生徒会の仕事もないため自由行動となっている。

そのため以前からすいせいと3日目を一緒に回ろうと約束をしていた。

僕がすいせいに応えようとすいせいは嬉しそうに笑っていた。

僕と学園祭を回ることをそれだけ楽しみにしてくれているのだろうか。喜んでもらえるなら僕も嬉しい。

カップにそれぞれコーヒーと紅茶を注ぎ、すいせいに紅茶が入ったカップを渡して僕はすいせいの隣の席に着いた。

そのままコーヒーを一口飲むと、程よい苦みと旨味が染み渡り、静寂な部屋にも相俟って落ち着きをもたらしてくれた。

すいせいも満足そうに紅茶を口にしていた。気分が良くなったのか、すいせいは椅子に座ったまま椅子をもっと僕の隣に近づかせた。もう少しで肩と肩が触れ合いそうな距離に僕は心地よさを感じていた。

その後、僕とすいせいは皆が到着するまで言葉を交わさなかった。でも僕はこの雰囲気は嫌いではなかった。

結局フレアたちは8時30分頃に到着し、みこはさらにその10分後に息を切らせながら到着した…

「よし、みんな準備はOK?」

「おーっ!!」 「ああ。」

部長のフレアの掛け声にメンバーが応え、2日目の学園祭がスタートとなった。

不知建で行う出し物はお化け屋敷だ。

受付、案内役、脅かし役の2人ずつの3グループの交代制で役割を分担している。

受付は僕とフレア、案内役はみことノエル、脅かし役はすいせいとポルカだ。

不知建の部室をお化け屋敷にしたのだが、これはあくあの友人の紫の魔法使いにお願いをして改造した。

物理法則を無視して部室が変化していく様子に啞然としたが、皆曰く気にしない方がいいとのことだった。

それぞれメンバーが持ち場に付き、僕とフレアも部室前の受付の席に座った。

すると間もなく生徒達が受付前にずらずらと並び始めた。不知建のお化け屋敷は例年大人気らしく、チケットを購入してもらい、時間になったら連絡を入れて入室してもらおう予約制にしているそうだ。予約制にしてから運営がだいぶ楽になっていたようで、今回も予約制となっている。

僕がチケットの販売、連絡の役割を担い、フレアが客を整列、誘導を行っている。

「はい、こちらがチケットになります。順番が来たら連絡を入れるので時間厳守をお願いします。…お待たせしました、今のお客様が中から出てきたら開始となりますので受付前までお越しく下さい。」

「ノエちゃんみこちー、お客様が入ったから案内お願いねー。あつ、次に入られるお客様はこちらでお待ちくださいーい!」

僕とフレアはテキパキと仕事を捌いていった。

「人は多いが何とかなるものだね。」

「いやー、ライ君がいて助かったよー。みこちとノエちゃんは計算苦

手だし、すいちゃんとかポルカはどちらかという脅かす役の方が適任だからさ。」

「生徒会での仕事で慣れたおかげかもしれないな。…でもフレアや不知建のみんなには申し訳ないと思っっているんだ。」

「えっ? 何で?？」

僕の発言にフレアは不思議そうに首を傾げていた。

「こうして今日不知建の出し物に参加はしているけど、生徒会の仕事やクラスの出し物の準備を優先してしまって、中々手伝いに来ることができなかったからさ…皆には負担を負わせてしまっていたかもしれないと思っ…」

実際そうだった。

もちろん不知建に顔を出せる時は出してはいたが、僕が手伝えることはあまりなかった。

申し訳ないという気持ちを抱えていたが、隣に座っているフレアはクスクス笑っていた。

「フレア?」

「あつ、ごめんごめん、ライ君が真面目過ぎて笑っちゃってさ。」

「真面目過ぎる?」

「そつ、不知建の皆ライ君が学園祭に向けて生徒会の仕事が忙しいっていうのは知っていたし、わざわざ忙しいのに合間を見てライ君皆に会いに来てくれたでしょ? その時は皆凄く嬉しいって思ってたし、ライ君が頑張っているから私たちも頑張ろう! って気持ちになれたんだよ?」

フレアは細い人差し指を振りながら教えてくれた。

「学園祭の為に一生懸命働いてくれていたライ君、生徒会の皆に私たちは感謝しかしてないよ。」

「フレア…」

「だからさ、折角の学園祭をすっかり楽しんで、忘れない思い出を作ろうよ。ね?」

そう言っってフレアは優しく微笑んでくれた。

(この学園祭で気負いしていたのは僕だけだったか…)

フレアが言ってくれた通りに僕は学園祭を楽しみ、思い出を作りたいと思えた。

僕は改めてフレアに向き合い、笑顔を浮かべて頷いた。

昼休憩に入り、部室がお化け屋敷と化して休憩ができない状況であるため、僕が住んでいるクラブハウスの部屋を不知建の休憩所として活用していた。

「ぶはあ！疲れたにえ！」

「ポルカも疲れたわ：脅かすのって結構体力いる…」

「お客さんも多いしねー。午後からどんどん増えると思うよ。」

「ああ、予約リストを見るだけでも学園祭終了ギリギリの時間までいるな。」

「だよねえ：すいちゃん喉痛めそうだからのど飴買ってこようかな。」

「すいせい、のど飴ならベッドの横の机の引き出しの中に入ってるから食べてもいいよ。」

「ほんと!?助かるわあ：あつ、これすいちゃんの好きなやつだ！」

「すいちゃんポルカにも頂戴ー。」

「みこはお腹が空いたにえ…」

「確かにお昼だからな：何か屋台か売店で買ってくるよ。」

僕が部屋から出ようとしたタイミングで、ちょうど部屋のドアが開いた。

入ってきたのは両手に袋を抱えたノエルと：

「皆く飲み物買ってきたよ。」

「おー、ライ君久しぶりだね。」

「…お姉さん？」

すいせいのお姉さんだった。

「お姉ちゃん遅いー。」

「ごめんごめん、不知建の皆の分のお弁当作ってたら遅くなっちゃってさー。」

すいせいのお姉さんはそう言うもって持ってきたバッグの中から弁当を取り出した。

「やったー！姉街大好きー!!」

みこは喜びながらお姉さんに抱き着いていた。

「よしよしー、みこちは今日も可愛いねー。はいっ、ライ君もお弁当どうぞー。」

お姉さんはみこをあやししながら僕にもお弁当を渡してくれた。

「ありがとうございます…でも、どうしてお姉さんが学園祭に?」

「実はすいちゃんに学園祭の日忙しくなるだろうからお弁当を作ってほしいって頼まれてさー。私もこの学園のOGだから久しぶりに学園祭の様子が見たくなったの。あ、あとライ君に久しぶりに会いたって気持ちもあつたんだー。」

「なるほど、そうだったんですね。僕も久しぶりに会えてうれしいです。」

お姉さんと会うのは以前すいせいのお家にお邪魔した時以来だ。

お姉さんは凄く優しいお姉さん、という印象が強く、同じく優しいすいせいのお姉さんであることを実感させられた。

「むう…」

お姉さんと楽しく話しているとすいせいがムスツと顔をしかめていた。

「すいせい?どうしたんだい?」

「べつっにー…」

何故かすいせいに顔を逸らされてしまったが、僕は何かしてしまっただろうか?

「あつ、そうだライ君、ちよつと耳貸して?」

「?」

僕はお姉さんに手招きされて、指示に従った。

(ライ君学園祭のブルームーンって知ってる?)

(ブルームーン?)

(学園祭最終日の夜に礼拝堂に行くよ…いいことが起きるみたいなの！思い出したらすいちゃんも行つてあげて?)

お姉さんも学園祭最終日に僕とすいせいが学園祭を一緒に回ることを知っているようだった。

ブルームーンという話は初めて聞いたが、いいことが起こるといふなら行つてみたい、と思う。

(分かりました。僕も礼拝堂は好きなので、すいせいを誘つてみたいと思います。)

(うんうん！是非行つてね！)

伝えたいことが終わったのかお姉さんは耳から離れた。

そのままお姉さんは他の不知建メンバーにお弁当を渡していった。

ブルームーン…何が起こるか分からないが覚えておこうと思う。

とにもかくにもまずはお化け屋敷を成功させたい。

(午後からも皆と頑張ろう…皆と思い出を作るためにも…)

学園祭4

学園祭3日目（最終日）。

僕は今学園の門の前ですいせいの到着を待っている。

今日学園祭を一緒に回る予定であるすいせいだが、道が混んでいるようで10分ほど遅れるとのことだ。

（それにしても…今日は特に人が多いな…）

今日が学園祭最終日ということもあり学園内にはかなりの人がいた。

恐らく道が混んでいるのもこの学園祭が無関係というわけではないらしい。

「あのお…」

「ん？」

僕が考え事をしていると、コートを着て手に学園のマップを抱えた女性が話しかけてきた。

その女性はピンクのインナーが入ったロングヘアで厚底眼鏡をかけており、目元は少し分かりづらいがかなりの美人であることが伺えた。

「僕に何か？」

「実はここに行きたいんですけど道が分かんなくなっちゃって…」

女性は手に持っているマップを指差して僕に行きたい場所を示した。

その場所は僕が知っている場所だった。

「ああ、そこは…」

僕はその女性に目的地までの道を教えた。

「なるほど！結構近くだったんだ！教えてくれてありがとうございませー！」

女性は僕に笑顔を向けて頭を下げた。

僕は気にしていないことを伝えるために手を振った。

「じゃあ私はこれで…あつ、そらちゃん！この行き方教えても

らったよー!」

「ほんとあずきち?!どこどこ?!」

女性は僕と別れ友人と思われるサングラスをかけた女性と合流していた。

(2人とも高校生に見えないくらい大人びているが…すいせいのお姉さんと同じOGなのかな?)

そんなことを考えていると待ち合わせの相手の姿が見えてきた。

「ごめんライ君!道が凄い混んじやつて…ハアハア…」

すいせいが息を切らしながらやってきた。

「だ、大丈夫かすいせい?」

「うん…ほんと待たせてごめんね?」

すいせいは申し訳なさそうに謝罪してきた。

「…全然気にしていないよ?それより…」

僕は言葉を途中で区切り、すいせいに手を差し伸べた。

「早く一緒に回ろう?早くすいせいと色んなところに回りたいんだ。」

「!!…うん!行こう!」

笑顔が戻ったすいせいは差し伸べた僕の手を取り、学園の門を2人で潜り抜けた…

「そういえばライ君はどこを回りたいかとか決めてるの?」

屋台などが多い中庭辺りにやってくるとすいせいから質問をされた。

「実は…ここに行ってみたいんだ。」

僕はポケットから学園祭用のマップを取り出してすいせいに目的地の場所を差し示した。

「ここは…体育館?」

「ああ、おかゆとスバルから教えてもらったんだが、体育館で演劇があるみたいでそれを見てみたいと思つてたんだが…どうかな？」

「へえー、いいじゃん！行つてみよ！」

すいせいも乗り気なようでよかった。以前の勉強会でフレアからアドバイスをもらつていたが事前に行きたいところを決めておいて正解だった。

「すいせいは行きたいところは決まっているかい？」

「うーん…実は決めていなくてさ…ライ君が行きたいところに行つてみたいなあ、つて思つてたんだ。」

「僕の？」

「ライ君生徒会でも忙しそうだったし、不知建の出し物の準備もあつたでしょ？一生懸命皆の為に準備してきてくれたから、最終日の今日くらいはライ君の思い出に残る為にも好きなどころを選んでほしいんだ。」

「すいせい…」

「まあ、単純にライ君はどこに行きたいのかなつて個人的に気になつてたのもあるんだけどね。」

そう言いながらすいせいは照れ臭そうに笑つた。

…すいせいもフレア同様僕のことを考えてくれていた。

「…ありがとうすいせい。すいせいも楽しめるようにちゃんと決めるよ。」

「うん！今日はリード頼むよ？」

すいせいは僕の胸を小突きながら悪戯つぽく笑つた。

2人で笑い合つていると、

「あれ？ライ君とすいちゃん？」

聞き覚えがある声に呼びかけられた。振り向くとそこには僕と同じ生徒会メンバーのミオさんがいた。

「あつ！ミオちゃんじゃん！」

「お2人は待ち合わせですかなー？」

「うん、すいせいと体育館で演劇を見ようつて話をしてたんだ。」

「おおー奇遇だねえ。ウチもその演劇を見に行こうと思つてたん

だあ。」

「そうなんだ、じゃあミオちゃんも一緒に私たちと見に行く?」

すいせいがミオさんに同行しないか誘ってくれた。

折角の機会だし、ミオさんと一緒に行動するのもありかもしれない。
い。

「あつ、ちよつとだけ待ってくれる?ウチも待ち合わせしている子がいて、その子がもうすぐ来ると思うんだけど「ミオー!!」…噂をすればなんとやらだよ…」

ミオさんの言葉を遮って明るい声が聞こえてきた。

声がる方に振り返ると白い髪と頭上のふわふわした耳を揺らしながら走ってくる女の子がいた。

「ハアハア…ミオ…遅れてごめん!!」

「もう、フブキー?ウチずっと待ってたんだよ?」

やってきた女の子はミオさんに手を合わせて謝罪をしていた。

ミオさんはやれやれと窘めていたが、本気で注意をしているわけではないようだった。

「フブちゃんやつほー!」

すいせいもその子と知り合いだったようで手を振りながら声を掛けた。

「おお、すいちゃん!あれれ?すいちゃんもミオと待ち合わせしてたの?」

「ううん、今さっきミオちゃんを体育館の演劇に誘おうとしてたの。

ミオちゃんの待ち合わせ相手はフブちゃんだったんだね。」

「あつ、じゃあすいちゃんも待たせちゃってたのか…ごめんよ?…ん?すいちゃんの隣のイケメンの彼は?」

「ああ、この子は皇ライ君。私の後輩で不知建のメンバーなんだ。」

すいせいがフブちゃんなる女の子に僕のことを紹介してくれた。

しかし、僕は別のことを考えていた。

(フブちゃん…どこかで聞き覚えが…それにあの耳もどこかで見たよ
うな…?)

恐らく僕は彼女を見るのは初めてではない。

この学園に居る間に見かけたはずなのだが、どうしても思い出せない…

どうにか思い出そうとしていると向こうの方から話しかけてきてくれた。

「こんこんきーつね！初めまして！白上フブキです…？」

「？どうも皇ライです、よろしく白上さん。」

明るい挨拶をしてくれた白上さんであったが、何故か途中からトーンダウンしていった。

彼女の様子を見てみると僕の顔を見つめながら首を傾げていた。

「あれあれ？何処かでお会いしたような…？」

「奇遇だね、僕もどこかで白上さんを見かけたことがある気がするんだけど…」

どうやら白上さんも僕を見たことがあるようだ。

お互いに認識があるならおそらく間違いない。

僕は目を閉じてもう一度深く思い出してみた。

彼女の特徴的な白い大きな耳…フワフワとした触り心地が良さそうな耳…

こんな感じの耳を見たことが1度だけある。

(あれは確か礼拝堂に行ったときに…あっ！)

自身の記憶を頼りに礼拝堂で起きた出来事を思い出した。

「神父様…？」

「?!?!」

僕の言葉で驚いた顔を浮かべた白上さんがフワフワした耳を真っすぐに突き立てた。

「えっ？」

「神父??」

すいせいとミオさんはピンと来ておらず不思議な顔をしていた。

「ちよ、ちよつとここつちに来てくださいー！」

「あ、ああ。」

白上さんは焦った様子で僕の手を掴み、人気がない方に僕を連れていった。

「あつ…ライ君…」

すいせいは僕たちの姿を見ながら何か言いたそうにしていたが、僕はそのまま白上さんに連れて行かれてしまった。

学園祭5

「お願いします！ミオには白上が神父をやっていることは言わないでください!!」

すいせいやミオさんを置いて白上さんに人目が付かない校舎裏に連れて来られたが、着いた瞬間にいきなり白上さんが顔に手を合わせ、懇願してきた。

「??言っただけじゃないことなのかい?」

「:前に一度だけミオに礼拝堂で神父をやったのがバレたことがあって:その時に変なことをするなあ! ってめちやくちや怒られてしまっただけ:」

あの優しくして温厚なミオさんが怒ることがあるのか:」

生徒会で一緒にいる間にあやめ達に注意をしているのを見かけたことがあるが、怒鳴ったりしている姿が想像できない:」

「ちなみに何で神父をやっているんだい?」

「実は:白上の趣味がコスプレでして:この前は同じコスプレ趣味のマリンに誘われて礼拝堂で神父とシスターごっこをしていたのですが思いのほか楽しくなっちゃって:」

「なるほど:僕もクラスの出し物でコスプレをしたけど確かに楽しかったな。」

僕も先日おかゆと一緒にホストのコスプレをしたが、想像より楽しかった。

白上さんが言うことも理解ができる。

「本当ですか!?!ここにもコスプレ仲間がいたなんて!...:そ、それでミオには黙っていてくれませんか:~?」

「:人の秘密を口外する趣味はないよ。」

「あ、ありがとうございます!!」

白上さんは嬉しそうな顔をして僕の手を両手で握りしめてきた。

「じゃあ、黙ってくれる代わりに一つ良いことをお教えしましょう。」

良いこと？

白上さんは僕の手を離すとコホン、と一回咳ばらいをして、目を閉じながら語り始めた。

アツシユフオード学園ができて間もない頃、ある生徒が恋に落ちました。

2人はとても愛し合っていました。が、生まれや人種の違いにより、お互いの両親や教師に反対をされ、2人の仲は引き裂かれてしまいました：

想いを断ち切れない2人はこのまま離れ離れになるのなら、と学園の礼拝堂で2人だけで結婚式を上げ、永久の愛を誓い、死を選ぼうとしました。

いなくなった息子と娘を探し、礼拝堂にたどり着く両親と教師達：互いに短剣を突き刺そうとする2人：

その時、礼拝堂に飾られていたステンドグラスが輝き、人々を包み込みます。

幻想的な光景は、狂乱的な思考を沈め、静寂な水面を心に広げました。

2人の若者と両親たちは初めて互いを見て話し合い、そして2人の仲を認めました。

その夜はブルームーン。

夜空に浮かぶ満月はステンドグラスの輝きで礼拝堂を照らし出し、恋人たちを祝福していました。

「それ以来、ブルームーンの夜は学園の礼拝堂で告白すると、その恋は

どんな障害をも乗り越え、成就し永遠に結ばれると言われているのです…」

白上さんは話し終わると深い息をついた。

ブルームーン…すいせいのお姉さんに教えてもらった単語だ。

確かお姉さんの話では良いことが起きるといふ話だったはずだが、白上さんの話を聞くと御伽噺の恋愛の話に聞こえたような…

「素敵なお話だったけど…どうして僕にその話を？」

「おやおや？皇さんとすいちゃんってそういう仲間じゃなかったんですか？」

「そういう仲間？」

白上さんは不思議そうに首を傾げていたが、僕も釣られて首を傾げてしまった。

「…もしかして白上は余計なことを言ってしまったのでは…」

「??？」

「す、皇さん？すいちゃんとはどういった関係ですか？」

「すいせい？僕がこの学園に転入してきて初めてできた友人で…大切な人だ。」

「むむむ…すいちゃんもそう思っているはずですよね？」

「すいせいには直接聞いたことがないからそれはわからないが…」

「じゃあ学園祭を2人で回っているのはどうしてですか？」

「それは…学園祭が始まる前にすいせいに一緒に回ろうと誘われて…」

「うーん、その話を聞くと、そうだとしか思えないですねえ…でもどうなんだろうなあ…」

白上さんからの質問に次々答えていると白上さんが何故か頭を抱えていた。

(すいせい…)

改めて彼女のことを考えると、この学園にいる間において色濃いい出を作ることができたのは大半がすいせいのおかげだ。

不知建、クラスメイト、生徒会、その他においても色々な繋がりができたのはすいせいの存在があったからだと思う。

ふと、以前ラプラスによつて悪夢を見せられた時のことを思い出したが、すいせいが自分の元から離れていなくなつてしまうことが実際に起きてしまうと思うと、

(凄く嫌だな…)

自分でも驚いたが醜い感情を持つてしまったようだ。

決して自分のものではないすいせいを失くすことに何故か焦燥感や喪失感に近いものを感じている。

彼女には彼女にしか選べない道があるはずなのに…

「白上さん…いや神父様。」

「はい？」

「1つ、僕の悩みを聞いていただけませんか…？」

すいせい side

「あの2人遅いね…」

「そうだねえ…フブキは何でライ君を連れて行つたんだろ？」

フブちゃんとライ君がこの場を離れて10分ほど経過した。

…正直あの2人が何を話しているのかめちやくちや気になつてい
る。

(こつそり覗こうかな…)

「ねえすいちゃん？」

「うわあ!?!な、なにミオちゃん？」

ライ君達のことを追いかけてみようと思つていた時に、ミオちゃんから話しかけられてしまったのでびっくりしてしまった…

ミオちゃんの方に振り向くとミオちゃんが凄くいい笑顔をしてい

た。

「すいちゃん、前からライ君と学園祭回る予定だったの？」

「え、うん…まあ…」

「ほうほう…なるほどねえ…」

改めて聞かれるとなんか恥ずかしい…

多分ミオちゃんには私の気持ちには気づいてそうだし…

「あつ、勘違いしないでね？別にウチは2人を邪魔なんてする気はないからさ。逆に応援したいんだよね。」

「応援？」

「そうそう、すいちゃんもライ君もウチにとつては大事なお友達だからねえ。だから幸せになってほしいって思っちゃうんだあ。」

「ミオちゃん…」

「あつ、良いこと思いついたんだけどさ、ウチがすいちゃんの今の運勢占ってあげようか？」

ミオちゃんはそう言いながら懐からタレットカードを取り出してくれた。

ミオちゃんの占いは良く当たることで有名だ。でも…

「ありがとミオちゃん…でもやっぱり今回は占ってもらわなくていいや。」

「え？いいの？」

「うん、やっぱりこれだけは自分の力で何とかしたいから…」

「そっかそっか…これは余計なお世話だったね。」

「ううん、でも気持ちは本当に嬉しかったから。」

そう言つて私はミオちゃんと笑い合った。

そしてしばらくしてからライ君達が戻つて来た。

「お、お待たせ。」

「もうフブキー、待ち合わせにも遅れるだけじゃなくて、さらに待たせるなんて…ウチも怒るよ？」

「ごめんよミオー、すいちゃんもごめんね？後で白上が屋台で何か奢ってあげるからさ…」

フブちゃんは申し訳なさそうに謝罪をしてきた。

ライ君も私のところに戻ってきて申し訳なさそうな顔をしていた。「すまないすいせい、遅くなった。」

「本当だよー。私と回る約束をしていたのに、私を置いて他の可愛い女の子のところに行っちゃうんだもんなあ。」

「それは…すまない…」

ライ君の顔が罰が悪そうな表情に変わった。

別にフブちゃんに連れ出されただけなので怒ってはいないが、何となく揶揄いたくなってしまった。

「ちなみに…何してたの？」

「それは…」

「…言えない？」

「…うん。」

「ふーん…」

ライ君が私に隠し事をするのは珍しい。

私を待たせている間にフブちゃんを口説いていたらライ君をぶつk…ちよーつと怒ったかもだけど、流石にそんなことはしないのは分かっている。

「まっ、いつか。今日は最終日だから人も多いし、早くしないと回りたところ回れなくなっちゃうかもだから早く行く？」

「…ああ、そうだな。」

「よし…そうと決まれば…」

私は言葉を区切ると、自分の右腕をライ君の左腕の間に通し、腕を組んだ。

「す、すいせい？」

「…ほら、今日はライ君が私をエスコートしてくれるんでしょう？だったら、早く連れて行ってよ？」

そう言ったものの自分のした行動にめちやくちや恥ずかしくなってきたので、ライ君から顔を逸らした。

ライ君は少し固まっていたが、意を決したのか腕に力が籠ったのを感じた。

「…行くよ、すいせい。」

「うん…」

私たちは少しぎこちない動きで、演劇が行われる体育館を目指した。

「青春ですなあ…」

フブちゃんとミオちゃんがいるのを忘れたまま。

学園祭6

すいせい達と中庭から移動して、目的の演劇が行われる体育館にやってきた。

すいせいと腕を組みながら移動していたためか、少し周りから目線が増えていた気がする。

主に男子生徒から睨まれていた気がするが、すいせいから気にするなど言われたので何も考えないようにしていた。

後ろから着いてきていたミオさんと白上さんは何も言わなかったが、終始凄い笑顔であった。

体育館の入り口付近に辿り着いた僕らは演劇を観るのに必要なチケットを買いに来た。

「そういうえばライ君、観ようと思ってる演劇のタイトルってなに？」隣にいたすいせいが僕に質問をしてきた。

「ああ、僕らが観ようとしている演劇のタイトルは…」

僕は入り口で貰ったパンフレットに記載されているタイトルを指で差してすいせいに見せた。

『ひとりぼっちの皇子様』

「ああ、なるほど…」

「？」

僕以外の3人がタイトルを聞いて反応を示した。

「皆この話を知っているのか？」

「うん、昔の有名なお話だから小っちゃい頃から知ってるよ。」

「白上はこの話割と好きではあるんですが…」

「なんていうか…面白いんだけど、凄く切ないストーリーなんだよねえ…」

「どうやら有名なお話だったらしい。」

僕は知らなかったが、タイトルを観て一番興味を惹かれたのがこれだった。

「…皆が知っている話なら別の劇の方がいいかな？今からでも「ライ

君。」「…すいせい?」

僕の言葉の途中ですいせいが言葉を重ねてきた。

すいせいは僕の顔を真剣に見つめてきた。

「ライ君、さっきの私との中庭での話覚えてる?」

「…?」

中庭での話…どの話のことだろう…?

すいせいは真剣な表情を崩し、やれやれとした顔で、僕の胸を小突いてきた。

「もう、言つたじゃん…私は今日ライ君が行きたいところを回りたいって。」

「あつ…」

そういえば学園祭を回る際にすいせいから言われたな…

「まあ私たちに合わせようとしてくれる気持ちは嬉しいし、そこがライ君の優しさだなって思うけどさ…一番はライ君が楽しんで、思い出に残るようにしてほしいんだよねー。」

「すいせい…」

「いいじゃん、ライ君が気になるのがその話ならそれで、ね?…私はライ君が楽しんでくれるなら、それだけで楽しいからさ。」

すいせいはそう言つて微笑みかけてくれた。

すいせいには本当に敵わない…

「ありがとうすいせい…すいせいは本当に優しいな…」

「まあね、私はライ君よりもお姉さんですから!…だからちよつとの我儘とか、甘えたいことがあつたら何でも言つてよ?寛大なすいちゃんは許してあげるからさ。」

「うん…」

何だか胸が暖かくなった。

ここまですいせいが僕のことを考えてくれているのがとても嬉しい。

「…つて、決めちゃったけどさ…ミオちゃんとフブちゃんもこれでいい?」

「全然いいよお、ウチこの話自体は好きだし。」

「白上も！むしろ皇さんにこの話知ってほしいですもん！」

すいせいの言葉に2人が賛同してくれた。

「よし！じゃあ受付に行つてこのままチケット買っちゃおう！」

「行く行く。」

「ほらほら、皇さんも行きましょー。」

「…ああ。」

すいせいとミオさんに先導され、背中を白上さんに押されて僕たちは受付に向かった。

受付は僕とすいせいで済ませることにして、ミオさんと白上さんは劇が始まるまでに学園祭の屋台で買い物してもらうことにした。

「すみません、ひとりぼっちの皇子様のチケット4枚ください。」

「はい、チケットどうぞでござ…あつ！」

「?…あつ、君は…」

受付に辿り着いた僕らはチケットを購入しようとする受付の人に声を掛けた。

するとそこには、以前プラスの命令で僕を襲撃した侍風な忍者のような格好をした少女がいた。

「す、皇先輩でござるか？」

「ああ、君は確かh o o Xの…」

「あつ、あの時は名前を名乗ってなかったでござるな。コホン、h o o Xの用心棒、風真いろはと申すでござる。」

いろはと名乗った少女はその後丁寧に頭を下げて挨拶をしてくれた。

「改めて、皇ライだ。ところで風真さんは何故ここで受付を？」

「いろはでいいでござるよ。実はh o o Xのメンバーの出し物で劇をするのでござるよー。」

なるほど、そういうことだったのか。

しかし、そうなる気がなることがあった。

「劇はメンバーだけでやるのか？それだと少し大変なような気がするが…」

「あつ、そこはラプ殿の秘策があるから大丈夫でござるよ？そういうえば皇先輩は「ライ君、チケット買ったー？」すすすす、すいせい先輩!」

いろはと話をしていたら、僕の後ろで待っていたすいせいがひよっこりと顔を出してきた。

「ん？…あつ、いろはだー。」

「すすすすいせい先輩!…ごごごご無沙汰しているでございますでござる!」

「おうおう、落ち着けー、日本語おかしくなってるよー?」

「すいせいはいろはと知り合いだったのか?」

「うん、とは言っても、この前のラプラスの一件があつた以降で知り合いになったから付き合いはまだ浅いんだけどねー。」

「ああ…すいせい先輩と話せるなんて…h o o xに入ってたでよかつたでござる…」

すいせいが出てきてからいろはの反応が変わった。まるですいせいのフアンのように見える。

いや、前おかゆに聞いたが、すいせいはこの学園の生徒から男女問わずかなりの人気を誇っているようだ。

ファンクラブもあるらしく、もしかしたらいろはもそこに…?

「ていうかいろは、他のメンバーはどこにいるの?」

感激しているいろはに対してすいせいが疑問を投げかけた。

「…はっ!ほ、他のメンバーは劇が始まるまではアジトで待機してるでござる。」

いろはは我に帰ったようで、何とか落ち着いたみたいだ。

そして何か思い出したように、手をポンと叩いた。

「そうでござる!ラプ殿が皇先輩に会いたって言ってたんでござつた!」

「ラプラスが?」

「何か言いたいことがあつたようでござるが…内容までは風真は聞い

てないでござる。」

ラプラスが僕に何を伝えたいんだろう…？

ラプラスとはあの事件以来あつていないが、トワが嚴重注意を行ったことはトワから聞いている。

「…またライ君に酷いことするつもり？」

すいせいが少し不機嫌な顔になった。

以前のことを思い出して警戒をしまつていたのであろうが、そのすいせいの反応を見て慌てふためいているいろはの様子を見て僕は苦笑してしまつた。

「すいせい、僕はもう前のことは気にしていないよ？」

「でも…」

すいせいは納得がいかない様子であつた。

すいせいが僕のことを心配してくれるのは嬉しい。

「あの後トワがちゃんと注意してくれたみたいだし、それに…何かあればまたすいせいが守ってくれるって信じてるから。」

「…分かつた、ライ君がそこまで言うなら…」

渋々、といったような感じですいせいは納得してくれた。

男としては女の子に守ってもらうのはどうかと思つたが、すいせいを信頼しているからこそその頼みだ。

「そ、それじゃあ、ラプ殿の元まで案内させていただくでござる！」

僕達はいろはの案内で再びh o o Xの総帥と相まみえることとなつた。

学園祭7

いろはに以前僕が拘束されていたアジトの前まで案内をされた。そしてアジトの前の扉にいろはがノックをした。

「ラブ殿？いるでござるか？」

『おー風真？どした？』

「…皇ライ先輩とすいせい先輩をお連れしに来たでござる。」

いろはが僕たちを連れてきたことを伝えた瞬間、扉の前から足音がドタドタと鳴り響き、勢いよく扉が開かれた。

扉から現れたのはh o l o Xの総帥ことラプラス・ダークネスだ。

「皇…ライ…」

「や、やあ、久しぶり…？」

予想していた反応と違ったことに僕は少し驚いてしまった。

ラプラスは僕の顔を確認すると、顔を俯けたままゆっくりと僕に近づいてきた。

僕はその様子を見たまま立ち止まってしまった。

「ちよ、ちよつとーライ君に何する気!？」

するとすいせいが僕とラプラスの間に割り込んできた。

すいせいは腕を大きく広げて、僕を庇うような体勢をとった。

あと一歩踏み出すとぶつかりそうな距離になり、そこでラプラスは歩みを止めた。

しばらく誰も言葉を発さず、時間が過ぎた。

するとラプラスの口から言葉が発せられた。

「……かった…」

「えっ？」

以前のような自信満々の声とは裏腹にかなりか細い声だった。

あまりにも小さな声であったため僕はつい聞き返してしまった。

今度はラプラスは俯かせた顔を上げながら僕の顔を直接見ながら、もう一度言葉を発した。

「……この前はすまなかった…」

聞こえてきた言葉は謝罪のものであった。

先程の反応といい、この言葉も予想していなかったものであったため、思わずすいせいと顔を見合わせてしまった。

以前のような横暴さは感じられず、まるで親に叱られて謝罪をしに来た子供のように見えた。

その様子を見た僕はすいせいの肩に手を置き、位置を入れ替えた。

「あの時の吾輩はトワ様がお前に盗られたと勘違いしてしまっていたんだ：でも、痛めつけたり、記憶を覗いたりしたのはやりすぎってしまったと思う：」

そう言った後、ラプラスは僕の目を真っ直ぐと見つめてきた。

「これからはh o l o Xの総帥として、この学園、世界を征服していくために、部下に見られて恥ずかしくない姿を見せていきたいと思う。だからっ：すまなかつた：」

言い終わるとラプラスは頭を僕に下げた。

正直、今は驚きの方が大きい。野望は大きいが、あのラプラスがトワに注意されたからとはいえ、ここまで変わるとは思っていなかった。

「ラプラス、僕は気にして「ライ君待つて」？」

もとより、謝罪をされるなら僕は受け入れるつもりでいたため、そう回答しようとしたがすいせいに止められた。

するとすいせいは僕に小声で耳打ちをしてきた。

（ライ君このまま許しちゃうの？）

（ああ、そのつもりだったんだけど…）

（あれだけのことされたんだから、もっと謝罪させたり、何かさせてもいいんじゃない？）

すいせいにそう言われてから少し考えて、ラプラスを見る。いつも

のような天上天下唯我独尊な彼女は身を潜め、おっかなびつくり身を少しすくめるその姿はただの女の子のように見えた。

その姿を見てから僕はラプラスと目線が同じになるようにしゃがんだ。

「…じゃあラプラス、1つ僕のお願いを聞いてくれないか？」

「願う？な、なんでも聞くぞ！」

「僕と…友達になってくれないか？」

「…えっ？」

その回答にラプラスは心底意外そうな顔をして、すいせいというは小さく笑みを浮かべて黙って話を聞いている。

「そ、そんなことでもいいのか？…でも吾輩どうすれば…」

「そうだな…じゃあ僕のことを名前で呼んでほしいな。お前、とかじゃなくて名前で。」

「…皇…ライ？」

「うん。」

「ライ…ライ…」

「はい。」

「ライ…すまなかった…」

「もう謝る必要はないよ。十分トワから注意を受けていただろうし、トワからも反省の色は見られるって報告ももらっていたから。謝罪も罰も受けたしこれでおしまい。だから…」

僕はその場で立ち上がり、ラプラスに右手を差し伸べた。

「これからは友達として、宜しく頼むよ。」

「…ああっ！」

ようやくラプラスは笑顔を見せてくれた。長い袖を捲り上げ、同じく右手を僕に差し出し、そのまま握手をした。

「吾輩たちは友達…いや、盟友だ！その盟友の証としてライ！お前に吾輩の力を与えよう！」

「えっ？」

ラプラスの言葉に疑問を感じた瞬間、以前のようにラプラスの黄金の瞳が輝きだし、辺りを照らした。

あまりの眩しさに思わず目を閉じたが、一瞬のことだったようですぐに光は収まっていた。

「…ラプラス？今のは？」

「ライに吾輩の力を流し込んだんだ！まあやばくなったら助けしてくれる御守りみたいなものだと思ってくれ！」

ラプラスはふふん、と胸を張って応えた。

ラプラスの力が僕に…

今のところ何も変わった様子はない。驚きはしたが、ラプラスの気持ちとして受け取っておこうと思う。

「ラプラスありがとう、とても心強いよ。」

「うむ…盟友として当然のことをしただけだ！」

最初はラプラスに目の敵にされてはいたが、ようやくそれも解消できたようでよかった。

そのことを嬉しく思っていると、いつの間にかすいせいがラプラスの後ろに立っており、両手の拳を握りしめラプラスのこめかみ辺りを拳でぐりぐりと押さえつけた。

「すいせいさん!？ちよ、痛い痛い痛い!!」

「またライ君に変なことして!この前みたいに倒れたらどうすんの!」

「してない!してないっす!」

…なんだか母親が子供を叱っているような光景にしか見えなかった。

すいせいがラプラスのこめかみから手を放し、ラプラスを解放した。するとすいせいは僕の方に振り返り大股で近づき、僕の正面に立った。

「ライ君。」

「す、すいせい?」

すいせいからじーっと見つめられてしまいたじろいでした。すがすがすいせいは両手で僕の頬を包んできた。

いきなりなことと、すいせいの手が少しひんやりとしていたこともあり驚いたが、すいせいに見つめられたままその場から動けなくなっ

た。

するとすいせいは笑顔を浮かべ、僕の頬を思いつ切り引つ張った。

「ひゅ、ひゅいへい、いひゃい…」

「ライ君はなーんで警戒心がそんなにないのかなあ？この前のこと忘れちゃったの??」

すいせいはどうやら僕が無警戒でいることに腹を立てているようだ。

確かに以前はすいせいとトワに心配をかけてしまった。そのことを考えると僕はもう少し慎重になるべきだったかもしれない…

「ご、ごめんなひゃい…」

「んー？何て言ってるかわかんないなあ？」

すいせいは僕の頬を一瞬少し強く抓ってから解放してくれた。

すいせいも力はずつと入れてはいなかったので、凄く痛いわけではないが、頬をずつと伸ばしている状態になっていたため、ちよつとだけヒリヒリしている。

「すいせい…ごめん…」

「全くだよ？ライ君は女の子に対する警戒心が足りないと思う。女の子って意外と怖いんだよ？」

「反省してます…」

「…これ以上ライバルを増やしたくないんだから…」

「えっ?」

すいせいは大きく息を吸ってため息をつき、仕方がない、というように笑みを浮かべた。

「まあ皆に好かれるっていうのがライ君の魅力なんだろうね。よっ、と…」

そのまますいせいは背伸びをし、僕の頭を撫でた。優しくというよりは、大型犬を撫でるようなわしやわしやと撫でていたので、僕の髪が若干乱れた。

すいせいは細腕ではあるが、しっかりと力が入っており、手のひらからは温かさを感じられて、どこか心地よかった。

「めちやくちや人のアジトの前でイチヤついてんなあ…」

「ああ、すいせい先輩に頭を撫でてもらえるなんて羨ましいでござるう…」

ラプラスというはの声が聞こえてきて僕は我に返った。他の人からこの様子を見られていたと思うと顔が熱くなってきた。

「んー？ライ君…もしかして照れてる？」

「言わないでくれ…」

「ふむふむ、そっかそっか！」

すいせいに指摘されて余計に恥ずかしく感じてきた。正直学園祭を開始の際の猫の鳴き真似をした時より恥ずかしい気がする…

そんな僕とは裏腹に、すいせいは満足気な顔を浮かべていた。

「じゃあライ君も恥ずかしい思いをして罰も終わったから許してあげる。ラプラスももうあんなことしちゃだめだよ？もしまたやった場合…」

「も、もうしないです！YMD！」

「よろしい、じゃあ劇楽しみにしてるから頑張ってね！いろはも客引き頑張れ！」

「は、はいでござるー！」

「うんうん、ほら、ライ君行くよ？」

ラプラスというはに激昂の言葉を投げ、返答にも満足したすいせいは鼻歌を歌いながらそのまま僕の手を引き、h o l o Xのアジトを後にした。

学園祭 8

すいせいと一緒にラプラスの元から体育館に戻って来た。
入り口付近には白上さんとミオさんが袋を両手に抱えて待っていた。

「フブちゃんミオちゃんお待ちせー。」

「お、帰って来たねえ。」

「2人ともお帰りなさい〜！じゃじゃーん！屋台でいっぱい買ってきましたよ〜！」

白上さんは両手に抱えた袋を見せてきた。袋から良い匂いが漂っていて、中身は2人が屋台で買ってきてくれた食べ物ようだ。

「2人ともありがとう。皆の分のチケットも買えたから後で渡すね。」

「はーい、劇が始まるまでまだ時間もありますし、どこかで座って食べます?。」

「じゃあ中庭のテーブル席に行く? あそこは結構人も少ないし、多分空いてると思うよ?。」

「よし、なら中庭に行こうか。2人とも、袋を貸してくれるかい? 重かっただろ?。」

「わわ、ありがとうございます皇さん!。」

「ライ君ありがとね〜。」

僕達は中庭に移動して目当てのテーブル席を見つけた。

風通しもよく、人も少ないため休憩するにはうってつけの場所だ
と思う。

席には先客がいたが、よく見ると僕たちが知っている人物だった。

「ふい〜パトロールマジで疲れたわあ:。」

「…トワ？」

「ん？…ライ先輩!？」

テーブルに項垂れていたトワが僕に声を掛けた瞬間に飛び起きた。

「トワじゃん！…ここで何してんの？」

「すいちちゃん！あつ、フブちゃんとミオちゃんまで…」

「やつほートワ様く。」

「トワ、パトロールお疲れ様だねえ。」

「そうか、今日はトワがパトロール係だったね。」

「そうなんですよ、学園内を歩き回って場所がわかんない人を案内したり、落とし物のトラブルとかに対応したり、出し物をやっているクラスのヘルプをしたり…滅茶苦茶疲れましたあ…」

トワはそうとうとまたテーブルに項垂れた。

相当疲れが溜まってているようだし、お腹も空いているのではないかと思い、僕はトワに提案をした。

「トワ、もしよかったら今から皆で屋台で買ってきたものを食べるんだけど、トワも一緒にどうだい？」

「えっ、いいんですか？」

トワは僕の方に振り替えると同時にグーっとお腹の音を鳴らした。

トワは顔を真っ赤にしていたが無理もないと思う。恐らく朝からずっと学園内をパトロールをしていたようだし、お腹が空くのは当たり前前だ。

「お、お願いします…」

トワからも承諾が出たため、トワを含めて食事をすることにした。

「そっか、皆ラプラス達の劇を見に行くんですね。」

「ああ、さっきラプラスと会って以前のことを謝罪されたよ。トワから注意を受けてから反省していたみたいだったよ。」

「まだ注意が足りなかったかと思っただんですけどね、まあライ先輩にちゃんと謝ったならいいとするか…」

僕の隣に座っていたトワは腕を組みながらやれやれ、といった表情を浮かべていた。

するとトワの逆隣に座っていたすいせいがいふと思ひ出したことを述べた。

「ライ君、ラプラスを許した後に友達の証？みたいな感じでラプラスから力を貰ってたよね？」

「うん、正直どんな力なのかが分からないし、どう使うかも分からないけれど…ラプラスが言うにはやばい時に助けになる力らしいよ？」

「ほえー、ラプラスそこまでやったのか。ライ先輩、ちよつと手を貸してもらえますか？」

「手を？」

トワにそう言われて僕は右手をトワに差し出し、トワは僕の手を握り目を閉じた。

「ライ先輩…ラプラスに相当信頼されたか、気に入られましたね？」

「？」

トワは目を開き、僕の目を見て優しく微笑んだ。

「普通悪魔の力って悪魔じゃない人間が使うとなると、契約した悪魔によつては人間側のリスクが大きいですよ。でもライ先輩から感じる力はライ先輩の意志とは関係なく発動する力。聞こえ方としては制御できない力みたいに聞こえますけど、ライ先輩の力に依存しない純粋なラプラスの力だから先輩にはリスクもないし…自動発動させるために常に先輩の身体を魔力が覆っている状態だから、ラプラス相当な魔力を使ったんでしょよね。」

トワからの説明を聞いて、ラプラスがそこまでしていてくれたいたとは思わなかったから驚いてしまった。

ただの人間の僕としては力のようなものは今は何も感じられない。でもラプラスが友達である僕に大きな施しをしてくれたのだと思うと嬉しくなってしまった。

「ラプラスには何かお礼をしないといけないかもな…」

「ラプラスがお礼を求めるとなると、ライ君をh o l o Xに勧誘してきそうな気がするねえ。」

「僕をh o l o Xに?…それでお礼になるんだったらそれでもいいk
「だめだよ(です)!!」…え?」

ミオさんの発言で僕にできることでの案としてはいい案だと思っていたが、すいせいとトワに否定された。

「ライ君不知建にも生徒会にも入ってるでしょ?これ以上何かに参加したらライ君の負担が大きくなっちゃうじゃん!」

「そうですねよ!それにこれからQ4での活動もある予定なのに、時間がいくらあっても足りない状況になっちゃういますよ!」

「…そうかな?」

2人の意見は真つ当だと思う。やることを増やしたことによって今までやってきたことが中途半端なものになってしまうのはよくないし、僕も嫌だ。でも…

「…やっぱりラプラスが僕の力を必要としていたら助けてあげたいな。これは相手がラプラスだからじゃなくて、仮にすいせいやトワ、ミオさんや白上さん、不知建の皆、生徒会の皆、クラスメイトの皆…僕が知っている人が助けを求めているなら手を差し伸べられる人間になりたい。僕の知っている皆が僕に力を貸してくれるように…」

「ライ君…」

「つて、ちょっと傲慢だったかな?」

自分で言葉にしてもそう思ってしまった。僕にできることなどたかが知れている。

「そんなことないよおく、ウチら生徒会にはライ君がいないと本当に大変なんだから。」

「いやそれは本当に思うわ…ライ先輩のおかげで書類仕事とか、備品整理とか大助かりすぎますもん…」

「ふふつ、皇さん頼りにされてますねえ…白上もコスプレ仲間として是非今後お力を貸していただきたいです!」

皆から頼りにしてもらってなんだか嬉しいようなこそばゆい気持ちになった。白上さんの…僕もコスプレをするということなのか

な…？

「不知建にもライ君は必要だよ…私にもライ君の力を貸して欲しい…」

「勿論だすいせい、今後も君が僕を必要としてくれるなら力になる。君が僕を助けてくれたように。」

「…私ってライ君に何かしてあげられてるかな？」

「すいせいは僕がこの学園に来てから一番初めに力を貸してくれたじゃないか。学園の案内、クラスメイトの紹介、不知建にも誘ってくれた…他にも数え切れないくらい君には助けてもらってるし、居場所も友達も君のおかげでできたんだよ？」

「そっか…」

「むしろ僕の方こそ、すいせいに何かできてるのかなって気になってるくらいさ。」

すいせいは不安そうに聞いてきたが、いつも力を貸してくれるのはすいせいの方だと思う。そんなすいせいに何か恩返しをしたいと思っではいるのだが…

「じゃあライ君私のお願いを聞いてくれる…？」

「勿論。」

「私…ライ君のことをもっと知りたいな。」

「僕のこと？」

「うん、ライ君が好きなものとか、家族のこととか、キョウトにいた頃の話とか…私のこととかはよく話してたけど、ライ君の話ってあんまり聞かなかつたから聞いてみたいんだ。」

「わかった。あんまり面白い話じゃないかもしれないけど、今度聞いてくれると嬉しいな。」

「うん…あ、でもちよつとは面白く話せるよう努力はしてよね？」

「…善処するよ。」

僕の話か…何から話せばいいだろう？…もうすいせいや皆になら僕に流れている皇家の血について話してもいいと思う。

驚きはするかもしれないがすいせい達なら拒絶はしないだろうという何となくだが確信があった。

そんなことを考えているとミオさんから声をかけられた。

「ライ君、ウチたちのお願いも聞いてくれたりする？」

「ん？ああ、勿論だよ。」

「トワ達、ライ先輩が作ったお菓子食べたいです！あやめちゃんとかミオちゃんは食べたことがあるみたいですけどトワも食べてみたいです！」

「食堂で食べたやつだねえ、あれほんとに美味しかったからさあ……」

ミオさんとトワからはお菓子作りの要請が入った。

以前あやめやおかゆ達に提供したようなものであれば造作もない。構わないよ。生徒会のお茶菓子として定期的に作ってくる感じでもいいかな？」

「全然いいです！たつのしみ〜！」

「じゃあウチはお茶菓子里に合うお茶とか飲み物を探しておくよ。」

「ありがとうミオさん、楽しみだ。」

生徒会での楽しみみとしてミオさんが淹れてくれるお茶やコーヒーがそのうちの1つだ。どれも美味しく、かつ作業でひと息つく際の絶妙なタイミングでミオさんが提供してくれるからモチベーションアップにも繋がっている。

楽しみが1つ増えたことに嬉しさを覚えていると、隣に座っているすいせいが僕の腕を指でつついてきた。

「私もライ君のお菓子食べてみたい……」

少し寂しそうに言ってきたすいせいが可笑しく思ってしまった、優しく頷くことにした。

「今度不知建の皆で食べる用にケーキを作ろうと思ってたんだ。すいせい用に甘さ控えめなケーキも作る予定だよ。」

「!!……ありがとう……」

すいせいは嬉しそうに笑いながら、少しだけ僕との距離を詰めて座りなおした。

その様子を見ていた白上さんが僕にウィンクをしていた。

さつき白上さんと話したことを思い出して僕は白上さんに頷いた。

(多分、僕がすいせいに対して思っている感情は……)

「あつ！そろそろ劇が始まる時間だよ！」

ミオさんの声を聞いて我に振り返り時計を見ると劇の開始時間まであと10分近くになっていた。

「やばっ！そろそろ行こうよ！」

「そうだな、トワ、僕たちはそろそろ行ってくるよ！」

「はい！ライ先輩楽しんでくださいね！あつ、すいちちゃんちよつとちよつと。」

「ん？なにトワ？」

トワに挨拶を告げるとトワがすいせいに声をかけて耳打ちをしていた。

その様子を見ているとすいせいの顔が段々と赤く染まっていった。顔を赤くしたまますいせいはトワに頷いていた。

「すいせい？何かあったのか？」

「な、なんでもない！は、早くいこー！」

すいせいは何か焦った様子で体育館に向かって走っていった。

すいせいの様子に不思議に思いながらすいせいに着いて行った。

「すいちちゃん…応援してるからね？」

番外編 番外編

星街家の場合

「すいちちゃんもう朝だよ。」

「うーん…後10分だけ…」

平日の朝、お姉ちゃんに起こされる私。

いつもと何も変わらない日常だ。ただ、昨晚は少し夜更かしをしていたため、起きるのが億劫になってしまっている。

「もう、ライ君が朝ごはん準備してるんだから早く行ってあげなよー。」

「…わかったよ…」

渋々布団から抜け出し、眠い瞼を擦った。

リビングからいい匂いが漂ってきていて、徐々に意識が覚醒し始め、リビングに向けて足取りを進めた。

リビングに辿り着くと、キッチンで朝ごはんを準備してくれている大事な兄がいたので朝の挨拶をした。

「お兄ちゃんおはよう。」

「おはようすいせい、今日はいつもより少し早起きだね。」

星街ライ：星街家の長男で、私の兄であり、姉街の弟。

頭がよく、料理も上手で、かつこよくて、そして何より家族を大事にしてくれている…そんなお兄ちゃんが私は大好きだ。

友人からよく紹介をしてほしいと頼まれることがあるが、お兄ちゃんを誰かに渡してしまう気分になるのが嫌なので毎回断っているのはお兄ちゃんには内緒にしている。

「お姉ちゃんに何回も起こされたから仕方なくね。」

「姉さんに僕が頼んだからね。もうすぐ朝ごはんの準備が終わるから先に顔を洗っておいで。」

「はあい。」

お兄ちゃんに言われた通りに洗面所に顔を洗いに行くことにした。

冷たい水で顔を洗い、さっぱりした気分になり完全に目が覚めた。髪も少しボサボサになっていたので櫛で髪をとかし、お気に入りのリボンで髪をサイドアップで結んだ。

いつも通りの自分になれたことを確認し、リビングに戻るとテーブルに朝食の準備が終わっていた。

今日の朝食のメニューはトースト、スクランブルエッグ、ベーコン、スープ、デザートに苺が用意されていた。

「今日も美味しそうだねえ、いっただきまーす。」

トーストにバターを塗り、噛り付くとトーストとバターの風味が口に広がった。ベーコンはカリカリに焼かれており、スクランブルエッグも中身が半熟になっていて、とても美味しく感じられた。

「んー！今日もどれも美味しい!!」

「あははっ、すいせいは毎回美味しそうに食べてくれるから嬉しいよ。」

お兄ちゃんは既に朝ごはんを食べ終わっていたようで、食後のコーヒーを飲んでいた。

「ねえねえお兄ちゃん、今日夜ご飯ハンバーグ食べたい!」

「ハンバーグか、構わないが食材の買い出しに行かないとね。」

「やったあ！じゃあ私も買い物手伝うよ!」

お兄ちゃんは私の願いをいつも叶えてくれる。たまにお姉ちゃんからは甘えすぎって言われる時があるが、それでもお兄ちゃんは笑いながら許してくれる。

「遅れちゃう遅れちゃう。すいちちゃんライ君行ってきまーす!」

「お姉ちゃんいつてらっしやーい。」

「あつ姉さん、お弁当忘れてるよ!」

お姉ちゃんが慌てて家を出ようとしていたが、お兄ちゃんが作ってくれたお弁当を忘れていたようで、お兄ちゃんが玄関まで追いかけていった。

お弁当はお姉ちゃんとお兄ちゃんが交代で作ってくれており、2人とも凝ったお弁当を作ってくれているので、学校での密かな楽しみになっている。

今日はどんなお弁当かなあ…

朝食を食べ終え、学校の制服に着替えてお兄ちゃんと家を出た。
お兄ちゃんと学校が同じなので、ほとんど毎日一緒に登校している。

「それじゃあすいせい、ヘルメットは被ったかい？」

「OKだよ！いつもすみませんねえ…」

お兄ちゃんはバイクを持っており、学校にはバイクで登校している。

そのため私もバイクの後ろに乗せてもらって一緒に登校するのが毎日の楽しみになっている。

お兄ちゃんのバイクの準備ができたようで、まずお兄ちゃんがバイクに跨るのを確認した後に私がバイクの後ろに跨った。

バイクから落ちないようお兄ちゃんの腰をしっかりと掴んで出発する準備が完了した。

「よし！学校に向かって出発進行ー！」

「…はいはい。」

お兄ちゃんは苦笑しながらバイクを発進させた。

バイクは風を切り、どんどん他の車を追い越していく。

みこちや不知建のみんなとよく一緒に遊ぶゲームでも、車やバイクを運転するゲームで遊んだりしていて、ゲームにおいて速い乗り物はすごく爽快感があつて好きだが、やはり現実でのバイクの爽快感は何事にも代えられない。

「いやっほう！速い速ーい！」

「すいせい…落ちないように気を付けてくれよ？」

「ねえ…お兄ちゃん？」

「ん？なんだい？」

爽快感が出たことによりいつもよりテンションが上がっているた

めか、お兄ちゃんに自分の気持ちを伝えたくなっていた。

運転中だから声が届きにくいと思うので大きな声で伝えた。

「お兄ちゃんいつも優しくしてくれてありがとう…大好きだよ!!」

「…ああ、僕もすいせいのこと大好きだ。」

お兄ちゃんはフルフェイスのヘルメットをしているので顔がよく見えないが、おそらく顔が赤くなっていると思う。

お兄ちゃんの反応に満足した私はお兄ちゃんの背中に抱き着き、学校に到着するまで大人しくすることにした。

いつまでもお兄ちゃんとお姉ちゃんと家族で仲良くやっていけるといいな…

番外編2

あやめの場合

「うーん、仕事疲れた余。」

「お疲れ様、あやめ。」

生徒会での書類の処理が終わり、今日の仕事は終了した。

「ライ君も多い時間まで付き合ってくれてありがとうだ余。」

「どういたしまして、こういった書類の作業は嫌いじゃないから気にしなくていいよ。」

ライ君…生徒会にいるメンバーの中で一番の新人だけど、仕事が早く丁寧で、生徒からの人気も高く、先生達からの信頼も厚い。

余はまだ生徒会長として学校を引っ張って行くつもりだけど、ゆくゆくはライ君に副会長に就いてもらって、余の右腕として、生徒の模範として一緒に学園をもっと良くしていきたい。

「さて、周りも暗くなってきたし、そろそろ生徒会室を閉めて帰ろ…あれ…?」

余がライ君に声を掛けて席を立ち上がった瞬間に大きな眩暈を起こし、倒れそうになってしまった。

「あやめ!」

すぐさまライ君が駆け寄り、余が倒れる前に身体を受け止めてくれた。

「おとつとつと、ライ君ごめんね?」

「あやめ…最近飲んでないんじゃないか?」

「あはは…ライ君は全部お見通しだね…」

「最近生徒会での仕事が多かったし、その疲れも溜まっている影響かもね…」

ライ君が身体に触れているということもあり、余の身体が熱くなり、どんどん吸血の欲求が高まっているのが分かる。

「ライ君…いい?」

「ああ。」

この時間には誰も生徒会室に立ち寄る予定はないが、念のためドアにカギをかけた。

ライ君は制服の袖を捲り、手首を差し出してきた。

余は自分の爪でライ君の血管を少し引っ掻き、傷をつけた。

すると傷口から真っ赤な紅い血が溢れ出してきて、余は傷口に口を付けた。

溢れ出た血を飲み干していく。ライ君は優しく微笑みながら余の様子を見てくれている。

ライ君の血の味はとてもバターのように濃厚で、余が欲していた渴きを潤していく。

このまま飲み続けていたい、という感覚に襲われるが理性をなんとか抑えつける。

3分ほど飲み続けて、ようやく口を離し、最後に傷口を舐めた。

吸血鬼の唾には高い治癒力があり、ライ君の傷口はすぐに塞がれた。

「ふう……馳走さまでした。」

「お粗末様でした。これで足りそうかい？」

「うん、1週間休みがなくても問題なく動けそうだ余。」

ライ君の血を飲んでからは眩暈、身体の気怠さが消えていた。

これでしばらくの間は血は必要がなくても行動できる。

余の答えに満足したのか、ライ君は余の頭を撫でた。

何故か血を飲み終わった後はライ君は必ず頭を撫でてくる……

「もー、ライ君余を子供扱いしてない？」

「そんなことはないが……嫌だったかい？」

「……ううん。」

恥ずかしいが撫でられるのは心地が良い。ライ君は血を抜いた直後なので休息の意味を込めて毎回この時間を設けている。

余とライ君の歪な関係はまだしばらく続きそうだ…

すいせいの場合

「はあっ…はあっ…」

いけない…最近血を吸うのを我慢していたこともあつて眩暈と動悸が激しい…

身体が今すぐにも血を欲しているのが分かる…でも吸血鬼であることは皆に隠しているし、学園の中では人の目があるので、すぐには手に入らない…

…いや、1人だけ私の秘密を知っている人がいる…確か今日は不知建の部室に向かうと言っていたはず…

私は藁にもすがる思いで部室まで歩を進めた。

部室のドアの前に立つと、中に誰かがいる気配を感じた。

吸血鬼のため聴覚や嗅覚が人間よりも研ぎ澄まされており、誰が中にいるかも分かっている。

会いたい人が中にあることを確認し、ドアを開けた。

中には窓際の席に座って読書をしていて、ドアを開けた音でこちらに気づいたのか静かに振り返った。

「やあ、すいせい。」

皇ライ…不知建メンバーの中では一番の新人であり、私の後輩。そして唯一私の秘密を知っている男の子…

「やっほー…ライ君…」

息をするのもしんどいがライ君に挨拶を返した。

「すいせい？目が紅く…」

ライ君に言われるまで気が付かなかつたが、目が紅くなっているらしい。

でも今の私にはそんなことまで気にすることはできず、ライ君の座っている席の前まで進んだ。

「ライ君ごめん…私我慢できない!」

「!?!?!?!」

今の私は正常な判断ができない…ライ君が驚いているがもう止めることはできない。

私はライ君の肩を掴み椅子に座らせて、ライ君の膝の上に座り首の部分に少し爪で傷を付けて、傷口から溢れ出た血を飲み始めた。

ライ君を抱き寄せるような形で密着していて、ライ君の血の味と匂いが混じり合い思考がどんどん狂わされていく。

(もつと血が欲しい…ライ君が欲しい…ライ君の全てが欲しい…)

ライ君は血を吸われていて苦しいのか息が少し荒い…

「すいせい…ちよつと痛い…」

「ごめん、本当にごめん。」

ライ君に謝罪をするが吸血を止められない…

そんな私を落ち着かせるかのようにライ君が私の背中をさする。

落ち着かせる行為であるはずだが、今の私には逆効果で、そうしてくれることも快樂に替えられてしまう。

抱きしめる力が強くなり、さらに密着したところでライ君は私の耳元で囁いた。

「すいせい…君が望むなら僕の全部を君にあげるよ…」

その言葉で思考が真っ白になり、吸血を一瞬止めた。

ライ君の首元から口を離し、ライ君の顔を見つめた。

ライ君は私を真っすぐ見つめ微笑んでいて、首元から紅い血が流れている姿を見て私は身体が熱くなってくるのを感じた。

そのまま私はライ君の顔に私の顔を近づけて…

「!?!」

私はふと我に返り、部室の外に誰かが通る気配を感じた。

ライ君もそれに気づいたようで、息を殺していた。

普段であれば外に誰がいるかを把握できるが、今は焦っていることもあり感じ取ることができなかった。

ただその人物は一瞬部室前を立ち止まったただけであり、そのままどこかに行った。

居なくなっただけのことに対して安堵をしてライ君の方を振り返ると、少しぐったりしている様子であった。

そこで私はライ君に何をしてしまったのかを思い出し、顔が青ざめた。

「ライ君！本当にごめん！大丈夫!？」

私はとんでもないことをやらしてしまったことを実感し、すぐさま謝罪をした。

「ああ…もう少し血を抜かれたら危なかったかもしれないけど…」

すぐさまライ君の止血をするために首元を舐めて傷を塞いだ。

傷口はふさがったが血を抜きすぎたためかなり疲労しているようだ。

「ちよつと頭がクラクラする…すいせい悪いけど水を買ってきてくれないか？」

「うん…ちよつと待ってて!」

私は部室を飛び出し、自販機を探しに向かった。

「ライ君…飲める?」

「ああ、ありがとう。」

私は一応水を2本購入し、ライ君に渡した。

ライ君はペットボトルのキャップを開けてそのまま飲み始め、一気に一本を空にしていた。

「ふう…生き返ったよ。」

「よかった…ほんとにごめんね?」

「全然いいよ、すいせいの役に立ててよかった。」

ライ君は椅子から立ち上がろうとしたが、上手く立てないようだった。

「あはは、力がちよつと入らないや。」

乾いた笑いをしたライ君を見てるといたたまれない気持ちになつてしまい、ライ君にある提案をした。

「ライ君：私の血を飲む？」

「え？」

「ライ君から貰いすぎた血を返そうかと思つて…」

私はそう言いライ君に私の首元を近づけた。

「い、いや大丈夫だ。」

「？」

ライ君は私から顔を背けていたため不思議に思っていたが、ライ君をよく見ると顔が凄く赤くなつていた。

私はライ君の反応が面白く、揶揄いたくなくなってしまい、ライ君の耳元に囁いた。

「血を飲むだけなのに何考えてんの？…ライ君のえっち…」

「っ！も、もう帰る!!」

「あつ、ライ君ごめんってば！」

ライ君は無理して立ち上がり、部室から出ていこうとしていた。流星にまだ本調子ではないので、クラブハウスまで送ることにした。

部室を出る前にライ君に向かってお礼を伝えた。

「ライ君ありがとう、美味しかったよ♡」

ウインクして伝えたが、ライ君は不満そうだったので手を繋いであげた。

顔は見えないがちよつと嬉しそうな気がしたので私は満足した。

番外編3

生徒会の場合（あやめ視点）：

「もう、全然仕事が終わらない余お…」

現在、余達生徒会メンバーは学園祭に必要な報告書の作成に勤しんでいた。

「しよがないでしょー？学園祭が1週間後に迫っているのに、まだ書類作成が全然終わっていないんだから。」

隣に座って作業を進めている副会長のミオちゃんに咎められた。

「ミオ先輩…その通りなんですけど、終わる気配が全然ないですよ…」「やっぱ人手が全然足らないよねー。トワの隣の机に積み上げられる書類も片付けないといけないでしょ？」

机に項垂れてしまっている美化委員長のかなたちゃん、自身の隣の机に山積みされている書類を見て嘆くトワち。

「あつ、実はその書類の山はもう作成が終わっているやつなんだよね。」

「まじで!?この山積みのやつミオちゃんがやってくれたん？」

「ううん、ウチじゃないよ。」

「えっ?じゃあ誰がやってくれたんですか?」

「…実は分かんないんだよねえ…」

「えっ??」

ミオちゃんの発言に首を傾げる2人。

余がやったわけでもなくいったい誰が…?

「ねえ、何か知ってる?」

余はミオちゃんと反対の隣の席に向かって声を掛けた。

しかし、その席には誰もいなかった…

「あやめ?今ウチに話しかけた?」

「…いや、なんでもない余。」

ミオちゃんは余に自分が話しかけられたと思って不思議そうな顔をしていた。

…まただ、最近こうやって誰もいないはずの場所に話かけてしまう…
まるで誰かがそこにいるのが当たり前のように思えてしまつていて…

「さっきの話に戻すけどさ、実際のところ誰が書類を片付けてくれたんだろね？」

「うーん、生徒会の活動に興味がある人とかかな…？でも生徒会室に入るためにはウチらみたい-IDカードに権限がないと入室できないはずなんだけどねえ…」

「見えない人…なんだか透明人間か妖精みたいですね？」

ミオちゃん達が先程の話で盛り上がりつつあった。

余も書類を片付けてくれた人物は気になる。書類にざっと目を通したが計算ミスなどの不備は見当たらず、完璧な書類となっていた。

現在生徒会は人手が足りていない。これだけの書類が作れる人材は是非とも確保…ではなかった、勧誘をしてきたい。

「じゃあさ、この書類作成した生徒を皆で探してみよう余！そしてあわよくばその人を生徒会に入れちゃおう！」

「確かに人手も足りてないし、この機会に新しいメンバーを入れちゃうのもありかもねえ。」

「さんせーい!!」

生徒会メンバー全員から同意の声が上がった。

「ね?○○もいいと思うよね?」

余はまた隣の誰もいない席に向かって声を掛けた。

「…?」

「あやめ?」

「…あはは、余疲れちゃってるみたいだ余…」

何故だろう…

何で余は誰もいない席に声をかけちゃうんだろう…

そこには誰もいないはずなのに。

余はなにも知らないはずなのに。

痛い。

胸のあたりがとても痛い。
失ってはいけないものを失ってしまった気がして…

すいせいの場合…

「うわあ！また負けたにえ…」

「へっへーん、すいちゃんの勝ちく。」

私は自分の部屋でみこちとテトリスで遊んでいる。

「すいちゃん強すぎるんだにえ！もうちょよつと手加減してよ！」

現在の戦績は10戦10勝で私の圧勝（当たり前だが）となっていた。
た。

一応ゲーム開始から20秒間は私はコントローラーに何も触らない、というハンデを付けているが、それでもみこちに勝つのは造作もないことであった。

「じゃあ次何のハンデ付ける？30秒縛りとTスピン縛り付けようか？」

「一旦休憩！頭使いすぎて疲れたにえ！」

そう言うともみこちは後ろに倒れこんだ。

全く…これからが勝負だというのにもう疲れちゃったのか。

「あれ？すいちゃんまたぬいぐるみ増えたの？」

倒れこんだみこちが私のベッドの方を見ながらそう言った。

「え？どの子のこと？」

「ほら、あの銀色の…」

みこちが指を差したのは銀色の優しい目をしている狼のぬいぐるみであった。

「あー、あの子ね…あれ？あの子いつからいるんだっけ…」

「え…覚えてないの？」

私は立ち上がってぬいぐるみの元まで行き、狼のぬいぐるみを抱きかかえた。

私が所有しているぬいぐるみは基本可愛い動物がメインになっているが、この子は私にしては珍しいかっこいい子だ。

「うーん、最近からいるような、ずっといるような…」

他の子はいっ瞬購入したか、誰から貰ったかは覚えているが、この子だけは曖昧だった。

確か誰かから貰ったというのは何となく覚えている…

「こんな子を忘れるなんてかわいそうだにえ…」

「し、仕方ないじゃん。分からないものは分かんないんだもん…」

みこちに指摘されるとは思わなかったが、確かに自分でも覚えていないのが不思議だった。

改めてこの子を真つすぐ見つめると、見た目はかっこいいが、狼にしては目がとても優しい。

この子に似た目をしている人をどこかで見たことがあるような…

(ああ、すいせいがそれで喜んでくれるなら〇も嬉しい。)

「えっ?」

「にえ?」

「みこち今何か言った?」

「ううん、何も言っていないよ?」

急に誰かの声が聞こえた気がした。

聞いたことがないはずなのに懐かしい声。

優しく包み込んでくれるような暖かい声。

「すいちゃん!」

「ん?何?」

みこちが急に驚いたような大きな声を上げた。みこちの顔を見るとこちらを心配しているような顔をしている。

「すいちゃんどうしたの…?どこか体調悪い?」

「え?何で?」

「だって…すいちゃん泣いてるから…」

「…え?」

みこちに言われるまで気がつかなかったが、いつの間にか私の目から涙が零れていた。

「あれ？お、おかしいな…どう…して」

手で涙をぬぐつてもどんどん涙が溢れて狼のぬいぐるみを濡らしてしまった。

でも、ぬいぐるみは泣いてもいいというようなにこちらを見つめている気がして、

オロオロしているみこちが背中をさすつてくれているのも相俟つて、

私はしばらくの間泣き崩れてしまった…

番外編4

行政特区日本が設立されて1か月。

ブリタニアと日本の戦いは収まりつつあった。

しかし、行政特区に賛同しないブリタニアの貴族達やテロリスト達の反乱は未だ起きており、その反乱の鎮圧を行っているのが僕ら黒の騎士団だ。

僕は行政特区日本設立時にギアスによって操られたユーフェミアに撃たれて重傷を負い、無理やり僕のギアスで命令を上書きした後に出血とギアス使用時の後遺症で意識を失っていた。そのまましばらくの間入院をしていたが、僕は先週退院をした。

本来であれば今週末までは入院している予定ではあったが、同じ騎士団員のカレンとすいせいとすいせいが僕の入院していた騎士団員用に設立された病院に何度も見舞いに来て、その度何故か喧嘩をしていたため、院内の人達に迷惑が掛かってしまうと早い早期退院することにした。

この話をゼロ：ルルーシュとC・C・に話すと、ルルーシュは頭を抱え、C・C・はお腹を抱えて笑っていた。

僕たち3人は戦場にいる間は互いに抜群の連携ができており、他の追従を許さない勢いで敵を薙ぎ払っていた。騎士団内で僕は作戦補佐、すいせいが戦闘隊長、カレンがゼロ直属の零番隊長、というそれぞれ騎士団内で重要なポジションに就いている。

しかし、カレンとすいせいはプライベートのことなどでは馬が合わないようで喧嘩をしているところをよく見かける。

ただ、お互いが嫌いというわけではないようで、学園内でも騎士団内でもよく一緒に行動している。

そんな2人だが今日は珍しく騎士団内で言い争いをしていて…

「だからあそこは私の紅蓮で先行して決着をつけた方が早かったん

だってばー！」

「そしたら私の星影（すいせい専用KMF）の出番がなくなっちゃやうじゃんー！」

「出番は関係ないでしょうが！早めに決着をつけちゃう方が被害も少なくて済むでしょー！」

「そ、それは…でもそれを言ったら前の戦闘の時だって私が先行して終わらせたなら、カレンが敵を残しておけ、って怒ってたじゃんー！」

「うっ…い、今はその話は関係ないでしょー！」

「ぐぬぬ…」

『全く、あの2人は何を言い争っているんだ…』

格納庫をゼロと共に通りがけると、カレンとすいせいが正面から言い争っているのを見かけて、その様子を見たゼロがため息をついた。

「先日のテロリスト鎮圧の際の結果に不満があつたらしくて…朝からあんな様子なんだ。」

『あれを他の団員が見かけると心象的にマイナスだな…ライ、何とかできないか?』

「僕がか?」

「放っておけ。あのままにしておく方が面白い。」

どこからともなく綺麗な黄緑色の長髪の魔女であるC・C.が現れた。

彼女はあの2人の様子を見ながらとても楽しそうに笑っていた。

「でも…」

「あいつらの様子は私が見ておくさ。それにお前たちは今から騎士団内で打ち合わせがあるのだろうか?そっちを優先しておけ。」

『確かに…あと10分程で会議が始まるな。魔女の言うことにも一理ある。』

「じゃあC・C.、任せてもいいかい?」

「ああ、さっさと行ってこい。」

C・C.が手をヒラヒラ振っているのを見届けてから僕とゼロは会議室に向かうことにした。

少し不安が残るがC・C.に任せておこう…

すいせい side

「ああ、もう！埒が明かない！」

「それはごっちの台詞よ！」

私とカレンは何十分も言い争いを続けたが、どちらも折れる気配がなかった。

別にカレンのことは嫌いではない。むしろ騎士団の中ではライ君と同じくらい信頼しているし、KMFの操縦技術や体術のレベルの高さには素直に尊敬している。

でも私にも譲れないものがある。今騎士団の中で私は戦闘隊長のポジションに就いているが、本当は憧れであるライ君の作戦補佐のポジションを狙っている。

そのためには自身の作戦で成果を上げて、ゼロや幹部達に認めてもらわないといけない。

最初は作戦や戦略の立て方は右も左も分からなかったが、今は一人でも考えることができる。

最近はずゼロに直談判に行き、この作戦でいかなければ星影で暴れまくる、と脅してみようかと考えはしたが、ライ君に嫌われたくないので流石に辞めた。

ライ君は私が立てた戦略の考え方を褒めてくれるが、彼やゼロの戦略に比べるとまだまだなので、彼らの作戦の戦闘の記録や映像を確認して、戦略や考え方をどんどん盗んで自分のものにしていく。

1日でも早くライ君の隣に立てるようにしたい。

彼の負担を減らしてあげられるようにしたい。

カレンも私と同じ気持ちを持っているので、ライバルのような関係になっっているが、やはりカレンには負けたくない。

その想いが強い所為もあってこのような言い争いになってしまったが、正直収まりようがない。

どう収拾を付けようかとは思っているが…

「お前たちは何をやっているんだ？」

「え？」

「ん？」

私たちの間に割り込んできた声に反応すると見知った人物がいた。

「C・C・じゃない。何か用？」

「お前たちの言い争いが目に余るといふ報告が上がってな。いつまで言い争っている。」

「だってすいせい（カレン）が！」

「分かった分かった。静かにしろ。」

C・C・はうんざりそうな顔をしていた。

正直私とカレンはC・C・が苦手だ。

上から目線な態度が気に入らないし、かなりわがままな性格というのがあるが…

何故かC・C・はライ君の保護者面をよくする。騎士団内で行動しているのをよく見かけるし、租界でも一緒にいるということをライ君から聞いている。

やはり好きな人に自分以外の女の影があるのは何かモヤモヤしてしまう…

「言い争いの原因は聞こえてきたから分かっている、前回の作戦の件だろ？ だったらあれで決着をつけてこい。」

C・C・はそう言いながら格納庫の奥を指差した。

それは誰も乗っていない色々な配線が繋がれたKMFの2人分のコクピットだった。

「あれは…シミュレーションマシン？」

「あれで思いつきり戦え。シミュレーションで戦う分なら誰の迷惑にもならないだろ。」

「私はいいわすいせい。」

そう言うカレンは自信ありげに挑発的な顔をしてきた。

ここで引いたら女ではない…なら答えは一つ。

「私もいいよ。ボッコボコにしてあげるから。」

「後悔しないことね！」

「勝負内容は攻撃を一度でも当てた方が勝ち。これを2本先取だ。」

「OK!!」

カレンがコクピットに向かって走り出したので私も追いかけた。

「ねえすいせい、1つ賭けをしない?」

「賭け?」

カレンから賭け事を持ち出されるのは珍しい。何をかけるつもりだろ…?」

「勝った方がライとデートする権利を手に入れる、っていうのはどう?」

「!乗ったあ!!」

絶対に負けられない戦いが始まろうしていた…

「くっ…」

「ここまでやって引き分け…?」

結果は1本目がカレン、2本目が私の勝ち。

決着をつけるための3本目が長引き、お互いのKMFのエネルギーファイラーが同時に切れるという引き分けに終わってしまった。

「ちよつと休憩…」

「私も…汗かきまくっちゃった…」

シミュレーションとはいえ、KMFのコクピット内ということもあり熱がこもってしまい、体力的にも精神的にもお互いの限界が来た。

疲労感が凄いが何故かスッキリした気分になった。あれだけ全力でお互いにぶつかっていたからもうモヤモヤもない。

「賭け事も今回はなしだね…」

「正直3戦目の途中からそのことが頭から抜けていたわ…」

コクピットから出て、カレンと汗を流すためにシャワー室に向かう

ことにした。

「カレン…ごめんね？」

「…私もごめん。ちよつとムキになりすぎちゃった。」

シャワー室に向かう途中で今回のことについてお互いに謝罪した。

今までもぶつかり合った後は必ず謝罪はしていた。こうやって私たちは仲を深めていつている。

「さつ、シャワー浴びたら租界でお昼ご飯食べに行きましょう！」

「いいね！すいちゃん焼肉がいい！」

「おつ、2人とも仲直りは終わったか？」

2人でご飯を食べに行くことに決めていると、黒の騎士団の副指令の扇さんとすれ違った。

「あつ、扇さん。」

「あれ？私たちの言い争いの件知ってたの？」

「ああ、会議前ライから話を聞いてな。」

「えつ、ライ君も知ってたの…？」

「会議が終わるまで心配していたぞ？会議が終わった後C・C・がライに無事に上手くいったと聞かされて安心していたが。その後2人で租界に行っていたぞ。」

「そつか…ライに心配かけさせちゃってたんだ…えつ？」

「ん？」

「扇さん…ライ君誰と租界に行っただって…？」

「誰って…C・C・とだが…」

一瞬私とカレンの思考が止まった。

「…あの魔女おお!!」

C. C. side

「C. C.、よくこんなお店知っていたね？」

「ここは神楽耶から教えてもらった行きつけの茶屋だな。お前が好きな和菓子を多く取り揃えてある。」

「すごく楽しみだよ。連れてきてくれてありがとう。」

「礼には及ばん。お前の退院祝いを兼ねて私からの祝いだ。」

私はライを会議が終わった後この茶屋に連れ出した。

ここは会員制の茶屋で誰でも自由に入れる場所ではないため、仮にあの小娘共がここを特定できたとしても中に入ることはできない。

「でも意外だな、C. C. がピザ以外の食べ物に興味を示すなんて。」

「お前の影響かもな…」

「？」

ライは不思議そうに首を傾げていた。

その様子が何故か面白く笑ってしまった。

「ライ、お前といると退屈しないよ。」

「それは…よかったのかな？」

「もちろん、お前はルルーシュと違って、私に付き合ってくれるしな。」

「僕もC. C. と一緒にいるのは楽しいよ。」

ライの言葉に私は満足した。

テーブルに肘をつき頬杖をしながらライを見つめた。

行政特区でこいつを失うことにならなくてよかった。

もしライを失っていたことを考えてしまうと、騎士団員やルルーシュ、カレンやすいせいなどもどうなってしまっていたか分からない。いい。

魔女として数百年生きてきたが、こいつより面白い人間は見かけたことがない。

カレンとすいせいがライのことを好いているのは知っているが、渡してしまうのはまだ惜しい。

「さあ、和菓子が運ばれてきたぞ？」

「おお…」

和菓子が好物なライは目を輝かせていた。

この表情を知るものはまだ少ない。

恐らくあの小娘たちも知らないであろう。

「まだあいつらには早いかな…」

「ん？何がだい？」

「…なんでもないさ。」

私はライに向かって魔女らしく悪戯っぽく微笑んで見せた。

（いつかライが私の願いを聞いた時、その願いを叶えてくれるだろうか…いや、このことは今は忘れておこう…）

番外編5

「…うつ…」

「あつ、ライ君目覚めた？」

「…おかゆ？…これは!？」

僕の愛しい人がベッドの上で目を覚ました。

彼は今の状況にとても驚いている。

何故なら彼はベッドの上で両手と両足を錠で拘束されているからだ。

そして服は囚人服のようなものを身に着けている。

…まあ僕が全部やったんだけど♡

「うふふ、ライ君凄く似合っているよ?」

「おかゆ…これは何の遊びだい?」

「これはね、遊びなんかじゃないんだよ?」

「何?」

「あのねライ君、驚かないで聞いてほしいんだけど…」

僕はそう言いながらライ君の目を見つめた。

ライ君は僕の顔を不安そうに見つめている。

普段はかつこいいけど、無表情の方が多い彼がこんな顔を僕だけに向けているという事実には僕は全身がゾクゾクするような感覚に襲われた。

「ライ君はこれから僕と一緒に暮らすことになるんだよ!」

「……は?」

まただ。ポカンとしている彼の表情。

普段見せない表情を僕だけに見せているという状況に、興奮に近いものを感じた。

「どういうことだい…?」

「えつとね、ライ君はこれから僕以外の人とは誰も会わなくていいんだよ。僕がライ君の身の回りの面倒を全部見てあげるから。」

「…?」

ライ君はまだ理解ができていないようだった。

まあ無理もないかな？ 僕が勝手にこの部屋に連れてきちゃったわけだし。

ライ君はキョロキョロ周りを見渡していた。

多分自分がどこにいるかを分析しているんだろうなあ。

僕はライ君の様子を見ながら、ベッドの横のテーブルの椅子に腰を掛けた。

「おかゆ、ここはいつたいたいどこなんだ？ 僕は確かおかゆの家に遊びに来ていたはずなんだが…」

「ここは僕の家秘密の部屋だよ。友達シオンの魔法で作った魔法で作った特注品でね、僕の許可が無いと誰も入れないし、見つけられない仕組みになってるんだあ。あつ、婆ちゃんもこの部屋のこと知らないんだよ。」

以前シオンを口説いてこの部屋を作らせたのは正解だった。

おかげで好きな人を手に入れることができたのだから。

：最近ライ君の周りに可愛い女の子が増えてしまった。

すいちゃん：フレア：あやめちゃん：数えだしたらきりが無い。

皆のことはもちろん大好きだし、友達だと思っている。

でも：ライ君のことは皆のこと以上に好きになってしまった。

学園での授業中。

ライ君とスバルちゃんの3人で租界に遊びに行っているとき。

お互いの家で遊んでいるとき。

どんな時でも彼の姿を目に追ってしまおう。

最初はライ君と一緒にいることができればそれでいいと思っただけだ…

でも最近はそのだけでは満たされず、彼の私物にも手を出してしまっていた。

ライ君の飲みかけのペットボトル：普段使っているハンカチ…

頭ではダメだと分かっているけど、もう理性を抑えることができなくなってきた。

(アア：ライクンガホシクナツチャツタナア…)

そう思ってしまった時には行動に移してしまっていて、今の状況に至っている。

ライ君に視線を移すと、鎖を外そうともがいていた。

「ライ君？どうして鎖を外そうとしているの？」

「…僕はここから出たい。」

「なんで？僕とずーっと一緒にここにいるのは嫌なの？」

「おかゆと一緒にいるのが嫌なわけではないけど、ここにずっといるのは無理だ。生徒会の仕事や、不知建の皆と約束している用事もあるし…」

「……」

ライ君の答えを聞いた僕は無言でベッドで仰向けになっている彼のお腹の上に跨った。

ライ君は僕の動きを観察するようにじっと見ている。

「まあさつきも言ったようにここからは僕の許可が無いと出れないからねー？それでも皆に会いに行こうとするの？」

「ああ…」

「ふーん…」

ライ君の考えは理解できた。

僕は右手をライ君の胸の上に優しく置いた。

ドクン…ドクン…とライ君の心臓の音が掌に伝わってくる。

「うふふ…ライ君心臓の音早いね？」

「おかゆ…くすぐりたい…」

僕はそのまま右手を彼の胸からなぞるように首元、鎖骨に移動させた。

鎖骨の窪みの部分に手が辿り着いてから一瞬動きを止めて、僕は猫特有の鋭い右手の5本の爪を、

「おかゆ？何を…ぐっ!?!」

ゆっくりと突き刺した。

突き刺した個所から赤い液体が滲み出てきている。

常人なら叫ばずにはいられないであろう痛みだけど、ライ君は必死に声を上げず、痛みに耐えていた。

このライ君も初めて見た。

痛みに必死に耐えようとしているライ君もかっこいいなあ。

僕は爪を引き抜き、付着した血を舐めとった。

彼の一部を身体に取り入れたことにより僕の興奮のボルテージが高まってしまった。

「どうライ君？痛い？」

「…おかゆ…どうして…？」

ライ君の目からは恐れや怯え、悲しげな感情が感じられた。

「安心して？ライ君がちゃんとお風呂の言うことを守って、ここで暮らしてくれるならもう痛いことや苦しいことはしないから。むしろ良いことしかないからね？」

「僕は…」

「まあ僕以外の人とは連絡は取れないし、僕と一緒にやないと外にも出れないけど、ご飯も僕が用意するし、お風呂も入れてあげるし、あつ、僕がいない間はたまにやんがいるから寂しくないよね？」

僕は微笑みながらライ君に話しかけた。

ライ君から返答がなかったから、僕は何も声に出さずゆっくりとライ君の首元に手を伸ばした。

「やめ…」

首元に少し触れただけだけど、ライ君の身体はびくりと反応していた。

(さっきの痛みを思い出しちゃったのかな？)

人間は怖い出来事などを体験してしまうと、それがトラウマに繋がってしまう時がある。

恐らく反射的に身体が反応してしまったのだろう。

僕はその姿が愛おしくなってしまう、ライ君の身体を優しく抱きしめた。

「大丈夫、怖くないよ。僕がずっと傍にいるからね？」

「おかゆ…」

先程の悲しげな表情から、何かに縋るような表情に変わっていた。今のライ君は表情がコロコロ変わっていく。

どの表情も今までに見せたことがないけれど、どれも魅力的だ。僕はライ君を安心させるように、彼の耳元に顔を近づけて優しく囁いた。

「ライ君、大好きだよ？」

まずはライ君にこの生活に慣れてもらわないとね。

何をしてあげようかな…

僕は部屋の壁に掛けてある鏡に一瞬目を移した。

そこには、目を不死鳥のような紅い色を宿した僕の姿があった…

番外編 6

「むう…」

私、星街すいせいには姉兄が2人いる。

1人は姉である姉街。もう1人は兄である星街ライ。

2人とも妹である私に凄く優しいし、困ったときは助けてくれたり、相談に乗ってくれる自慢の姉兄だ。

2人には何も不満は無いけれど…いや、無かったというのが正しいのかもしれない。

最近お兄ちゃんのことですっかり不満ができてしまったのだ。

今私はその不満ができた原因のお兄ちゃん部屋のベッドでベッドに飾っていた銀色の狼のぬいぐるみを抱えて座っている。

部屋はしっかりと整理整頓されており、几帳面なお兄ちゃん性格を表した部屋だ。

ベッドに座っていた私はぬいぐるみを抱えたまま、そのまま後ろに倒れこんだ。

ベッドにはお兄ちゃんの残り香がかすかにして少し幸せな気分になった。

でも、部屋の主であるお兄ちゃんはいない。

倒れこんで見えるのは白い天井だけ。

「お兄ちゃん…何でアルバイト始めちゃったんだろう…?」

静かな部屋に私の独り言が響いた…

1か月ほど前からお兄ちゃんはアルバイトを始めた。

お兄ちゃんには私にはアルバイトを始めたことを教えてくれなかったが、お姉ちゃんが昨日お兄ちゃんのことについて口を滑らせたから問い詰めた。

何でお兄ちゃんがアルバイトを始めたのかお姉ちゃんのぬいぐる

みを人質にして問いただしてみたが、それだけは言えないと涙ぐみながらお姉ちゃんは口を閉ざした。

お姉ちゃんが言うにはお兄ちゃんは駅近くの喫茶店で働いているらしい。

それを聞いた途端その店に突撃をしようと思ったが、流石にお兄ちゃんの邪魔をするのは不味いとお姉ちゃんに止められた。

確かに頑張っているお兄ちゃんの邪魔をするのはよくない…

でも、すいちゃんとお兄ちゃんが一緒に過ごす時間が減るのもよくない…

というかそもそもお兄ちゃんは何でアルバイトを始めたのだろうか？

お兄ちゃんは別に浪費癖があるわけでもなく、むしろ節約家の方が性に合っていると思う。

お金に困ったなんて話は一度も聞いたことないし、お姉ちゃん曰く、お小遣いはともかくお年玉にもほとんど手を付けていないようだ。

(お兄ちゃんがアルバイトをする理由…お金…？社会経験を積むため…？趣味…？)

お金はともかく後者の2つはあり得るかも…

お兄ちゃん真面目だし独立するための社会経験としてやっているのも考えられる。

まあ、お兄ちゃんが私から離れて一人暮らしするのは許さないけど。

お兄ちゃんの趣味の中に料理があるから喫茶店で働こうとするのは何となく分かる。

それにお兄ちゃんは大学も今の時点で推薦での合格が決まっているから時間にも余裕があるみたいだし、趣味に費やそうとしているのかもしれない。

(有力候補は趣味のためかな…？後は…友達で紹介とか？…ま、まさか!?)

私はある考えに思い至り、お兄ちゃんのベッドから飛び起きた。

「お兄ちゃん…まさか彼女ができたんじや…」

「…というわけなんだけど皆どう思う?」

翌日、私は不知建の皆を集めて相談をすることにした。

お兄ちゃんは不知建には所属していないが、メンバーが家に来ることもあつて姉街同様皆と仲が良い。

「なるほどねえ…あのライ先輩について…」

ふーたんが感慨深そうに呟いた。

「ていうか今までライ先輩にそんな噂が立たなかったのが不思議なんだにえ。」

「そりやそうだよ。そんなことがあつたらすいちゃん何しちゃうかわかんないもん。」

「すいちゃん目がマジになつてて怖いよ…」

「団長もライ先輩の彼女の話聞いたことないけど…すいちゃんその後ライ先輩にバイトの話とか聞かなかつたの?」

「んー、聞いてみたんだけど姉街と同じようなことしか答えてくれなくてさー。バイト先の場所とかは教えてくれたんだけど、バイトする理由だけ『…内緒だ。』って教えてくれなかつたんだよね。」

「まあすいちゃんも兄離れするいい機会なんじゃねえの? いつつもライ先輩にべつたりだと彼女の1人や2人もできやしな…痛い痛い! すいちゃん痛いにえ!」

変なことを言つたみこちの頬を抓つた。

大切な家族の心配をして何がいけないんだ。

「はいはい、すいちゃんやめてあげてねー…じゃあライ先輩のバイト先の様子を覗いてみる? あたしも気になつて来たし。」

ふーたんが良い提案をしてくれた。

確かに直接この目で見た方が、お兄ちゃんが何で秘密にしているか手っ取り早く分かるかもしれない。

「ポルカも見てみたいーい！」

「団長もー。」

「みこもー、お腹空いたし喫茶店行ってみたいにえ。」

全員の意見が一致した。

「よし、不知火建設出動ー！」

「「「おーっ!!」」」

お兄ちゃんとお姉ちゃんから教えてもらった喫茶店の名前は「地獄屋」というちよつと変わった名前前の和風の喫茶店だ。

駅近くにあるということだけ聞いていたから探すのに時間がかかるかと思っただけ、不知建皆で探していたこともあり、あっさりが見つかった。

店の外観は、The 喫茶店、というくらい普通だ。店の前にはちゃんと営業中と書かれた看板が立てかけており、営業中なのは間違いない。

駅近くであるはずなのに騒音が聞こえない位置であるため立地としては最高かもしれない。

「よし…皆、行くよ？」

私は店のドアノブに手をかけて皆の反応を伺った。

皆は声を出さず私の目を見て力強く頷いてくれた。

ドアを開ける前に一呼吸だけおいて、意を決しドアを開いた。

カランコロン、とドアベルが店内に鳴り響き、店内に足を踏み入れると珈琲の良い匂いが漂ってきた。

(凄く静かで落ち着く…お兄ちゃんが好きそうなお店…)

そんなことを頭で考えていると、店内のカウンター席を掃除をしている男性が目に入った。

白いシャツに黒いズボン、そして黒いエプロンを身に着けているその男性はたった今私が頭で思い浮かべていた人。

「いらっしやいませ。つて…すいせい?」

そう、星街ライだった。

「…お兄ちゃん!」

「す、すいせい!」

私はお兄ちゃんを呼びながら抱き着いた。

お兄ちゃんはいきなりのもので驚いていたがしつかりと受け止めてくれた。

自分でも分からないが何故か抱き着きたくなってしまった。

お兄ちゃんの胸からお兄ちゃん匂いと珈琲の香りが私の鼻腔いっぱい広まった。

「すいせい、どうしてここに?」

お兄ちゃんは不思議そうな表情を浮かべていた。

多分、私がおここに来るのは予想してなかったんだと思う。

「ライ先輩ご無沙汰してます。」

ふーたんがお兄ちゃんに声を掛けた。

「フレアも?…というか不知建の皆?」

お兄ちゃんは不知建の皆がいることに驚いていた。

「なるほど…すいせいが連れて来たんだね?」

流石はお兄ちゃん。理解が早くて助かる。

お兄ちゃんは仕方がない、とため息をつきつつ私の頭を撫でてくれた。

「すいちちゃんからライ先輩がバイトを始めたって聞いて、気になって皆で来ちゃいました!」

「それは構わないんだけど…今は仕事だから「ライ君お客さん来たん?…つてえらい多く来たなあ。」あつ、店長。」

お兄ちゃんの言葉を遮るように店の奥のテーブルから声がした。

声がる方に振り返ると、そこには片肘をテーブルに付けて頬杖をしながら自身の綺麗な小豆色の髪の毛を弄び、こちらを楽しそうにニコニコと笑顔浮かべている女性がいた。

メイド服のような割烹着を着て、耳は犬や狼を連想させるような耳で、瞳は珍しく左が黄色、右が紅色と所謂オッドアイだった。

とりあえず私たちが彼女を見た感想は、

「美人だ……」

「あら、お上手やねえ。」

私たちの感想に気を良くしたのか、お兄ちゃんに店長と呼ばれていた彼女はさらにニコニコと笑っていた。

「皆ライ君のお知り合いなん？」

「はい、学校の後輩と……僕の妹です。」

お兄ちゃんは不知建のメンバーと私を店長さんに紹介をしてくれた。

「ほーん、ライ君の妹はんかあ、どれどれ……」

店長さんは耳をびよこびよこ動かしながら私のことをじーっと見てきた。

「あ、あの……？」

「あつ、かんにんな？あたしは戌亥とこ。この地獄屋の店長をやらせてもらつとるよ。それにしても……妹はん、ライ君に似て別嬪さんやなあ。」

「みこ達は店長さんもめちやくちや美人だったことに驚いたにえ……」

「さあさあライ君、せつかくのお客様なんやからお席に案内してあげて。」

「はい店長。」

店長さんからの指示にお兄ちゃんは笑顔で答えていた。

「もうライ君、いつも通りにとこさんって呼んでくれていいんよ？」

「今は仕事中なので……」

「相変わらず真面目さんやなあ。」

「じゃあ皆、お冷とメニュー表を持ってくるから、奥のテーブル席に座っててくれるかい？」

「はいはい……」

お兄ちゃんに席を誘導された私たちは指定の席に移動した。注文を一通り終えると、お兄ちゃんはすぐさままた厨房へ姿を消した。

皆はお兄ちゃんのことを待っている間雑談を始めたが、私は別で考え事を始めてしまった。

(お兄ちゃんは至って普通な様子だけど…結局バイトを始めた理由ってなんだろう…?)

特にお兄ちゃんに変わった様子はない。いつも通りのお兄ちゃん。

店長さんと仲は良いみたいだけど、別に付き合っている様子とかは見受けられない。

ずつとお兄ちゃんと店長さんの様子を見てみると、それに気づいた店長さんが首を傾げながらこちらに近づいてきた。

「ん?どうしたんライ君の妹はん、あたしの顔に何か付いとる?」

「あ、いえ…」

「すいちゃん、店長さんならあのことを知ってるんじゃない?」

隣に座っていたふーたんから提案があった。

確かに、ここでの面接を店長さんがやっているなら知っているかもしれない。

「あのこと?」

「はい、実は…」

私は店長さんにここにやって来た理由を説明した。

店長さんはオッドアイの瞳を輝かせながら、私の隣に座って終始興味深そうに頷きながら聞いてくれた。

「なるほどなあ、ライ君がアルバイトを始めた理由…確かに面接をした時にあたしは聞かせてもらったよ。」

「ほんとですか!?何でお兄ちゃんは…」

「そやねえ…あたしが教えてもいいんやけど、ライ君に直接聞いてみたらいいんやない?」

「でも、この前聞いた時は教えてくれなくて…」

「ふふ、安心してええよ?ライ君と仕事の合間によくお喋りするんやけど、よく家族のこと…つまり妹はんのことを話したりしとるんよ。」

「お兄ちゃんが?」

何を話してるんだろ…？

自分がいないところでそんな話をされていると思うと少し恥ずかしい…

「優しいお姉さん、可愛い妹はんのこと、まあほとんどライ君の自慢話みたいになつとるけど、家族のことを話しているライ君は本当に楽しそうにしてるんよ…そんなライ君やったら可愛い妹はんのお願いにちやーんと答えてくれると思うけどな？」

ケルベロスは嘘をつかへん、と店長さんは話の最後にウィンクをした。

つてか店長さんケルベロスだったんだ…てつきり犬か狼かと…

「やっぱ兄妹だけあつて話すことも似てくるんじゃねえ。」

「すいちゃんもライ先輩だけじゃなくて何だかんだ姉街のこともよく話すもんねー。」

「みこも姉街と話してる時、すいちゃんとライ先輩の話をよくしてるの思い出したにえ。」

…続々とノエル達不知建メンバーからも暴露が行われた。

(まじで恥ずかしい…！)

家族で同じことをしているのを知られて、皆がニヤニヤした顔でこつちを覗いてくるのを見て私の顔が赤くなつてくるのを感じた。

「でも、兄妹でそこまで仲が良いのも羨ましいよね。多分学園内でもすいちゃんの兄妹ってトップレベルで仲が良いと思うし。」

ふーたんが先程の店長さんみたいに肘をテーブルに付けて頬杖をしながら言った。

「確かに…兄弟がいてもいつつも喧嘩するつて話もよく聞くし…すいちゃん達つて喧嘩はしないの？」

「喧嘩か…姉街とたまにするけど、お兄ちゃんとはないかも…注意とかされる時はあるけど怒られたことはないし…」

「ライ先輩が怒ってる姿とか想像できないにえ。…でも一番怒らせてはいけない人だと思うにえ…」

自分の今までの人生の記憶を辿ったがお兄ちゃんと喧嘩した記憶は全くない。多分お兄ちゃんとお姉ちゃんがしてるのも見かけたこ

ともない。

私が我儘を言ったとしても笑って許してくれるし、お姉ちゃんが買出しに行く時にお兄ちゃんが家にいる場合はお姉ちゃんの荷物を持ったために一緒に出掛けている。

お姉ちゃんと喧嘩した時だっていつも仲裁に入ってくれて、すぐ仲直りをしやすい場を作ってくれる。

何事においても私たちのことを優先してくれる、多分それは私達兄妹…いや家族を、

「それだけ大事に想ってくれてるってことやね…」
「…うん。」

改めてお兄ちゃんの愛情を実感して先程まで感じていた恥ずかしさは消えて、胸が暖かくなった。

「店長さん…いや、とこちゃん、やっぱりお兄ちゃんが自分から話してくれるのを待ってみるね。」

「そっかそっか、まあライ君は隠しっぱなし、みたいなことはしないやろうけど…あたしからもライ君に促してみるな?」

「うん!」

そんなこんなで話をしていると、お兄ちゃんが注文した品を運んできてくれた。

「皆お待ち、注文のクリームソーダと珈琲、あとクッキーとプリンにたい焼きだよ。」

「たい焼き…みこの!!」

「うわあ、どれも美味しそう…」

「ノエちゃん後でちよつとプリンちよーだい?」

「いいよー、ってこれ全部ライ先輩が作ったんですか?」

「ああ、口に合えばいいが…店長?何だか楽しそうですね?」

「そうやろー?早速すいちちゃんと仲良くなれたんよ!」

とこちゃんはそう言っ私に優しく抱き着いて頭を撫でてくれた。

「へへー、いいでしょお兄ちゃん?」

「もうそこまで仲良くなったのか…何かあったのかい?」

お兄ちゃんは私たちが仲良くなったことに不思議に思ったのか首

を傾げながら聞いてきた。

そんなお兄ちゃんの様子を見て私とどこちゃんは顔を見合わせた。言いたいことをとどこちゃんは察してくれたようで、そのままお兄ちゃんに応えてあげた。

「…内緒！」

「？」

またお兄ちゃんは更に首を傾げていた。

皆とお茶会を楽しんだ後、私以外の不知建のメンバーはそれぞれ帰宅した。

皆が帰る時間と店の営業が終わる時間が近かったので、私はそのままお兄ちゃんを待って一緒に帰ることにした。

間もなくしてお兄ちゃんの帰宅が準備ができたので、私たちも店を後にした。

帰る前にとどこちゃんは、いつでも遊びにおいで、と店の前で手をヒラヒラと振りながら私たちを送ってくれた。

とどこちゃんと話していると結構音楽の趣味も合ったので、個人的にまた来ることを約束した。

そしてお兄ちゃんと道を並んで家まで歩きながら帰宅をした。

「それにしてもお兄ちゃんのバイト先いいところだね？私も皆もすっかり気に入っちゃったよ。」

「それはよかった。でも皆で来るなら事前に言っただけよかった気がするけどね。」

「あはは、急に決まっちゃったから…でもごめんね…？」

「ううん、とこさんもすいせいのこと気に入っていたみたいだし、また皆でおいで。」

「うん！不知建のメンバーも勿論だけど、あくたんとかトワも誘ってみるね！」

そう言うとお兄ちゃんは笑ってくれた。

久しぶりにお兄ちゃんと一緒に帰ることができるのが嬉しくもあり、私はお兄ちゃんの左腕に抱き着いてみた。

「おっと、すいせい?」

「えへへ、家着くまでこうして帰ろうよ!」

「ちよつと恥ずかしいな…」

お兄ちゃんは恥ずかしそうな顔をしていたけれど、決して嫌がったりはしなかった。

そのまましばらく家に向かって歩いていっていると、お兄ちゃんから話しかけられた。

「すいせい。」

「うん?」

「僕がバイトを始めた理由…気になるかい?」

「!!…どうして?」

「さつきとこさんと話をしているのが少し聞こえてね…店を出る前にもとこさんから、すいせいに話してあげたらって言われたんだ。」

とこちゃん早速言ってくれたんだ…

仕事が早すぎるケルベロスに関心をしているとお兄ちゃんが話の続きを始めた。

「すいせいは僕がもう大学の合格が決まっているのは知っているだろう?それで大学での生活を考えると1人暮らしをした方がいいかな、って思っただけから少しずつお金を貯めているんだ。」

「ええっ!?お、お兄ちゃん…1人暮らししちゃうの…?」

「今の予定ではね。来年はすいせいも受験があるし、集中できる環境を作る為にもちようどいいかなって思っただけだ!!」…すいせい?」
思わずお兄ちゃんの言葉を遮ってしまった。

お兄ちゃんが私から離れてしまう?毎日一緒にいられなくなる?…そんなの嫌だ…

「私いい子にしているから!勉強も頑張るし…お兄ちゃん達の家の手伝いももつとするし…嫌いな野菜も頑張つて食べるし…それから…だから…傍にいてよ…!」

抱きしめているお兄ちゃんの腕を更に強く抱きしめた。むしろ縋

りついていると言った方が正しいかもしれない。

まるで駄々っ子のようになってしまったけど…それでもお兄ちゃんがいなくなるのは嫌だ…

しばらく顔を俯かせているとお兄ちゃんが右手で頭を撫でてきた。

「やれやれ…母さんの言ったとおりになったね…」

「お母さん…?」

何で今お母さんのことが出てきたの…?

「実は1人暮らしを大学生になったら始めてみるつもりだったって母さんと父さんに電話で話していたんだ。父さんはすんなり了承をしてくれたんだけど、母さんは姉さんとすいせいが絶対反発するから止めておいた方がいい、って言ってたんだ。」

「お母さん…ちなみにお姉ちゃんは何て言ってたの?」

「…家の床で大の字になりながら泣きながら反対されたよ…まあそれでもすいせいが了承したら認めるって言ってた。」

「うわあ…お姉ちゃん子供じゃん…」

「姉さんには僕が話したとは言わないでくれ…姉さんの名誉のためにも…」

こう言っただけでも家だったら子供みたいに駄々をこねたかもしれない。あと家に帰ったらお父さんに電話で説教しておこう。

「まあバイトを始めた理由は1人暮らしのこともそうだけど、とこさんの喫茶店は前からお客として通っていたんだ。そこでバイトの募集をしていたからちようどいい機会と思って働き始めたんだ。」

「そうだったんだ。いつ頃から通ってたの?」

「確か僕が高校受験の頃からだから…3年くらいかな?とこさんともそれくらいの付き合いだね。」

「そんなに!?!めっちゃくちや常連じゃん!」

あれ、もしかしてお兄ちゃんとこちゃんのこと…

「お兄ちゃん…もしかしてとこちゃんのこと好き?」

「ん?ああ、好きだよ?」

「ええっ!?!」

やっぱり…確かにお兄ちゃんの女の子の友達ってそらちゃんやA

ZKiちゃんみたいに大人っぽい人が多いから、年上が好きなのかな
…
「とこさんが淹れる珈琲は美味しいし、仕事も熱心で尊敬できるところも多いから人として凄い好きだな。」

「…えっ?」

「ん?」

「…私はお兄ちゃんがいつも通りで安心したよ…」
「??」

お兄ちゃんは不思議そうに首を傾げていた。

多分しばらくお兄ちゃんに彼女はできないだろうことを確信して
何となく安心した。

そして、お兄ちゃんの腕を手放し、正面からお兄ちゃんに抱き着いた。

「…それでお兄ちゃん1人暮らししないんだよね?」

「…すいせいが僕の1人暮らしを望まないなら、しばらくはね。」

「約束だよ…?」

「もちろん。」

お兄ちゃんは私をあやすように背中を撫でてくれた。お兄ちゃんの胸、凄く安心する…

「さて、姉さんも家で待ってるだろうから早く帰ろうか?」

「うん! よーし、お兄ちゃん! 家まで競争しよ! よーい…ドン!」

「あっ! ずるいぞすいせい!」

私とお兄ちゃんは同時に駆け出した。

いつかはお兄ちゃんは家を出ちゃうかもしれない…

でも今の間だけはもう少しだけ一緒に…